

一橋大学審査学位論文

博士論文

反証事例が潜在的ステレオタイプ・偏見に及ぼす影響

埴田 健司

一橋大学大学院社会学研究科

SD061024

THE INFLUENCE OF COUNTER-EXEMPLARS ON IMPLICIT STEREOTYPES
AND PREJUDICES

HANITA, Kenji

Doctoral Dissertation
Graduate School of Social Sciences
Hitotsubashi University

目次

第1部 問題

第1章	本論文の背景と目的	2
1-1.	はじめに	2
1-2.	本論文の視点	3
1-3.	本論文の構成	5
第2章	潜在的ステレオタイプ・偏見の定義・測定方法と形成・変容過程	9
2-1.	非意識的な情報処理過程への着目	9
2-2.	潜在的ステレオタイプ・偏見の定義と測定方法	12
2-3.	潜在的ステレオタイプ・偏見の形成と変容	16
第3章	カテゴリー知識の部分的活性化による潜在的ステレオタイプ・偏見の低減	21
3-1.	カテゴリー表象の多面的・階層的モデル	21
3-2.	表象の部分的活性化に関する実証研究	27
3-3.	反証事例による潜在的ステレオタイプ・偏見の低減	30
第4章	実証研究の目的と概要	37
4-1.	本論文の基本的な仮説	37
4-2.	実証研究の概要	37
4-3.	研究で用いる測定方法	42

第2部 実証的検討

第5章	研究 1-1: 新奇の反偏見事例が潜在的偏見に及ぼす影響－肥満者 に対する偏見を用いた検討－	47
5-1.	問題と目的	47
5-2.	方法	49
5-3.	結果	53
5-4.	考察	57
第6章	研究 1-2: 反偏見事例による潜在的偏見の低減に評価の顕現性が 及ぼす影響－黒人に対する偏見を用いた検討－	61
6-1.	問題と目的	61
6-2.	方法	63
6-3.	結果	67
6-4.	考察	70
第7章	研究 2-1: 伝統的・非伝統的女性の事例想起が潜在的性役割観に及 ぼす影響 (1) －女子大学生を対象とした検討－	74
7-1.	問題と目的	74
7-2.	方法	76
7-3.	結果	78
7-4.	考察	81
第8章	研究 2-2: 伝統的・非伝統的女性の事例想起が潜在的性役割観に及 ぼす影響 (2) －男女大学生を対象とした検討－	85
8-1.	問題と目的	85
8-2.	方法	86
8-3.	結果	88
8-4.	考察	93

第9章	研究 3-1: 反ステレオタイプ事例の解釈が潜在的ステレオタイプ に及ぼす影響 (1)	96
9-1.	問題と目的	96
9-2.	方法	98
9-3.	結果	101
9-4.	考察	104
第10章	研究 3-2: 反ステレオタイプ事例の解釈が潜在的ステレオタイプ に及ぼす影響 (2)	107
10-1.	問題と目的	107
10-2.	方法	108
10-3.	結果	111
10-4.	考察	113
第3部	総合考察	
第11章	研究知見のまとめと解釈	116
11-1.	本論文の目的と研究視点の振り返り	116
11-2.	研究知見のまとめ	120
11-3.	研究知見の全体考察	122
第12章	本論文の意義と今後の展望	127
12-1.	本論文の意義と示唆	127
12-2.	本論文の限界と今後の展望	129
12-3.	結論	133
引用文献		134

第 1 部 問題

第1章 本論文の背景と目的

1-1. はじめに

私たちは、「女性は家庭的」、「黒人は運動神経が良いが、攻撃的」といったように、特定の社会的カテゴリーに対して、何らかの属性（性格や能力、身体的特徴など）を結びつけて捉えている節がある。また、社会的カテゴリーには、「黒人は怖い、嫌」といったように、ネガティブな感情価（valence）が結びつけられている場合もある。社会的カテゴリー（以下、カテゴリーと表記する）に強く結びつけられた属性と感情価は、それぞれステレオタイプ、偏見と呼ばれる。

ステレオタイプと偏見は、カテゴリーに関する知識として記憶内に貯蔵されていると考えられる。そして、他者との相互作用場面において、私たちは時としてその人物が属すカテゴリーを手がかりとし、ステレオタイプや偏見にあてはめてその人物を解釈することがある。たとえば、「黒人だから、運動神経は良いだろう」といった解釈は、黒人ステレオタイプを利用したものと言える。ステレオタイプを利用した解釈は、他者の正確な理解につながるわけでは必ずしもないが、個人に固有の様々な情報を統合して解釈する場合に比べて、単純化して他者を捉えることを可能にする。すなわち、ステレオタイプには、複雑で混沌とした外界の世界を理解する際、有効な認知的枠組みとして機能する側面がある（McGarty, Yzerbyt, & Spears, 2002）。このことに関連して、ステレオタイプ・偏見研究の先駆的研究者である Allport も、ステレオタイプは「知覚および思考の単純さを維持する装置」として機能すると述べている（Allport, 1954 原谷・野村(訳), 1968）。

しかし、ステレオタイプや偏見に頼って他者を認知・解釈することには問題点もある。ステレオタイプや偏見は差別につながる可能性を孕んでおり、「人を見た目で判断してはいけない」といった言葉に代表されるような、現代の平等主義的な社会的規範から逸脱するものでもある。性別や年齢などによって自分の能力や適性が否定的に判断されたと知ったら、怒りなどのネガティブな感情が生起するだろうし、逆にたとえそれが望ましい判断であったとしても、個性が無視された感じがして不快な気分になることもあるだろう。

こうした問題点から、ステレオタイプや偏見を用いないようにするためにはどのようにすればよいか、どのようにすればそれらを低減させたり解消させたりすることができるの

かを明らかにすることは、社会的な意義があると考えられ、多くの社会心理学の研究によって実証的に検討されてきた。特に、ステレオタイプや偏見が、カテゴリーを表すラベル（e.g., 黒人）や特徴（e.g., 肌の黒さ）などのカテゴリーに関連する手がかりによって自動的に活性化することが示されて以降（Devine, 1989; Fazio, Jackson, Dunton, & Williams, 1995）、ステレオタイプや偏見の非意識的・潜在的な側面（潜在的ステレオタイプ・偏見）に焦点をあてた研究が盛んに行われている。潜在的ステレオタイプや偏見は、集団間相互作用における差別的な行動、特に非言語的な差別行動につながることを示されている（Dovidio, Kawakami, & Gaertner, 2002; Dovidio, Kawakami, Johnson, Johnson, & Howard, 1997）。こうしたことから、潜在的ステレオタイプや偏見をどのようにすれば低減できるのかを解明することは、差別などの問題行動を減少させるためにも重要な課題である。

近年、潜在的ステレオタイプや潜在的偏見が、それらに一致しない人物（反証事例）によって低減することを示す研究がいくつか報告されている。では、なぜ、反証事例によって潜在的ステレオタイプ・偏見は低減するのだろうか。また、どのような場合に低減し、どのような場合には低減しないのだろうか。こうした点について、これまでに統一的な見解が示されることはほとんどなかった。そこで、本論文では、以上のような影響が生じるプロセス・メカニズムについて議論する。そして、反証事例の呈示、想起、解釈の3つの事象において、低減効果がどのような場合に生じ、どのような場合には生じないのかを実証的に検討することを目的とする。

1-2. 本論文の視点

反証事例によって潜在的ステレオタイプ・偏見が低減することは、これまでにいくつかの研究で示されてきた。例えば、Dasgupta and Greenwald (2001) は、一般的にポジティブに評価されている黒人の著名人（e.g., Denzel Washington: 映画俳優）と、ネガティブに評価されている白人の著名人（e.g., Jeffrey Dahmer: 連続殺人鬼）の写真を参加者に見せたところ、人種に関する潜在的偏見（黒人よりも白人を潜在的に好む傾向）が低減したことを報告している。従来、潜在的ステレオタイプ・偏見は、カテゴリーに関連する事象が繰り返し経験されることによって獲得されるため、安定的で、変容するとしても多大な努力と時間が必要であると考えられてきた（Bargh, 1999; Wilson, Lindsey, & Schooler,

2000)。しかし、以上の研究から示唆されるように、潜在的ステレオタイプや偏見は、それほど多くの時間をかけずとも、反証事例の影響を受けて変容するようである。

では、このことはどのように説明できるだろうか。ステレオタイプや偏見は、カテゴリに関する知識として捉えることができるが、それらの変容は、知識が古いものから新しいものへ置き換わることによって生じていると考えることもできる。しかし、反復学習によって潜在化した知識が反証事例の呈示などによって短時間のうちに置き換わるとは考えづらい。また、短時間で置き換わる“今ここ”の知識であるとするれば、ステレオタイプや偏見が社会的・文化的に共有されていることを説明することもできなくなってしまうだろう。

本論文では、上記の「置き換え」とは異なるメカニズムによって、潜在的ステレオタイプ・偏見における反証事例の影響を説明可能であることを議論する。具体的には、カテゴリに関する知識が、どのように構成・組織化されているか、すなわち、カテゴリ知識の構造に着目する。そして、反証事例によって、カテゴリに関する知識のうち、ステレオタイプや偏見に反する側面が部分的に活性化することで、潜在的ステレオタイプ・偏見が低減することを議論する。

連合ネットワークモデル (Collins & Loftus, 1975) によれば、私たちの記憶内に保持されている様々な情報は、関連するもの同士が結びつけられたネットワークを形成しているという。このモデルに基づけば、ステレオタイプはカテゴリラベルと結びついている属性、偏見はカテゴリラベルと結びついている感情価であると考えられる。さらに、あるカテゴリに関する知識には、属性や感情価といった抽象的な情報以外にも、特定の人物(事例)などの具体的な情報も含まれている。その一方で、私たちは、ステレオタイプや偏見とは一致しない人物がいることも知っている。特に、人種や性別など、見た目の特徴からカテゴリの成員であるかどうかを判断できるようなカテゴリの場合、そのカテゴリに関する知識の中には、ステレオタイプ・偏見に一致する情報や一致しない情報が多く含まれていると思われる。

こうしたことから、本論文では、ステレオタイプや偏見に一致する情報はもとより、それらに反する情報もまた、カテゴリに関する知識として記憶内に保持されていると想定する。すなわち、カテゴリに関する知識は、多面的かつ階層的な構造を有していると想定する。こうした知識構造を有するカテゴリにおいては、カテゴリに関する知識が全体として活性化するのではなく、外部からの刺激の内容や文脈に関連する側面が部分的に

活性化すると考えられる。ここで、カテゴリーに関する知識の中で、反証事例はステレオタイプや偏見に反する側面との関連性が高いと言える。したがって、反証事例が呈示されたり、想起されたりした場合は、カテゴリー知識中の反ステレオタイプの、あるいは反偏見的な側面の活性化が強まるだろう。

本論文では、反証事例による潜在的ステレオタイプ・偏見の低減は、以上のような原理（部分的活性化）によって生じていると考える。ただし、カテゴリーに関する知識の特定の側面が部分的に活性化するためには、いくつかの条件が必要であるとも言える。第1に、知識が活性化するためには、知識が記憶内に存在している必要がある。このことから、カテゴリーに関する知識として、ステレオタイプや偏見に一致しない知識が持たれているほど、潜在的ステレオタイプ・偏見は反証事例によって低減しやすいだろうという仮説が導ける。第2に、反証事例によってステレオタイプや偏見に一致しない側面が活性化したときに、一致する側面は活性化しないことが重要だろう。一致・不一致の両側面が活性化してしまえば、潜在的ステレオタイプ・偏見への影響が相殺されてしまうからである。こうしたことから、ステレオタイプや偏見に一致しない側面が、一致する側面よりも強く活性化するとき、潜在的ステレオタイプ・偏見は低減するだろうという、第2の仮説が導ける。

本論文では、以上の2つを基本的な仮説とし、反証事例の呈示、想起、解釈の3つの事象において、反証事例が潜在的ステレオタイプ・偏見に及ぼす影響を実証的に検討する。

1-3. 本論文の構成

本論文は、問題・実証的検討・総合考察の3部構成とした。

第1部の「問題」では、本論文で問題としていることや、研究の目的について述べる。

第1章（本章）では、本論文の目的と概要を簡単に述べた。改めて目的を言うと、反証事例による潜在的ステレオタイプ・偏見の低減が、どのようなメカニズムによって生じるのか、どのような場合に低減が生じやすいのかを検討することが本論文の目的である。

こうした目的のために、第2章では、潜在的ステレオタイプ・偏見の定義や測定方法を述べる。そして、潜在的ステレオタイプ・偏見がどのようにして形成されるのかを考慮したうえで、それらがどのようにして変容するのかを議論する。ここで、潜在的ステレオタ

イプ・偏見の低減が、カテゴリーに関する知識の中の反ステレオタイプの・反偏見的な側面の部分的活性化が原因となって生じることを主張する。

反ステレオタイプの・反偏見的な側面が活性化するためには、そうした情報がカテゴリーに関する知識として記憶内に保持されている必要がある。そこで第3章では、ステレオタイプや偏見に一致する情報に加え、それらに反する情報もカテゴリーに関する知識として記憶内に貯蔵されうることを想定した知識構造モデルを新たに提唱し、その中の特定の側面が状況に応じて部分的に活性化しうることを議論する。そして、反証事例が潜在的ステレオタイプ・偏見に影響することを示した先行研究を概観し、それらの研究知見が、本論文で想定している、カテゴリー知識中の反ステレオタイプの・反偏見的な側面の部分的活性化によって説明可能であることを議論する。

第4章では、第3章までの議論をまとめ、反証事例が潜在的ステレオタイプ・偏見に及ぼす影響に関する仮説を呈示する。本論文では、カテゴリーに関する知識のうちの、反ステレオタイプ・反偏見的な側面の部分的活性化が、潜在的ステレオタイプ・偏見の低減をもたらすと主張する。このことから、反ステレオタイプ・反偏見的な情報が既有知識として持たれている場合に低減効果は生じやすいという仮説を導く（基本仮説1）。また、カテゴリー知識の中のステレオタイプや偏見に反する側面が、一致する側面よりも強く活性化する場合に低減効果が生じるという仮説も導く（基本仮説2）。そして、これらの仮説を、反証事例の呈示・想起・解釈の3つの事象に適用し、どのような場合に低減効果が生じると考えられるかを説明し、仮説を検証するための実験の概要を述べる。

第2部「実証的検討」では、反証事例の呈示・想起・解釈が、潜在的ステレオタイプもしくは潜在的偏見に及ぼす影響を検討した実験の内容と結果を報告する。

第5章と第6章では、反偏見事例の呈示が潜在的偏見に及ぼす影響について検討した実験を報告する。基本仮説1より、反偏見事例（e.g., ポジティブに評価される人物）がよく知られている著名人である場合、こうした事例の呈示は、カテゴリー知識中のポジティブな感情価を活性化させ、潜在的偏見を弱めると考えられる。言い換えれば、呈示される反偏見事例が新奇の人物である場合には、潜在的偏見は弱まらないだろう。第5章（研究1-1）では、このことを肥満者の能力に関する偏見（太った人を無能であるとする傾向）を題材として検討した。また、基本仮説2より、著名な反偏見事例が呈示された場合でも、その事例のポジティブさが顕現的に示されたときのほうが、潜在的偏見は低減しやすいと考え

られる。第6章(研究1-2)ではこの仮説を、人種に関する偏見(白人よりも黒人を好ましくないとする傾向)を題材として検討した。

第7章と第8章では、ステレオタイプに一致する、もしくは一致しない事例の想起が、潜在的ステレオタイプに及ぼす影響について検討した実験を報告する。具体的には、「男は仕事、女は家庭」という伝統的な性役割に関するステレオタイプ(性役割観)を題材とした。そして、主婦に代表される伝統的女性をステレオタイプに一致する女性、キャリア女性に代表される非伝統的女性をステレオタイプに一致しない女性と位置づけ、それぞれのタイプにあてはまる具体的な人物の想起が、潜在的な性役割観に及ぼす影響を検討した。非伝統的女性の事例を想起した場合には性役割に一致しない知識が活性化すると考えられるため、伝統的女性の事例を想起した場合に比べ、潜在的な性役割観は弱まることが予測される。第7章(研究2-1)では、このことを、女子大学生を対象とした実験で検討した。一方で、各タイプの女性に関しては、男性よりも女性のほうが多くの知識を持っていると思われる。すると基本仮説1より、非伝統的女性の想起による潜在的性役割観の低減は、男性よりも女性において生じやすいと考えられる。このことを検討するため、第8章(研究2-2)では、男女大学生を対象に実験を行い、潜在的性役割観に対する事例想起の影響の強さが、参加者の性別によって異なるかどうかを検討した。

第9章と第10章では、反ステレオタイプ事例の解釈方略が、潜在的ステレオタイプに及ぼす影響について検討した実験を報告する。私たちはステレオタイプに反する人物に出会ったとき、その人物を既存のステレオタイプに照らし合わせて、「〇〇らしくない」と解釈する場合(例えば、「女性は“弱い”けど、この人はそうではない」といった解釈)があるだろう。このように反ステレオタイプ事例をステレオタイプと関連づけて解釈すると、既存のステレオタイプを参照することになってしまうため、カテゴリー知識中のステレオタイプに一致する側面が活性化してしまう。基本仮説2に基づけば、このような解釈方略が用いられた場合には、潜在的ステレオタイプは弱まらないと考えられる。一方で、反ステレオタイプを、既存のステレオタイプではなく、反ステレオタイプの属性と関連づけて解釈した場合(例えば、「この女性は“強い”」といった解釈)には、潜在的ステレオタイプは弱まるだろう。第10章(研究3-1)と第11章(研究3-2)では、「男性は強い、女性は弱い」といった性別に関するステレオタイプを題材に、反ステレオタイプ事例に対する解釈方略を操作し、以上の仮説について検討した。

第3部の「総合考察」では、第2部で報告する実証的研究で得られた知見をまとめ、本論文の意義や示唆、問題点について述べる。

第11章では、本論文での目的や検討事項を振り返り、各研究で得られた研究知見をまとめる。そして、研究知見を総合して、反証事例によって潜在的ステレタイプや潜在的偏見がどのような場合に低減し、どのような場合には低減しなかったのかを議論する。

第12章では、まず本論文の意義について述べる。その中で、カテゴリー表象の多面的・階層的モデルと、このモデルから想定される部分的活性化の原理が、潜在的ステレオタイプ・偏見における反証情報の影響を説明するための包括的な枠組みとして有効であることを論じる。また、本論文で検討できなかった点や問題点について指摘したうえで今後の課題について議論し、最後に結論を述べる。

第2章 潜在的ステレオタイプ・偏見の定義・測定方法と形成・変容過程

本論文の目的は、ステレオタイプや偏見に反する事例（反証事例）が、どのようなメカニズムによって潜在的ステレオタイプや偏見に影響を及ぼすのかについて議論し、反証事例の呈示や想起、解釈によって、どのような場合に潜在的ステレオタイプ・偏見が低減するのかを実証的に検討することである。本章ではその足掛かりとして、まず、潜在的ステレオタイプ・偏見に着目することの意義と、それらの定義や測定方法を述べる。また、形成過程についても議論し、潜在的ステレオタイプ・偏見をどのようにすれば弱められるかという問いに対する本論文の立場を述べる。

2-1. 非意識的な情報処理過程への着目

意識できないところの働き

調査に関する講義で、男性と女性それぞれに対して抱かれているイメージや性役割観を測定するための質問を受講生に考えてもらうことになったとしよう。イメージに関しては、「リーダーシップのある」、「繊細な」といった言葉が男女それぞれにあてはまるかどうかを回答してもらう形式の質問が、性役割観に関しては、「男性も育児参加すべきだ」といった意見に賛成するかどうかを回答してもらう形式の質問が多く提案されることだろう。

実際、心理学の研究では、人の思考や価値観などを測定するために、このような自己報告による方法が伝統的に用いられてきた。こうした方法は、どんなことを考えているか、ある事象に対してどんな意見を持っているかを直接的に観察することはできないが、自分自身の思考にはアクセスでき、把握することができるという前提のもとで用いられてきた。思考や判断、行動は意識的なものであり、それをコントロールしているのも人の意識である。このような考え方のもと、研究が進められてきた。

しかし、認知心理学や、認知心理学の理論や方法を社会心理学に取り入れた社会的認知研究を中心として、私たちの思考や判断・行動が、意識できず、それゆえにコントロールできないところの働きによって影響を受けることが、多くの研究で示されるようになった。例えば、Bargh and Pietromonaco (1982) は、敵意的な単語を、“見えた”という感覚が

生じないような非常に短い時間 (i.e., 閾下) で参加者に呈示した。そして、敵意的であるかどうか曖昧な人物の行動記述文を示し、人物の印象を評定させた。するとその人物は、敵意的な単語を閾下呈示されていなかった場合に比べ、敵意的に評定されていた。敵意的な単語自体は意識的には見えていないため、この実験結果は、非意識的な情報処理過程によって敵意的な単語が処理され、知覚者の意識を介さず、対象人物に関する判断に影響を及ぼしたと解釈できるだろう。また、同様の実験結果は、池上・川口 (1989) や森・坂元 (1997) によって、日本でも報告されている。

こうした非意識的な情報処理過程は一般に自動的過程と呼ばれ、環境内に存在する特定の手がかりによって自動的に開始される。また、自動的過程による情報処理によって判断や行動などが影響を受けることを自動性と呼ぶ。一方、意識的な情報処理過程は統制的過程と呼ばれ、知覚者の注意や意図によって意識的に開始される。そして、このように2つの過程を対置して人の情報処理過程を理論化したモデルが、対人認知や説得による態度変容など、様々な研究領域で提唱されてきている (for reviews, Chaiken & Trope, 1999; 池上, 2001)。

ステレオタイプ化のプロセス：活性化と適用

ステレオタイプを用いて他者を判断することをステレオタイプ化 (stereotyping) と呼ぶが、そのプロセスにも自動的過程と統制的過程が関わっていることが指摘されている。Devine (1989) によれば、カテゴリーに関連する手がかりが存在すると、そのカテゴリーに対して抱かれているステレオタイプは自動的に活性化するという。彼女はこのことを、次のような実験で検証している。実験では、参加者に黒人ステレオタイプに関連する単語 (e.g., Black, Negro, poor, lazy) が閾下で呈示された。その後、敵意的であるかどうか曖昧な人物の紹介文を、人種を特定せずに示し、その人物に対する印象を評定させた。その結果、事前に黒人ステレオタイプ関連語を多く閾下呈示されていた場合は、そうでなかった場合に比べて、人物の攻撃性が高く評定されていた。この結果は、黒人ステレオタイプ関連語が事前に呈示されていたことによって、黒人ステレオタイプとして典型的な属性である攻撃性概念が活性化していたために生じたと解釈された。

こうしたことから、ステレオタイプはカテゴリーに関連する手がかりによって自動的に活性化し、その後の判断などに用いられやすくなると言える。ステレオタイプが自動的に活性化することは、ジェンダー・ステレオタイプ (e.g., Banaji, Hardin, & Rothman, 1993;

Blair & Banaji, 1996) や高齢者ステレオタイプ (e.g., Perdue & Gurtman, 1990) でも確認されている。また、カテゴリーに対する態度 (i.e., 偏見) も自動的に活性化することが示されている (e.g., Fazio *et al.*, 1995)。

ステレオタイプが自動的に活性化してしまうのに対して、活性化したステレオタイプをカテゴリーの成員個人にあてはめるかどうかは、意識的に統制可能であると考えられている (Devine, 1989; Gilbert & Hixon, 1991)。すなわち、ステレオタイプ化のプロセスは、ステレオタイプの活性化段階とその使用 (適用) の段階に分けられ、活性化段階は自動的に、適用段階は意識的・統制的になされる (図 2-1 参照)。

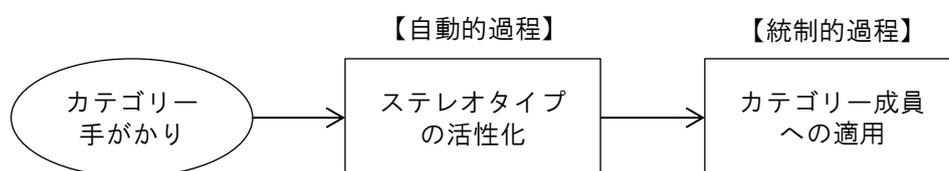


図 2-1. ステレオタイプ化のプロセス

潜在的ステレオタイプ・偏見に着目する意義

ステレオタイプ化のプロセスが、自動的な活性化と統制的な適用の段階に分かれていることから、ステレオタイプや偏見を避けるためには、活性化したステレオタイプや偏見の影響を受けないよう、自らの判断や行動を意識的に統制することが肝要であると言える。しかし、意識的に統制するためには、認知資源や制御資源が必要であるため、これらが不足する状況では統制は困難になる (Gilbert & Hixon, 1991; Muraven & Baumeister, 2000)。また、ステレオタイプを用いないよう意識的に抑制した後では、返ってステレオタイプを用いやすくなってしまふ (リバウンド効果) ことも示されている (Macrae, Bodenhausen, Milne, & Jetten, 1994)。こうしたことから、ステレオタイプや偏見を避けるためには、意識的な統制や抑制だけでは必ずしも十分ではないことが示唆される。

ステレオタイプや偏見を避けるうえで有効となるもう 1 つの戦略は、適用の前段階、すなわち自動的活性化を防ぐことである。活性化が生じなければ、ステレオタイプを使用した判断も必然的に生じないと考えられるため、どのような場合にステレオタイプや偏見の自動的活性化が生じないのかを明らかにすることは、理論的にも社会的にも意義のあるこ

とだろう。そこで本論文では、自動的過程において非意識的に処理されると考えられる、潜在的ステレオタイプや潜在的偏見に着目し、どのようにすればそれらを弱めることができるのかを検討する。

2-2. 潜在的ステレオタイプ・偏見の定義と測定方法

本論文では、潜在的ステレオタイプや潜在的偏見を扱う。このセクションでは、これらの定義を述べ、どのようにすればそれらを測定できるのかを説明する。

潜在的ステレオタイプ・偏見の定義

まず、ステレオタイプと偏見の定義を確認しておきたい。社会心理学の教科書などでは、ステレオタイプは一般に、「特定の社会的カテゴリーや集団の成員が持つ属性、たとえば性格特性や能力、身体的特徴などに関する、画一化され、誇張された信念」と定義され、認知的な側面が強調されることが多い。これに対し、偏見はそこに評価的・感情的要素（特にネガティブな要素）が加わったものとして概念化される（e.g., 唐沢, 2001a; 上瀬, 2002; 潮村, 2004）。また、ステレオタイプと偏見は、態度と関連づけて捉えられることもある。態度は、認知・感情（評価）・行動の3つの成分に分けて捉えられることがあるが（Rosenberg & Hovland, 1960）、これら3つの成分との関係では、ステレオタイプは認知成分、偏見は感情成分に対応していると言える。このように考えると、ステレオタイプと偏見は、特定の社会的カテゴリーに対する態度ということもできるだろう。

態度に関する研究では、態度にも、知覚者本人に意識され、自己報告可能な態度と、知覚者本人には意識できず、それゆえに正確に自己報告できない態度が存在することが指摘されている（e.g., Greenwald & Banaji, 1995）。前者は顕在的態度（explicit attitude）、後者は潜在的態度（implicit attitude）と呼ばれる。近年のステレオタイプ・偏見の研究は、態度研究と密接にかかわって発展してきている側面がある。そこで、以下では、潜在的態度の定義を紹介し、それを援用する形で潜在的ステレオタイプと潜在的偏見の定義を述べる。

Greenwald and Banaji (1995) は、潜在的態度を「社会的な対象への好ましい、あるいは好ましくない感情・思考・行動を媒介する、内省することのできない、あるいは正確に内省することのできない過去の経験の痕跡」と定義している。すなわち、知覚者本人が

内省できない、あるいは正確に内省できない態度が潜在的態度である。より操作的に言えば、潜在的態度は対象となる概念と感情価 (i.e., ポジティブーネガティブ) 間の非意識的な連合であり、対象概念への接触によってその概念と連合する感情価が活性化することで、判断や行動に影響を及ぼすと考えられている (Greenwald, Banaji, Rudman, Farnham, Nosek, & Mellott, 2002)。これに対し顕在的態度は、知覚者本人に意識され、内省によって自己報告できる態度であり、統制的過程を通じて判断や行動に影響を及ぼすと考えられている (Wilson *et al.*, 2000)。

偏見は態度の成分のうち、感情成分に対応している。そして、潜在的態度は、態度対象の概念と感情価の連合である。よって、潜在的偏見は、カテゴリーに対する潜在的態度であり、カテゴリーと感情価の連合として捉えられる。一方、ステレオタイプは態度の成分でいえば認知成分に対応しており、性格特性などの認知的な側面に言及する概念である。よって、潜在的ステレオタイプは、カテゴリーと認知的属性との連合として捉えることができる。

以上のように、潜在的ステレオタイプと潜在的偏見は、カテゴリーと連合しているのが認知的属性であるのか感情価であるのかが異なっているため、概念上でも測定上でも区別できる (Wittenbrink, Judd, & Park, 2001a)。煩わしくとも「潜在的ステレオタイプ・偏見」と併記してきたのはこのためである。しかし、両者は、カテゴリーとの連合であるという点で共通しており、その変容は、連合の強さの変化として捉えることができる。よって、両者とも同様のプロセスやメカニズムによって変容すると想定できるだろう。そこで以下では、両者を区別する必要がない文脈では併記をなるべく避け、いずれかの用語だけを用いて論じていくことにする。

潜在的ステレオタイプ・偏見の測定

顕在的態度は知覚者の意識的な内省によって自己報告できる態度であり、質問紙上の質問項目 (尺度など) に回答してもらうなど、自己報告によって測定される。顕在的ステレオタイプも同様に自己報告によって測定可能で、例えば、「黒人は運動神経が良いと思いますか」と尋ね、同意の程度を回答してもらうことによって測定できる。

一方、潜在的態度を測定するためには、測定の対象者が態度を尋ねられていることに気づかないような、間接的な方法によって測定する必要がある。代表的な測定方法としては、感情的連続プライミング課題 (Affective Sequential Priming Task; Fazio *et al.*, 1995) や

潜在連合テスト (IAT: Implicit Association Test; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) が挙げられる。この他にも感情誤帰属手続き (AMP: Affect Misattribution Procedure; Payne, Cheng, Govorun, & Stewart, 2005) など、様々な方法が開発されており、各測定法の特徴や違いなどについても議論されている (e.g., Fazio & Olson, 2003; Wittenbrink & Schwarz, 2007)。感情的連続プライミング課題や AMP は、態度の対象概念と連合している感情価が、態度対象への接触によって自動的に活性化することを利用した方法である。IAT は、態度対象と属性間の潜在的な連合の強さを、刺激の分類課題を通して測定しようとする方法である。また、IAT は、対象を何にするのか、どのような属性を取り上げるのかによって、態度だけでなく、ステレオタイプや集団に対するアイデンティティなども測定可能な、汎用性の高い測定方法である。本論文の実証研究では IAT を用いるため、ここで白人・黒人に対する潜在的態度 (i.e., 人種に関する潜在的偏見) を例に、その標準的な手続きを述べておく。

IAT では、態度対象 (例えば「白人」と「黒人」と属性 (例えば「良い」と「悪い」といった評価) 間の連合強度を測定するために、各態度対象と属性を表す刺激を分類する課題に取り組んでもらう。例えば、ポジティブな意味を持つ単語 (e.g., すばらしい) とネガティブな意味を持つ単語 (e.g., きたない) を、「良い-悪い」という属性次元上で分類する。IAT は、分類の仕方が異なるいくつかのブロックから構成されるが、重要となるのは対象と属性の各次元の分類カテゴリーを組み合わせで分類するブロックである。このとき、2種類の組み合わせを構成することができる。具体的には、「白人」または「良い」に該当する刺激を左側に、「黒人」または「悪い」に該当する刺激を右側に分類するブロックがある (図 2-2 の左側を参照)。このような分類カテゴリーの組み合わせは、黒人よりも白人のほうが選好される、人種に関する一般的な態度 (偏見) に一致していることから、一致ブロックと呼ばれる。もう 1 種類は、いずれかの次元の分類カテゴリーの位置を左右反対にした場合で、「白人」または「悪い」に該当する刺激を左側に、「黒人」または「良い」に該当する刺激を右側に分類するブロックである (図 2-2 の右側を参照)。こちらは、人種に関する一般的な態度 (偏見) とは反対の組み合わせになっていることから、不一致ブロックと呼ばれる。分類カテゴリーはコンピュータ画面の上部左右に示され、実験参加者は画面中央に次々と表示される刺激 (e.g., 「すばらしい」という単語) が左右どちらに分類されるかを、キー押しによって回答する。このとき、刺激を分類するのに要した時間 (反応時間) が記録される。

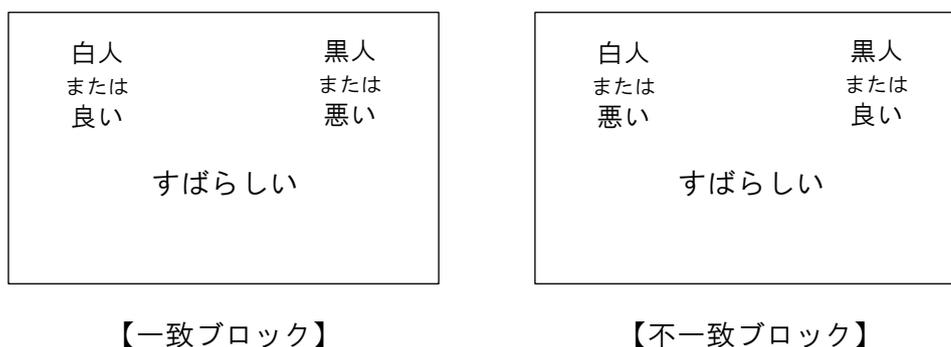


図 2-2. IAT における組み合わせ分類ブロックの模式図

ここで、黒人よりも白人に対してポジティブな潜在的態度、すなわち潜在的な人種偏見が持たれていると仮定すると、「良い」は「黒人」よりも「白人」と、「悪い」は「白人」よりも「黒人」と相対的に強く連合していることになる。このとき、一致ブロックでは連合しているもの同士が同じ側に位置することになり、分類は容易で、反応時間も速くなる。一方で、不一致ブロックでは逆に、分類は困難で、反応時間も遅くなる。さらに、人種偏見が強いほど、こうしたブロック間の反応時間の差は大きくなると考えられる。このような原理に基づけば、どちらのブロックがより速く分類できるかを得点化することで、概念と属性間の相対的な連合の強さを測定できる。

ただし、IAT で測定される連合強度は、あくまで相対的なものであることに注意が必要である。例えば、ここで例示した IAT で人種偏見的な態度が確認された場合、それは黒人に比べて白人のほうがポジティブに評価されているということであって、絶対的な意味で白人がポジティブに、黒人がネガティブに評価されているということでは必ずしもない。こうした限界はあるものの、IAT は以下の点で有用な方法である。まず、他の潜在指標よりも信頼性が高く (Bosson, Swann, & Pennebaker, 2000)、行動に対する予測力もある (for a review, Lane, Banaji, Nosek, & Greenwald, 2007)。また、IAT では、分類カテゴリーを変化させることによって、様々な対象－属性間の連合強度を測定できる。例えば、以上で例示した IAT の「白人－黒人」の部分で「高齢者－若者」に置き換えれば、年齢に関する潜在的偏見 (エイジズム) を測定できる。また、対象を「男性－女性」、属性を「独立的－依存的」とすれば、“女性は依存的である”という性別に関するステレオタイプの潜在的側面が測定できる。こうした利点もあって、潜在的ステレオタイプや潜在的偏見に

焦点をあてた多くの研究で IAT は用いられてきている。

2-3. 潜在的ステレオタイプ・偏見の形成と変容

潜在的ステレオタイプ・偏見の記憶内での表現形式と形成過程

潜在的ステレオタイプと偏見は、カテゴリーと連合している認知的属性・感情価であり、カテゴリーに関する知識として記憶内に貯蔵されている。では、それらは記憶内でどのように表されているのだろうか。また、どのようにして形成されるのであろうか。これらを理解することは、潜在的ステレオタイプや偏見がどのようにして変容するかを考えるうえで重要となるため、以下、順に述べる。

私たちは様々な情報を記憶内に保持しているが、情報を記憶内に取り込むためには、何らかの形式に変換（符号化）する必要がある。取り込まれた情報の記憶内での表現形式のことを心的表象（以下、表象）と呼ぶ。連合ネットワークモデル (Collins & Loftus, 1975) は表象モデルの1つであるが、このモデルでは、1つ1つの情報（概念）がノードとして表される。そして、関連するノード同士がリンクと呼ばれる連合で結びつき、ネットワーク構造を成していると考えられている。例えば、黒人ステレオタイプは、「黒人」を中心的なノードとして、「運動神経のよい」、「攻撃的」、「犯罪」などといったノードが結びついたネットワークとして表象されていると考えられる（図 2-3 参照）。

連合ネットワークモデルでは、ある情報が活性化（情報や概念が記憶内から取り出されやすい状態にあること）すると、その情報と連合している情報も活性化することが想定さ

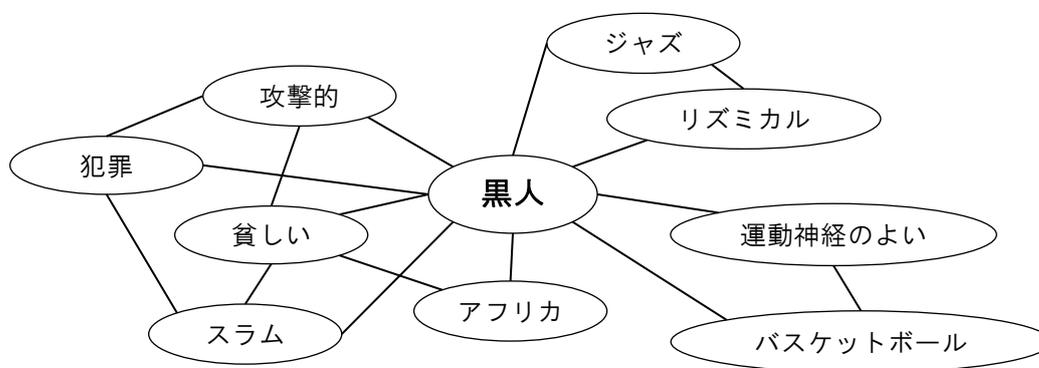


図 2-3. 連合ネットワークモデルに基づく黒人ステレオタイプ（森（1999）より）

れている。これを活性化拡散と呼ぶ。例えば、黒人カテゴリーに関連する手がかり刺激(e.g., 肌の黒さ)によって「黒人」が活性化すると、リンクでつながっているステレオタイプ特性(e.g., 運動神経の良い)も活性化する(Devine, 1989)。ステレオタイプの自動的活性化は、こうした活性化拡散の原理によって説明される。

以上のような活性化プロセスは、よく学習された知識表象においては、自動的に進行すると考えられる。言い換えれば、関連する情報同士が連合して表象され、その中のある情報の活性化によって連合している情報も自動的に活性化できるようになるためには、反復学習が必要になると言える。このことに関連して、Smith and DeCoster (2000) は、表象は低速学習と高速学習の2つの学習システムに則って形成されると主張している。低速学習システムでは、事例や経験が反復されることで関連する情報同士がゆっくりと結びつき、表象が形成される。一方、高速学習システムでは、ある事例や経験から意識的・論理的に推論することでそこに潜むルールを素早く学習し、表象を形成する。ステレオタイプに関していえば、前者のシステムによって潜在的ステレオタイプが、後者のシステムによって顕在的ステレオタイプが形成されると考えられよう。

潜在的ステレオタイプは変容するか？

潜在的ステレオタイプが、低速学習システムによってゆっくりと形成されるとすれば、その変容もまた、ゆっくりと進行すると考えられる。このことに関して、Wilson *et al.* (2000) は、潜在的態度は安定的であり、変容するとしても多大な労力と時間が必要だと主張している。人種や性別などに基づくステレオタイプは、顕在的にはあまり表明されないものの、潜在的にはいまだに保持されていることが多くの研究で示されているが(e.g., Blair & Banaji, 1996; Fazio *et al.*, 1995; Greenwald *et al.*, 1998)、こうした現状は Wilson *et al.* (2000) の言うように、潜在的ステレオタイプが変容困難であることを示唆している(Bargh (1999) も同様の主張をしている)。

しかし、以上の見方に反して、それほど多くの時間と労力を伴わずとも潜在的ステレオタイプが変容することを示す研究が蓄積されてきている(for reviews: Blair, 2002; Gawronski & Bodenhausen, 2006, 2011)。例えば、Wittenbrink, Judd, and Park (2001b) の実験では、参加者は最初に、人種に関する潜在的偏見を測定する IAT に取り組んだ。次に、黒人が口論の末、銃を手にとるといったシーンを含む映像か、黒人の家族がバーベキューをしているシーンを含む映像のいずれかを視聴した。そして、再度 IAT に取り組んだ。

その結果、映像は約2分間であったが、バーベキュー場面の映像を見た後では、潜在的な人種偏見が弱まっていたという。また、本論文では反証事例が潜在的ステレオタイプ・偏見に及ぼす影響に着目するが、反証事例を何人か呈示するだけで、潜在的偏見が低減することを示す研究もある。例えば、Dasgupta and Greenwald (2001) は、ポジティブな黒人著名人とネガティブな白人著名人 (i.e., 反証事例) それぞれ10名の写真をスライドショーのようにして、参加者に次々と見せた。このとき、各スライドにはその人物の名前と2つの文が書いてあり、参加者は2つの文のうち写真の人物にあてはまるのがどちらかを答えた。その後、潜在的な人種偏見の強さを測定したところ、上記のような黒人・白人著名人を呈示されていた場合は、著名人を呈示されていなかった場合に比べ、潜在的な人種偏見が弱まっていたことが示された。

潜在的ステレオタイプが変容する原因：本論文の視点

以上のような研究は、潜在的偏見があまり時間や労力をかけずとも変容することを示している。また、反証事例の呈示は潜在的ステレオタイプを弱めることも報告されている (Dasgupta & Asgari, 2004)。このように、簡便かつ短時間の実験的介入によって、潜在的ステレオタイプや偏見が低減するのはなぜだろうか。

この点に関して、Gawronski and Bodenhausen (2006, 2011) は、潜在的態度が変容する原因には次の2つがあるとしている。1つは、連合の構造的変化で、態度対象と連合している情報 (属性、感情価) が古いものから新しいものへ置き換わることによって、潜在的態度が変容するというものである。もう1つは、活性化パターンの変化であり、文脈との関連性などによって、態度対象と連合している情報のうち一部が活性化することで、潜在的態度が影響を受けるというものである。このとき、活性化する連合の感情価 (意味的内容) が異なれば、潜在的態度のポジティビティも変わってくることになる。そして、Gawronski and Bodenhausen (2006, 2011) は、Dasgupta たちの一連の研究で反証事例の呈示によって潜在的ステレオタイプ・偏見が低減したのは、後者の活性化パターンの変化が原因だろうと述べている。

連合の構造的変化による潜在的態度の変容は、学習プロセスを経た変容であるのに対し、後者の活性化パターンの変化による潜在的態度の変容は、対象に関して保持されている情報のうち異なる側面に焦点があてられることによる、状況依存的な変容であると言えるだろう。本論文は、潜在的ステレオタイプや偏見に反証事例が影響を及ぼすことに着目して

いるが、その影響は Gawronski らが言うように、活性化パターンが変化することによって生じるという立場をとる。すなわち、カテゴリーに関して持たれている知識のうち、反証事例の呈示や想起、解釈によって、ステレオタイプや偏見に一致する側面ではなく、それらに反する側面が活性化するような場合に、潜在的ステレオタイプ・偏見が低減すると考える。

しかし、Gawronski らの説明が成立するためには、いくつかの前提条件があるように思われる。まず、知識が活性化するためには、記憶内に知識が保持されている必要がある。これは、反証事例や反ステレオタイプの属性が、カテゴリーと結びついて記憶内に保持されていなければ、反ステレオタイプの側面の活性化自体が生じないということの意味する。すなわち、ステレオタイプ的一致、不一致に該当する具体的な事例や、それらから抽出されるステレオタイプの属性、反ステレオタイプの属性が、カテゴリーに関する知識として表象されていることが第1の前提条件であろう。また、これらの意味的に相反する属性や、各属性を備えた事例がまとまることによって、いくつかの側面がカテゴリーに関する知識の中で構成されていなければ、特定の側面が活性化するとは言えない。このことから、カテゴリーに関する知識が、ある側面と別の側面といったように、多面的な構造を有していることが第2の前提条件として挙げられる。

反証事例の呈示などによって、反ステレオタイプの側面が部分的に活性化し、潜在的ステレオタイプが低減することを説明するためには、カテゴリーに関する知識が以上の2つの前提条件を満たす必要があるだろう。Gawronski and Bodenhausen (2006, 2011) は、カテゴリーに関する知識の部分的活性化（彼らの表現で言えば、活性化パターンの変化）が潜在的ステレオタイプの変容につながることを指摘しているものの、以上のような前提条件は議論されていない。

これらの前提条件を指摘することは、反証事例によって潜在的ステレオタイプが変容するのはどのような場合で、逆にどのような場合には変容しないのかを特定することにもつながる。例えば、反ステレオタイプの情報をカテゴリーに関する知識として保持している人ほど、反証事例が呈示されたときなどに、潜在的ステレオタイプが低減しやすいだろうと考えることができる。そこで次章では、カテゴリーに関してどのようなタイプの情報が知識として保持されており、それらがどのように組織化されて記憶内に保持されているのかを議論する。そして、反証事例によって潜在的ステレオタイプが低減したことを示した先行研究を概観し、それらの研究知見が反ステレオタイプの側面の部分的活性化によ

って説明可能であることを示す。

第3章 カテゴリー知識の部分的活性化による潜在的ステレオタイプ・偏見の低減

本論文は、反証事例が潜在的ステレオタイプ・偏見に及ぼす影響について、実証的に検討しようとするものである。前章の最後で述べたように、本論文ではこの点を、カテゴリーに関する知識のうちの反ステレオタイプ・反偏見的な側面の部分的活性化によって説明する。そのために本章では、カテゴリーに関する知識には、ステレオタイプや偏見に一致する情報に加えて、それらに反する情報も保持されており、それらが多面的かつ階層的な構造をもって記憶内に保持されていることを主張する。こうしたカテゴリー知識の構造に関するモデルを、カテゴリー表象の多面的・階層的モデルとして提案する。そのうえで、このモデルで想定される部分的活性化に関する研究知見について述べる。そして、反証事例が潜在的ステレオタイプ・偏見に及ぼすことを示した先行研究を概観し、それらが部分的活性化によって説明できることを議論する。

3-1. カテゴリー表象の多面的・階層的モデル

カテゴリー表象の多面的・階層的モデルの概要

第2章でも述べたように、ステレオタイプや偏見がどのようにして記憶内に保持されているか（表象されているか）については、連合ネットワークモデルによって説明されることが多い（図2-3参照）。例えば、「女性はあたたかく、面倒見が良い」といったステレオタイプが持たれているとき、カテゴリーラベルである「女性」は、「あたたかい」と「面倒見の良い」それぞれの属性と結びつけられて記憶されている。また、「あたたかい」などの抽象的な情報（概念）だけでなく、特定の人物など、具体的な事例もカテゴリーに関する知識として記憶内に保持されていると考えられる。

さらに本論文では、カテゴリーに関する知識には、ステレオタイプや偏見に反するような抽象的・具体的情報も含まれていることを提唱する。例えば、女性カテゴリーでは、「女性」と「あたたかい」が強く連合している。一方で、その反対の意味を表す「女性一つめたい」連合も、カテゴリーの知識として表象されていると想定する。ここで、ステレオタイプは、ある属性の連合（e.g., 「女性－あたたかい」連合）の強さと、その属性とは反対

の意味を持つ属性の連合 (e.g., 「女性-冷たい」連合) の強さの相対的な差として表される。そして、ステレオタイプの属性 (e.g., あたたかい) と反ステレオタイプの属性 (e.g., つめたい) は、カテゴリーラベルと結びついているが、各属性を備えた事例 (人物) など、より具体的な情報とも結びつくものとする。このようにして、カテゴリーに関する知識は、多面的かつ階層的に構成されていると考える。このことを図示したのが図 3-1 であり、本論文ではこれを、カテゴリー表象の多面的・階層的モデルと呼ぶことにする。

以下では、属性などの抽象的な情報と事例などの具体的な情報の双方がカテゴリーに関する知識として記憶内に保持されること、また、それらが階層的につながって構成されることを議論する。次に、カテゴリーに関する知識が、意味的に相反する内容を持つ情報を含み、多面的に構成されうることについて議論する。なお、知識は記憶内に貯蔵される表象の一種であると言えるため、「カテゴリーに関する知識」を、以下では「カテゴリー表象」と呼ぶことにする。

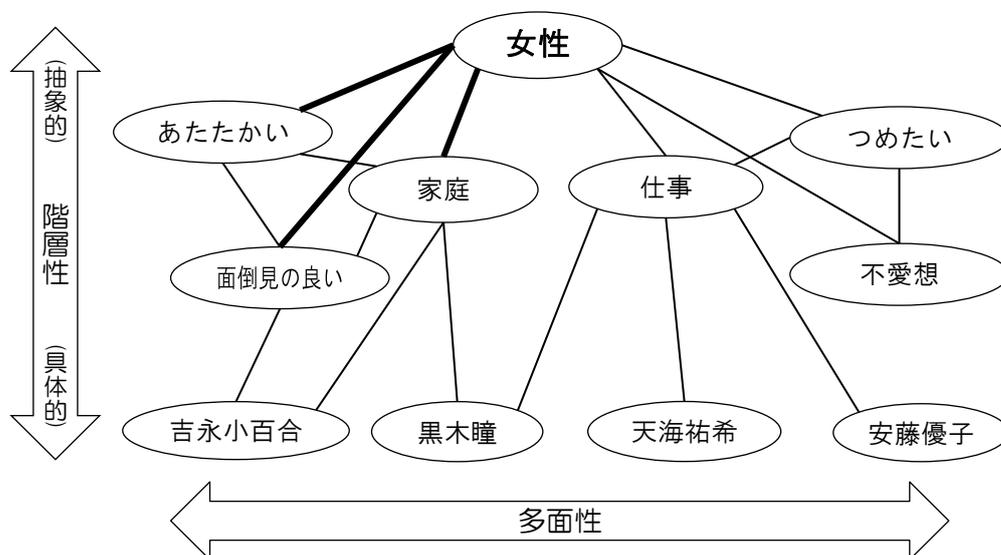


図 3-1. カテゴリー表象の多面的・階層的モデル

注) 図は、女性カテゴリーを例にしたものである。実線は連合 (リンク) であり、そのうち太線で表されているものは連合が強く、ステレオタイプとなっていることを表す。具体的な人物はあくまで例であることに注意されたい。

抽象的情報と具体的情報

本論文で提唱するカテゴリー表象の多面的・階層的モデルでは、属性や感情価などの抽象的な情報（概念）と、人物などの具体的な情報が表象内に含まれており、それらが階層的につながっていることを仮定する。抽象的な情報と具体的な情報がカテゴリー表象に含まれていることは、プロトタイプモデルとエグゼンプラーモデルを統合した混合モデル（Hamilton & Sherman, 1994）を援用することで説明できる。

プロトタイプモデルは、もともと家具や乗り物といった、カテゴリーの一般的な表象に言及したモデルであるが（e.g., Rosch, 1975; Rosch & Mervis, 1975）、社会的カテゴリーの表象にも適用可能なモデルである。プロトタイプはカテゴリー成員の持つ特徴から抽出される抽象的な知識（概念）であり、プロトタイプモデルではこうした抽象的な知識が記憶内に貯蔵されていると考える。例えば、黒人に関して「運動神経の良い」というイメージが一般的に持たれているが、この場合、そのイメージがプロトタイプ（i.e., ステレオタイプの属性）として貯蔵されているということになる。プロトタイプは、いくつかの事例を抽象化することによって形成されることもあるが、事例を介さずに直接的に獲得される場合もあるという。例えば、サッカーのワールドカップなどの報道で、アフリカ系の選手の身体能力の高さがよく言及されるが、アフリカ系の選手がプレーする試合を観戦しなかったとしても、こうした報道によって私たちは「運動神経の良い」といったプロトタイプを直接獲得していると言えるだろう。

一方、エグゼンプラーモデルは、個々の具体的な事例（エグゼンプラー）が記憶内に貯蔵されていると考える（Smith & Zárate, 1992）。例えば、黒人に関して「ウサイン・ボルト（陸上選手）」や「ディディエ・ドログバ（サッカー選手）」といった具体的な事例が貯蔵されているという。事例は、カテゴリー成員への直接的接触、また、他者からの伝聞やメディアを通じた間接的な接触によっても獲得されると考えられる。

私たちは、特定の社会的カテゴリーに関して「どのようなイメージを持っているか」と問われれば、（それを信じているかどうかは別として）たいいてい場合は答えられる。例えば、女性に対するイメージを聞かれれば、「あたたかい」、「面倒見の良い」などと答える人が多いことだろう。このように答えることができるのは、女性カテゴリーに対して、「あたたかい」といった抽象的な知識がプロトタイプとして表象されているからだろう。また、「女性らしい人物として思い当たるのは誰か」などと問われれば、身の回りの友人など、具体的な人物を挙げることもできる。これは、女性カテゴリーに対して、人物などの具体

的な事例が表象されているからだろう。このように考えると、プロトタイプと事例（エグゼンプラー）のどちらかではなく、両方が表象されていると考えるほうが適切だと言える。Hamilton and Sherman (1994) は、カテゴリーに関する知識には、プロトタイプと事例の双方が表象されているとする混合モデルを提唱し、プロトタイプモデルとエグゼンプラーモデルそれぞれには説明可能な現象と説明不可能な現象があることを指摘したうえで、混合モデルの有用性を主張している。

カテゴリー表象の階層構造

混合モデルより、カテゴリー表象にはプロトタイプと事例、すなわち抽象的な知識（概念）と具体的な知識の双方が含まれていると考えることができる。では、それらの知識はどのように組織化されているだろうか。

プロトタイプは、個別の事例から抽象化されて形成された場合であれ、外部から直接的に学習された場合であれ、抽象度の高い知識である。一方で、個別の事例の抽象度は低く、具体的なレベルの知識であると言える。こうした抽象度の違いは、抽象度の高い知識が上位に、抽象度の低い知識が下位に位置する階層構造を表象内に生み出すと考えられる (cf. 池田・村田, 1991)。Stephan (1989) は、カテゴリー表象は、ステレオタイプの属性や、その属性に関連する具体的な事例が階層的に結びついたネットワーク構造を有していると述べている。このことを、女性カテゴリーを例に考えてみたい。女性カテゴリーの表象は、カテゴリーラベルである「女性」を最上位として、これを中心に「あたたかい」「面倒見の良い」などのプロトタイプ (i.e., ステレオタイプの属性) が連合していると考えられる。そして、その下位に、それらの属性に一致する人物 (e.g., 自分の母親) や行動 (e.g., 子どものことを常に気にかける) などが具体的な事例として結びついているだろう。また、女性カテゴリーの表象は、近年の女性の社会進出を反映して、主婦（伝統的女性）とキャリア女性（非伝統的女性）に分化しているという指摘もあり (Six & Eckes, 1991)、カテゴリーレベルの階層性が認められる場合もあるだろう。

こうしたことから、カテゴリー表象は、カテゴリーラベルが最上位に位置し、その下位に属性が、そして、属性の下位に事例が結びついた、階層的な構造となりやすいと言える。

カテゴリー表象の多面性

次に、カテゴリー表象の多面的・階層的モデルのもう1つの特徴である、カテゴリー表

象の多面性について説明する。本論文では、反証情報によって、カテゴリー表象内の反ステレオタイプの側面が部分的に活性化することで、潜在的ステレオタイプの低減が生じることを想定している。そのためには、反ステレオタイプの事例やそれらから抽出される属性 (i.e., 反ステレオタイプの属性) など、ステレオタイプとして貯蔵されている情報とは反する情報も表象内に含まれている必要がある。本論文では、以下に述べることから、カテゴリー表象は多面性を持ちうると考える。

現代では、ポジティブな属性、ネガティブな属性のどちらか一方だけが特定のカテゴリーに関するステレオタイプとして人々に共有されていることは、あまりないと思われる。例えば、女性に関しては、「あたたかい」「面倒見の良い」といったポジティブな属性のほかに、「論理性に欠ける (感情的)」「依存的」といったネガティブな属性もステレオタイプとして保持されているだろう。また、主婦に代表される伝統的女性には「あたたかいが無能」、キャリア女性に代表される非伝統的女性には「有能だが冷たい」といったイメージが持たれていることが指摘されている (Glick & Fiske, 2001)。Fiske を中心とした研究グループは、ステレオタイプがこのようにポジティブな内容とネガティブな内容の両方を含むことに着目し、ステレオタイプ内容モデル (stereotype content model) を提唱している (e.g., Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002; Fiske & Cuddy, 2006)。このモデルによれば、ステレオタイプは多くの場合、温かさ (人柄) と有能さ (能力) の 2 次元から構成され、一方の次元がポジティブであればもう一方の次元はネガティブに、すなわち両面価値的になりやすいという。また、各次元の内容は集団間の競争-協力関係や、地位の高さの知覚によって規定されるという。温かさの次元は外集団と内集団間の競争-協力関係によって規定され、競争的であれば「冷たい」と、協力的であれば「温かい」という内容のステレオタイプが持たれやすくなる。一方で有能さの次元は、対象集団に対する地位の知覚によって規定され、高地位と知覚されれば「有能」、低地位と知覚されれば「無能」といった内容のステレオタイプが持たれやすくなる。

もちろん、すべてのカテゴリーに関するステレオタイプがこの 2 次元上で、両面価値的になることが想定されているわけではない。例えば、アメリカではホームレスや生活保護受給者に対して「無能で冷たい」といった、両次元でネガティブな内容のステレオタイプが持たれており、侮蔑的な感情が向けられるという。このような場合、カテゴリーはネガティブな感情価は結びついていないが、ポジティブな感情価とは結びついていないため、カテゴリー表象は両面価値的な性質を持たないことになる。しかしながら、ステレオタイプ

が両面価値的になりやすいことは様々な地域、様々なカテゴリーで確認されている (e.g., Fiske & Cuddy, 2006; Jost, Kivetz, Rubini, Guermendi, & Mosso, 2005)。こうしたことから、多くの場合、特定のカテゴリーに対しては、ポジティブな感情価とネガティブな感情価の双方が表象されやすいと考えられるだろう。

では、特定のカテゴリーに関してある属性 (e.g., あたたかい) がステレオタイプとして表象内に含まれているとき、それに反する属性 (e.g., 冷たい) や事例も表象内に含まれる可能性はあるだろうか。私たちは、日々様々な他者と接触するが、当然ながらその中にはステレオタイプに一致する人もいれば、一致しない人もいる。例えば、「女性はあたたかい」というステレオタイプがあったとして、実際にあたたかい女性に出会うこともあれば、逆に冷たい女性に出会うこともある。どちらでもその人物が「女性」とカテゴリー化される限り、カテゴリーに関する知識として取り込まれる可能性はあるだろう。そして、それらの事例が抽象化されれば、同一次元上の両端の属性 (e.g., 「あたたかい」と「冷たい」) が特定のカテゴリー表象内に含まれることになる。

このように考えると、ある属性がステレオタイプとして持たれているということは、必ずしもその反対の属性や事例が表象内に含まれないことを意味するものではないだろう。言い換えれば、ステレオタイプは、ある属性の連合 (e.g., 「女性-あたたかい」連合) の強さと、反対の属性の連合 (e.g., 「女性-冷たい」連合) の強さの相対的な差として表されるものであり、ステレオタイプと一貫する情報だけがカテゴリー表象内に含まれていることを保証するわけではないだろう。

ある属性に一貫する情報と一貫しない情報の両方が表象されうることは、対人表象に関するモデルでも想定されている。Srull and Wyer (1989) の対人記憶モデルによれば、対象人物に対してある属性に関する予期がある場合、その予期に基づいて全体印象が形成されるが、その全体印象には予期に一貫する行動情報も一貫しない行動情報も連合しているという。このことをカテゴリー表象に応用すれば、ステレオタイプに一致する情報も反する情報も、カテゴリーラベルと連合していると解釈できよう。カテゴリーには複数の成員がいることを勘案すれば、対人表象よりもカテゴリー表象のほうが一貫性の期待が低いと考えられるため、互いに一貫しない情報がカテゴリー表象に含まれる可能性は対人表象よりも高いと言えるだろう。このことに関連して、唐沢 (2001b) は以下のように述べている。

個人に関する情報と、集団の成員に関するそれとの違いで最も重要なのが、属性の単一性 (unity) や首尾一貫性 (coherence) に関する期待の差である。(中略) 集団成員の場合は、同じ集団に属するとはいえ、異なる個人であるからには属性に多少の非一貫性があるのは当然とみなされ、個人の場合よりは認知要素間の不統一が受け入れられやすい。(唐沢, 2001b, p.161)

まとめておくと、ある属性や感情価がカテゴリーに強く結びつき、ステレオタイプや偏見として保持されているとしても、それらはカテゴリー表象を構成する一部であり、カテゴリー表象の中には、反ステレオタイプの連合や反偏見的な連合も含まれていると考えることができる。もちろん、すべてのカテゴリーが多くの知識や情報を含む多面的な構造を有しているわけではないだろう。しかし、性別や人種、年齢など、カテゴリーの成員と頻繁に接触したり、よく利用されたりするカテゴリーでは、表象内に多くの知識・情報が含まれ、それらが多面的・階層的につながった表象が構成されているだろう。

3-2. 表象の部分的活性化に関する実証研究

本論文では、反証事例によって、カテゴリー表象内の反ステレオタイプの側面が部分的に活性化することで、潜在的ステレオタイプの低減が生じることを想定している。では、ある事象に関する表象が多面的・階層的な構造をもつとき、その中の特定の側面が部分的に活性化することはありえるだろうか。表象中のある側面が部分的に活性化するという考えは、カテゴリー表象だけでなく、その他の表象にも適用できる一般的な原理として示されるはずである。そこで、このセクションでは、部分的活性化が起こりうることの理論的な根拠を述べる。そして、自己や目標といった、社会的カテゴリーとは別の事象に関する表象においても、部分的活性化の原理が働いていると解釈できる研究知見を示す。

部分的活性化は生じるか？

Barsalou (1982) は、ある手がかり刺激によって活性化する知識は、文脈との関連性に依存すると述べている。例えば、「車」と言われたときに活性化する車のタイプは、引っ越しを考えているときには「乗用車」ではなく「トラック」であろうが、旅行を考えているときには「トラック」ではなく「乗用車」であろう。このことに関連して、Smith (1996,

1998) は、特定の事象に関して記憶内に表象されている連合のうち、どの連合が活性化するかは、表象の連合構造と、手がかり刺激の内容や文脈などの外界からの入力刺激の相対的な適合度 (relative fit) によって決定されるとしている。

また、ある事象に関する表象が多面的・階層的な構造をもつということは、表象内に多くの情報が含まれていることを含意する。人の認知資源の容量は限られていることを考えれば、表象内の多くの情報をすべて活性化させ、同時的に記憶内から取り出した状態にしておくことは困難であろう。このことに関連して、Gilbert and Hixon (1991) は、数字の暗誦課題に取り組んでいる最中にアジア人を見ても、アジア人ステレオタイプは自動的に活性化しないことを示している。これは、カテゴリーに関連する手がかりがあったとしても、認知資源がなければステレオタイプは自動的に活性化しないことを示している。知識が活性化するためには、認知資源がある程度必要なのだろう。多面的・階層的に構成される表象では、状況に応じて関連する側面のみが部分的に活性化すると考えることは、認知資源の容量が限られていることから考えても、効率的なことと言えよう。

自己知識の部分的活性化

私たちは様々な事物に関する知識を持ち、表象を形成しているが、その中で最も情報量が多く、複雑な構造を成していると考えられるのは、自己に関する知識であろう。自己知識には多面性が想定され、状況や文脈において関連性の高い側面のみが活性化すると考えられている (Markus & Wurf, 1987)。その状況において活性化した自己知識は作業自己概念 (working self-concept) と呼ばれ、置かれた状況の理解や何らかの事象に関する判断、行動などに影響すると考えられる。

作業自己概念は、重要他者の影響を受けて変動することが示されている (e.g., Andersen, Chen, & Miranda, 2002; Baldwin, Carrell, & Lopez, 1990; Hinkley & Andersen, 1996)。例えば、Baldwin *et al.* (1990) は、カトリック系の大学に通う学生を実験参加者とし、ローマ法王の不快表情の顔写真、または見知らぬ他者の不快表情の顔写真を閾下呈示した。また、何も閾下呈示しない統制条件もあった。その後、自己評価を測定したところ、ローマ法王が閾下呈示されていた条件は、見知らぬ他者が閾下呈示されていた条件や統制条件に比べて、自己評価が低くなっていた。また、こうした違いは、カトリックへの信仰心の篤い参加者においてのみ見られていた。カトリック信者にとってローマ法王は重要他者であると考えられる。したがって、以上の実験結果は、重要他者であるローマ法王の顔写真

によってカトリック教徒としての自己の側面が活性化し、重要他者の視点で自己が評価されたために生じた結果であると解釈できるだろう。

その状況で活性化した自己に関する知識（自己表象）は、潜在的ステレオタイプにも影響を及ぼしうる。高林・沼崎（2010）は、大学生をはじめ、現代の女性が伝統的女性と非伝統的女性の両方を自己表象として内在化させうることに着目し、一時的に活性化した自己表象が潜在的ステレオタイプに及ぼす影響を検討している。実験では、女性を実験参加者として、伝統的女性と非伝統的女性のいずれかの自己表象を活性化させた。伝統的女性としての自己表象は、「将来、結婚して良き妻、良き母になった自分」を想像させることによって、非伝統的女性としての自己表象は、「将来、キャリアウーマンとしてバリバリ働いている自分」を想像させることによって活性化させた。そして、伝統的女性・非伝統的女性に対する潜在的ステレオタイプを測定したところ、伝統的女性よりも非伝統的女性としての自己表象を活性化させたときのほうが、潜在的ステレオタイプは弱くなることが示された。

以上のような研究知見は、特定の状況において自己知識の一部が活性化し、自己評価やステレオタイプに影響を与えたと解釈できるだろう。さらに、Baldwin *et al.*（1990）では写真が閾下で呈示されていたこと、高林・沼崎（2010）では潜在指標が用いられていたことから、こうした影響が自動的・非意識的に生じることを示しているだろう。

目標達成を促す側面の選択的活性化

態度対象に関する情報の一部が活性化することによって潜在的態度が変容することを示す研究として、欲求や目標とそれらに関連する対象への態度を扱った研究が挙げられる。例えば、Ferguson and Bargh（2004）は、喉の渇きが飲み物に対する潜在的態度に及ぼす影響を検討している。彼らの実験の参加者は、実験の3時間前から何も飲まないように伝えられていた。実験室に到着後、半数の参加者には飲み物を飲ませ（non-thirsty 条件）、残り半数の参加者には喉の渇きを促すような食べ物（e.g., プレッツェル）を食べさせた（thirsty 条件）。そして、飲み物（e.g., 水、ジュース）に対する潜在的態度を測定した。その結果、thirsty 条件では non-thirsty 条件よりも、飲み物がポジティブに評価されていた。飲み物はポジティブにもネガティブにも捉えられるものであるが、thirsty 条件の参加者は、喉の渇きをいやそうとする欲求や目標が強い状態となり、その欲求や目標を満たすもの（i.e., 飲み物）を潜在的にポジティブに評価したのである。

さらに興味深いことに、目標の達成を促す対象がポジティブに評価される一方で、目標達成を阻害するような誘惑物は逆にネガティブに評価されることも報告されている (e.g., Mryseth, Fishbach, & Trope, 2009; Fishbach, Zhang, & Trope, 2010)。例えば、Fishbach *et al.* (2010) は、学業目標が活性化している状態では、学業に関連する事物 (e.g., 図書館) に対する潜在的態度はポジティブに、遊びに関連する事物 (e.g., 映画) に対する潜在的態度はネガティブになることを示している。この知見は、「遊び」のように通常はポジティブな態度を抱くような対象であっても、それが目標達成の障害となるような文脈では、潜在レベルでネガティブに評価されることを示唆する。

以上のような研究は、欲求や目標が、それらに関連する対象への潜在的態度に影響することを示している。こうした影響は、態度対象に関連する知識のうち、欲求や目標を充足させるようなポジティブな側面が部分的に活性化し、潜在的態度に影響したと解釈できるだろう。

3-3. 反証事例による潜在的ステレオタイプ・偏見の低減

前のセクションでは、表象のある側面が部分的に活性化することで潜在的態度などが影響を受けることを、自己や目標に関する研究領域で見えてきた。このセクションでは、反証事例によって潜在的ステレオタイプや偏見が低減することを示した先行研究を概観し、それらが本論文で想定している部分的活性化の原理によって説明可能であることを議論する。本論文では、反証事例の呈示、想起、解釈という3つの事象において、潜在的ステレオタイプもしくは潜在的偏見の低減を実証的に検討するため、こうした分類に沿って先行研究を紹介することにする。

反証事例の呈示による低減

反証事例の呈示によって、潜在的ステレオタイプや偏見が低減することは、Dasgupta たちの一連の研究で示されている。すでに紹介した研究もあるが、ここで改めて実験の手続きや結果を述べる。

反偏見事例の呈示によって潜在的偏見が低減することを最初に示したのは、Dasgupta and Greenwald (2001, Study 1) である。彼女らは、実験参加者に黒人と白人の著名人 10 名ずつをスライドショーのようにして呈示した。各スライドには、人物の写真と名前、

そして2つの文が書いてあり、参加者は2つの文のうち写真の人物にあてはまるのがどちらかを答えた。このとき、ポジティブに評価される黒人（e.g., Denzel Washington: 映画俳優）とネガティブに評価される白人（e.g., Jeffrey Dahmer: 連続殺人鬼）が呈示される条件（黒人ポジティブ事例条件）と、逆にネガティブに評価される黒人（e.g., Mike Tyson: 元ボクシング選手）とポジティブに評価される白人（e.g., Tom Hanks: 映画俳優）が呈示される条件（黒人ネガティブ事例条件）があった。一般に、黒人を白人よりもネガティブに評価する人種偏見が存在するため、黒人ポジティブ事例条件は、反偏見的な事例が呈示されたことになる。一方で、黒人ネガティブ条件では偏見に一致する事例が呈示されたことになる。また、これら2つの条件に加え、黒人・白人の事例を呈示しない統制条件もあった（具体的には、花と虫の写真が呈示された）。事例の呈示後、IATによって黒人・白人に対する評価連合の強さが測定された。その結果、黒人ポジティブ事例条件では、他の2条件に比べて黒人とネガティブな感情価（「好ましくない」）、白人とポジティブな感情価（「好ましい」）を結びつける連合、すなわち潜在的な人種偏見が弱くなっていた。また、この効果は、事例の呈示から24時間後に潜在的な人種偏見を測定した場合でも生じていた。

Dasgupta and Rivera (2008) は、同性愛者に対する潜在的偏見も、反偏見事例の呈示によって弱まることを示している。この実験では、同性愛者であることを公言している作家などの著名人の写真が、その人物のポジティブなプロフィールとともに参加者に呈示された。すると、同性愛者に対する潜在的偏見（異性愛者よりも同性愛者を潜在的にネガティブに評価する傾向）が弱まっていた。

反ステレオタイプ事例の呈示によって、潜在的ステレオタイプが低減することを示した研究もある。一般に、性別に関するステレオタイプとして、リーダーシップを女性よりも男性と強く結びつけるステレオタイプ（「男性はリーダーシップがある、女性はリーダーシップがない」）がある。Dasgupta and Asgari (2004) は、こうしたステレオタイプが、反ステレオタイプ事例の呈示によって潜在的なレベルで低減することを示している。実験では、リーダーとして活躍している有名女性16人（e.g., Madeline Albright; アメリカ初の国務長官）の写真が順次、人物の簡単なプロフィールとともに参加者に呈示された。これは「記憶課題」と称して行われ、参加者は人物とプロフィールを覚えるように求められた。実際に記憶テストを実施した後、性別とリーダーシップに関する潜在的ステレオタイプを測定するために、参加者はIATに取り組んだ。その結果、女性リーダーを呈示されていた場合は、女性リーダーを呈示されていなかった場合に比べ、男性とリーダーシップを結び

つける連合が弱くなっていた。

Dasgupta たちの一連の研究は、反証事例の呈示によって潜在的ステレオタイプと潜在的偏見それぞれが低減することを示している。では、こうした低減はどのように説明できるだろうか。Dasgupta たちの実験では、いずれの研究でも、著名人が反証事例として参加者に呈示された。当然だが、著名人は多くの人に知られている人物であり、ほとんどの実験参加者にも知られていたと予想される。よって、呈示された反証事例は、カテゴリーに関連する事例としてもともとカテゴリー表象内に含まれていると言えるだろう。反証事例は、カテゴリー表象のうちの反ステレオタイプ・反偏見的な側面と関連することになる。このように考えると、反証事例としての著名人の呈示は、新たな連合を形成させたのではなく、カテゴリー表象内の反ステレオタイプの側面を部分的に活性化させることで、潜在的ステレオタイプを低減させたと言える。また、潜在的偏見についても同様の説明が可能である。

反証事例の想起による低減

本論文で提唱しているカテゴリー表象の多面的・階層的モデルでは、反ステレオタイプの属性や、その属性を備える具体的事例 (i.e., 反ステレオタイプの事例) が階層的に連合し、カテゴリー表象の中で反ステレオタイプの側面が形成されていることを想定している。そうだとすれば、反ステレオタイプ事例が意識的に想起されたとき、反ステレオタイプの側面が活性化し、潜在的ステレオタイプが弱まることが予測される。このことは、潜在的偏見にもあてはまるだろう。

この点について、Gawronski and Bodenhausen (2005) は、白人・黒人の具体的な人物の想起が潜在的人種偏見に及ぼす影響を検討している。彼らの実験では、実験参加者は、ポジティブに評価される黒人事例、もしくはネガティブに評価される黒人事例のいずれかを挙げるよう求められた。その際、3人挙げるように言われる場合と、10人挙げるように言われる場合があった。こうした操作の後、潜在的人種偏見の強さが測定された。ポジティブな黒人事例は人種偏見に対する反証事例として位置づけられるため、こうした事例の想起は潜在的偏見を低減させる効果を持つと期待される。したがって、ポジティブな黒人事例を想起した場合には潜在的人種偏見が低減し、3人よりも10人想起した場合のほうが低減効果は大きいことが予測される。ところが、結果はその逆であった。すなわち、ポジティブな黒人事例を10人想起した場合よりも3人想起した場合のほうが潜在的人種偏見

は弱くなっていた。また、想起する事例がネガティブな黒人事例だった場合はその逆に、3人想起した場合よりも10人想起した場合のほうが潜在的な人種偏見は弱くなっていた。

では、なぜ、このような結果が得られたのであろうか。Gawronski and Bodenhausen (2005) は、検索容易性の観点から説明している。反証事例を少なく想起する場合 (i.e., 3事例) は多く想起する場合 (i.e., 10事例) に比べて、想起 (検索) することが容易である。こうした想起の容易さに関する主観的な感覚 (i.e., 検索容易性) が潜在的な人種偏見の強さに影響を与えたのだという。黒人のポジティブな事例の検索が容易であるということは、知覚者に「そういう事例が多いのだろう」といった推論を導き、結果として黒人に対するポジティブな態度が報告される。逆に、黒人のポジティブな事例の検索が困難であると感じた場合は、「そういう事例が少ないのだろう」といった推論が導かれ、黒人に対するポジティブな態度が報告されづらい。このように考えることによって、実験結果が説明できるという。

しかし、Gawronski and Bodenhausen (2005) の説明は、検索容易性がなぜ潜在的偏見に影響したのかを十分に説明できていないように思われる。検索容易性の影響は、従来、意識的・顕在的な判断において検討されてきた (e.g., Schwarz, Bless, Strack, Klumpp, Rittenauer-Schatka, & Simons, 1991)。顕在的な判断や態度は、意識的な情報処理が反映されるため、検索容易性を手がかりとした推論に基づいて直接的に判断に影響すると言えよう (e.g., Sloman, 1996; Strack & Deutsch, 2004)。一方で、潜在的態度 (潜在的偏見) には活性化した連合の内容が反映されると考えられるため、検索容易性に基づく推論が直接的に潜在的態度に影響するとは考えづらい。

こうした点に対して、表象の部分的活性化から潜在的ステレオタイプや潜在的偏見の変容を捉える本論文の視点から、潜在的偏見に対する検索容易性の影響は次のようにして説明できるだろう。反偏見事例を想起したとき、それが容易である場合は反偏見的な側面のみが活性化し、潜在的偏見が低減する。しかし、反証事例の想起が困難である場合は、反偏見的な側面だけでなく、偏見に一致する側面も活性化し、結果として潜在的偏見の強さは影響を受けないのだろう。すなわち、反偏見事例の想起に伴う検索容易性は、潜在的偏見に直接影響するのではなく、カテゴリー表象のどの側面を活性化させるかを媒介して、潜在的偏見に影響を及ぼすのだろう。

以上のことを考慮すると、反証事例が想起されたときに、反ステレオタイプ・反偏見的な側面が部分的に活性化するのは、事例の想起が容易である場合に限り得られると言えよう。

そして、その場合には、潜在的ステレオタイプや潜在的偏見が低減すると考えられる。

反証事例の解釈による低減

私たちは様々な人と相互作用するが、その中でステレオタイプに反するような人物に出会うこともある。反証事例の呈示に関する研究は、このような日常場面を実験に持ち込んでいると言えるだろう。しかし、他者に出会い、相互作用を持つような場面では、私たちはその他者に単に曝されているだけではなく、その人がどのような人物であるのかを解釈しようとする。他者を解釈するといった認知的処理は、非意識的に行われる側面もあるが意識的に行われる側面もある。また、どのように解釈するのもも様々であろう。

こうしたことに関連して、Kawakami, Dovidio, Moll, Hermsen, and Russin (2000) は、ステレオタイプに一致する人物や一致しない人物に対する、ある種の意識的な反応が潜在的ステレオタイプに及ぼす影響を検討している。具体的には、ステレオタイプに一致する情報を否定し、ステレオタイプに反する情報を肯定するといった反応を繰り返すことが、潜在的ステレオタイプに影響を及ぼすかどうかを検討している。Kawakami たちは、黒人あるいは白人の顔写真と、黒人・白人それぞれに対するステレオタイプを表す単語を組み合わせ、参加者に次々と呈示した。組み合わせは4種類に大別でき、黒人の写真と黒人ステレオタイプ語、白人の写真と白人ステレオタイプ語の組み合わせは、ステレオタイプに一致するものである。一方、黒人の写真と白人ステレオタイプ語、白人の写真と黒人ステレオタイプ語の組み合わせは、ステレオタイプに一致しないものである。参加者は、呈示された写真と単語の組み合わせが、ステレオタイプに一致するものであった場合には“NO”と、ステレオタイプに一致しないものであった場合には“YES”と反応するように求められた。具体的には、キーボード上に“NO”ボタンと“YES”ボタンが設定され、どちらかのボタンを押してもらった。その結果、ステレオタイプを低減するように作用すると考えられるこれら2種類の反応を繰り返した後では、ステレオタイプの自動的活性化が抑制されていた。すなわち、ステレオタイプに一致する情報を否定したり、一致しない情報を肯定したりすることによって、潜在的ステレオタイプが低減することが示された。

Gawronski, Deutsch, Mbirkou, Seibt, and Strack (2008) も Kawakami et al. (2000) と同様の実験を行っているが、Gawronski たちは、ステレオタイプに一致する組み合わせに“NO”、一致しない組み合わせに“YES”と反応する2種類のうち、いずれかの反応だけを求める手続きに変更した。具体的には、ステレオタイプに一致する組み合わせに“NO”

と反応するだけの条件（ステレオタイプ否定条件）、一致しない組み合わせに“YES”と反応するだけの条件（反ステレオタイプ肯定条件）が設けられた。その結果、反ステレオタイプ肯定条件ではステレオタイプの自動的活性化が抑制されたが、ステレオタイプ否定条件では逆に、ステレオタイプの自動的活性化が促進されていた。この結果は、反ステレオタイプの情報を肯定すると潜在的ステレオタイプが弱まるのに対し、ステレオタイプに一致する情報を否定すると、潜在的ステレオタイプはむしろ強まることを示している。

反ステレオタイプの肯定とステレオタイプの否定によって、潜在的ステレオタイプが影響を受けたのはなぜだろうか。Gawronski *et al.* (2008) は、ステレオタイプ否定条件で潜在的ステレオタイプが低減せず、むしろ強められたのは、ステレオタイプを抑制しようとする意図が働くことによって、かえってステレオタイプの活性化が強くなってしまったこと、すなわち抑制の皮肉プロセス (Macrae *et al.*, 1994; Wegner, 1994) が原因であると述べている。本論文の視点からは、ステレオタイプに一致する情報の否定は、カテゴリー表象中の反ステレオタイプの側面を活性化させるが、否定することで皮肉プロセスが始動し、反ステレオタイプの側面よりもステレオタイプに一致する側面のほうが強く活性化したため、ステレオタイプ否定条件では潜在的ステレオタイプが強められたのだと考えられる。一方で、ステレオタイプに反する情報を肯定する場合は、皮肉プロセスが始動せず、反ステレオタイプ情報が反ステレオタイプの側面の活性化のみを促した結果、潜在的ステレオタイプが低減したと言えるだろう。

以上のように、反ステレオタイプの情報の肯定によって潜在的ステレオタイプが低減することは、本論文で想定している反ステレオタイプの側面の部分的活性化によって説明できるだろう。しかし、反ステレオタイプの情報を肯定するためには、必然的に既存のステレオタイプを参照することになる。すると、ステレオタイプに一致する側面が活性化してしまうとも考えられる。ステレオタイプに一致する側面よりも反する側面のほうが強く活性化したということなのだろうが、ステレオタイプに一致する側面を参照する必要がある方略によって反ステレオタイプ情報が解釈されれば、潜在的ステレオタイプはより効果的に低減すると考えられるだろう。

本論文における基本的な仮説

本論文では、カテゴリーの表象が多面的・階層的な構造を持って記憶内に保持されていることをモデル化して提唱し、こうした構造を持つ表象に関しては、状況に応じて関連す

る側面が活性化すると想定している。このセクションでは、反証事例が潜在的ステレオタイプや潜在的偏見に及ぼす影響について検討されている先行研究の知見を紹介し、それらの知見が、カテゴリー表象中の反ステレオタイプ・反偏見的な側面の部分的活性化によって説明可能であることを述べてきた。

カテゴリー表象の多面的・階層的モデルは、反証事例が潜在的ステレオタイプ・偏見にどのようにして影響を及ぼすのかを理解するうえで有効な枠組みであると言えるだろう。カテゴリーの表象が多面的・階層的に構成されている場合は、反証事例が呈示されたり、想起されたりしたときに、そのカテゴリーに対する潜在的ステレオタイプや潜在的偏見は低減しやすいだろう。言い換えれば、反ステレオタイプの・反偏見的な側面がカテゴリー表象の中に含まれていなければ、反証事例の反復学習によってそうした側面が形成されない限り、潜在的ステレオタイプ・偏見は低減しないだろう。本論文では、以上のことを基本仮説1とする。

また、Gawronski and Bodenhausen (2005) や Gawronski *et al.* (2008) の研究知見から、反証事例によって反ステレオタイプ・反偏見的な側面が活性化したときに、ステレオタイプや偏見に一致する側面は活性化していない状態であることが、潜在的ステレオタイプ・偏見が低減するうえで重要であると言えるだろう。言い換えれば、反証事例が呈示されたり、何らかの形で解釈されたりしたときに、ステレオタイプや偏見に反する側面が活性化すれば潜在的ステレオタイプ・偏見は低減するが、一致する側面も活性化してしまう場合には低減しないだろう。本論文では、この仮説を基本仮説2とする。

本論文では、以上の2つの基本仮説を反証事例の呈示・想起・解釈の3つの事象にあてはめ、それぞれの事象で検討可能な具体的な仮説を導いたうえで、それらを検証する実験を実施していくことにする。

第4章 実証研究の目的と概要

4-1. 本論文の基本的な仮説

前章の最後で、本論文の基本となる仮説について述べた。改めて仮説を呈示すると、以下のようなになる。

基本仮説 1. ステレオタイプや偏見に一致しない情報がカテゴリーに関する知識として表象されているほど、反証事例によって潜在的ステレオタイプ・偏見は低減しやすいだろう。

基本仮説 2. カテゴリーに関する知識として表象されている反ステレオタイプ・反偏見的な側面が反証事例によって活性化するほど、潜在的ステレオタイプ・偏見は低減するだろう。(ステレオタイプ・偏見に反する側面が活性化したとしても、一致する側面も活性化してしまう場合は、潜在的ステレオタイプ・偏見は低減しないだろう。)

本論文ではこれらを基本的な仮説とし、反証事例が潜在的ステレオタイプ・偏見に及ぼす影響を検討する。先行研究では、反証事例の呈示や想起、反証事例を肯定するといったある種の解釈が、潜在的ステレオタイプ・偏見の低減につながることを示されてきた。そこで本論文でも、これら3つの事象について、実証的に検討する。研究1では反証事例の呈示が及ぼす影響を、研究2では反証事例の意識的な想起が及ぼす影響を取り上げる。そして、研究3では、反証事例に対する意識的な解釈が及ぼす影響を検討する。以下、研究ごとに具体的な検討内容を述べる。

4-2. 実証研究の概要

研究1：反偏見事例の呈示が潜在的偏見に及ぼす影響

研究1では、一般的にネガティブに評価されていると考えられる社会的カテゴリーに対する潜在的偏見が、反偏見事例 (i.e., 対象カテゴリーのポジティブな事例) の呈示によって低減するかどうかについて、2つの実験で検討する。具体的には、研究1-1では肥満者の能力に関する偏見(肥満者を無能であると評価する傾向)を題材とし、有能であると評

価される具体的な人物を呈示する。研究 1-2 では黒人に対する偏見（白人よりも黒人をネガティブに評価する傾向）を題材とし、ポジティブに評価される具体的な人物を呈示する。そして、体型もしくは人種に関する潜在的偏見の強さを測定し、反偏見事例の呈示の効果について検討する。

反偏見事例の呈示によって潜在的偏見が低減することは、Dasgupta たちの一連の研究によって示されている。Dasgupta and Greenwald (2001) は、ポジティブに評価される黒人の具体的な人物とネガティブに評価される白人の具体的な人物を呈示した後では、潜在的な人種偏見が弱くなったことを報告している。また、Dasgupta and Rivera (2008) の実験では、同性愛者（ゲイ、レズビアン）でポジティブに評価される人物を、その人物の経歴とともに呈示すると、同性愛者が異性愛者よりも潜在的にネガティブに評価される傾向が弱くなることが示されている。

本論文では、反偏見事例の呈示によって潜在的偏見が低減するのは、対象カテゴリーに含まれる反偏見的な側面が部分的に活性化することに起因すると想定している。そして、基本仮説 1 をこの研究の文脈にあてはめれば、呈示される反偏見事例が、当該カテゴリーの表象に含まれているときに、反偏見的な側面が活性化すると考えられる。Dasgupta たちの実験の中で呈示された人物は、いずれも著名人であったが、このことが潜在的偏見の低減が生じるために重要な点であっただろう。言い換えれば、新奇の反証事例は当該カテゴリーの事例として表象されていないため、そうした事例を呈示しても潜在的偏見は低減しないだろう。

ただし、Dasgupta and Rivera (2004) の実験では、同性愛者の著名な人物と、ポジティブな内容のプロフィールが同時に呈示されていた。つまり、対象カテゴリーの具体的な人物とポジティブな情報が対呈示されていたことになる。このような手続きでは、評価的条件づけ (evaluative conditioning) が生じることが知られている。評価的条件づけとは、態度対象に関連する刺激（これを条件刺激 (CS: conditioned stimuli) という）と、ポジティブもしくはネガティブな感情価を伴う刺激（これを無条件刺激 (US: unconditioned stimuli) という）の同時生起が繰り返し経験されると、潜在的な学習プロセスを通じてそれらの刺激間に連合が形成され、結果として条件刺激となっている対象に態度（評価）が形成されるという現象である (for reviews, De Hower, Thomas, & Baeyens, 2001; Jones, Olson, & Fazio, 2010)。

例えば、Olson and Fazio (2006) は、白人をネガティブな無条件刺激 (e.g., 汚れた皿

の写真)と、黒人をポジティブな無条件刺激 (e.g., かわいらしい子犬の写真) とペアにして参加者に呈示した。なお、呈示される刺激ペアには、黒人や白人が含まれていない場合 (フィラー) もあり、全部で 60 ペア呈示され (1 ペアあたり 1.5 秒間)、そのうち「黒人ーポジティブ」ペアと「白人ーネガティブ」ペアが呈示されたのは 24 回だった。このようにして刺激ペアを呈示した後、潜在的な人種偏見の強さが測定された。すると、「黒人ーポジティブ」ペアと「白人ーネガティブ」ペアが呈示されていた条件では、これらのペアが呈示されていなかった条件に比べ、潜在的な人種偏見が弱まっていた。また、Olson and Fazio (2001) は、黒人や白人の代わりに、参加者が見たことも聞いたこともない新奇のアニメキャラクターを用いた同様の実験を行い、ポジティブな無条件刺激とペアにして呈示されたキャラクターは、ネガティブな無条件刺激とペアにして呈示されたキャラクターよりも、潜在的態度がポジティブであったことを報告している。この研究では新奇の態度対象が用いられていたため、その対象に関する潜在的態度は、実験前には形成されていなかったと考えられる。つまり、特定の対象をポジティブあるいはネガティブな刺激と同時に呈示すると、その対象に対する潜在的態度 (態度対象と感情価間の連合) が形成されることが示唆される。したがって、Dasgupta and Rivera (2004) の実験で示された、ポジティブな同性愛者事例の呈示による潜在的偏見の低減は、本論文で想定している部分的活性化ではなく、評価的条件づけによる連合自体の変化からも説明できてしまう。

仮に、評価的条件づけが生じて連合構造が変化していたのだとすれば、呈示される人物が著名人であるかどうかに関わらず、潜在的偏見は低減するはずである。一方で、本論文で想定しているように、反偏見的な側面の部分的活性化が生じているとすれば、ポジティブに評価される新奇の事例を呈示しても、潜在的偏見は低減しないと考えられる。Dasgupta たちの一連の研究では著名人のみを用いていたため、この点に関する検討ができない。そこで研究 1-1 では、実験参加者に知られていない新奇の事例を経験とともに呈示することで、選択的活性化と連合構造の変化のどちらが潜在的偏見の低減の原因になっているのかを検討する。

一方で、基本仮説 2 に関連することとして、呈示された反偏見事例の評価次元が顕現的であること (目立って注意を引くこと) も重要だろう。例えば、ウサイン・ボルトがジャマイカ出身であることが強調されるよりも、オリンピックで金メダルをいくつも獲得していることが強調されるときの方が、黒人のポジティブな側面 (i.e., 反偏見的な側面) が活性化しやすく、結果として黒人に対する潜在的偏見が低減しやすいと考えられる。そこ

で、研究 1-2 では、反偏見的な具体的人物を呈示するときに、その人物の評価に関する情報を含めるか含めないかによって評価次元の顕現性を操作し、反偏見事例の呈示が潜在的偏見に及ぼす影響を検討する。

研究 2：反ステレオタイプ事例の想起が潜在的ステレオタイプに及ぼす影響

研究 2 では、潜在的ステレオタイプが、それに一致する事例もしくは反する事例の想起によって変容するかどうかを検討する。具体的には、「男は仕事、女は家庭」といった性役割に関するステレオタイプを題材として、性役割に一致する女性事例か、一致しない女性事例を想起させ、「男性」と「仕事」、「女性」と「家庭」を結びつける潜在的な連合の強さ (i.e., 潜在的性役割観) に及ぼす影響を検討する。

「男は仕事、女は家庭」といった性役割に関する信念は、性別に関するステレオタイプの一側面として捉えることができる。性役割に関するこうしたステレオタイプに対して、仕事をする女性はステレオタイプに反するものとして、家庭に専念する女性はステレオタイプに一致するものとして位置づけられる。では、それぞれに該当する女性事例の想起は、潜在的性役割観に影響するだろうか。

近年、社会進出を果たす女性は増えてきており、結婚・出産後も仕事を続ける女性は今では珍しくない存在となっている。一方で、仕事に就いたとしても結婚・出産を機に仕事を辞め、家庭に専念する女性が多いことも事実であろう。こうした現状を反映するように、人々の持つ女性表象は、キャリア女性に代表される従来の性役割に一致しない女性 (以下、非伝統的女性と表記する) と、主婦に代表される従来の性役割に一致する女性 (以下、伝統的女性と表記する) とに分化していることが指摘されている (Glick & Fiske, 2001; Six & Eckes, 1991)。そうだとすれば、伝統的女性の事例が想起された場合には従来の性役割に一致する側面が、非伝統的女性の事例が想起された場合には従来の性役割に一致しない側面が活性化し、潜在的性役割観に影響を受けると考えられるだろう。すなわち、伝統的女性の事例を想起した場合に比べ、非伝統的女性を想起した場合に、潜在的性役割観は弱くなるだろう。研究 2-1 では、この仮説を検討するため、伝統的女性・非伝統的女性の事例想起が潜在的性役割観に及ぼす影響について、女子大学生を対象にして実験を実施する。

ここで基本仮説 1 より、伝統的・非伝統的女性の事例の想起が潜在的性役割観に及ぼす影響は、各タイプの表象がどの程度保持されているかによって調整されることが予想される。女性に接触する頻度や女性との関係は、異性である男性よりも同性である女性のほう

が多いと思われる。また、本論文の実証研究ではいずれも大学生を対象として実験を実施するが、女子大学生にとって伝統的女性と非伝統的女性は、可能自己の表象としても機能しうる (e.g., 高林・沼崎, 2010)。こうしたことから、男性よりも女性において、伝統的女性や非伝統的女性それぞれに関する情報はより多く表象されていると想定できる。したがって、伝統的・非伝統的女性の事例の想起が潜在的性役割観に及ぼす影響は、実験参加者の性別によって調整されると考えられる。すなわち、伝統的女性の事例を想起した場合に比べ、非伝統的女性を想起した場合に潜在的性役割観が弱くなる傾向は、男性参加者よりも女性参加者において顕著にみられるだろう。このことを検討するため、研究 2-2 では男女大学生を対象にして、研究 2-1 と同様の実験を実施する。

研究 3：反ステレオタイプ事例の解釈方略が潜在的ステレオタイプに及ぼす影響

ステレオタイプに反する人物に出会ったとき、私たちはその人物 (i.e., 反証事例) がどのような人であるかを、その人物が属すカテゴリーに関連づけて解釈しようとすることもある。例えば、一般に「女性は弱い」といったステレオタイプが抱かれていると思われるが、他者に頼らず、自分の意見をはっきりと主張する女性に出会ったとき、その人物は“女性らしくない”と解釈されたり、“強い女性だなあ”と解釈されたりするだろう。研究 3 では、これらに例示されるような反ステレオタイプ事例に対する意識的な解釈が、潜在的ステレオタイプに及ぼす影響について検討する。

呈示された事例に対する意識的な反応が潜在的ステレオタイプに及ぼす影響は、Kawakami *et al.* (2000) や Gawronski *et al.* (2008) によって、ステレオタイプ一致事例の否定、反ステレオタイプ事例の肯定という形で検討されてきた。特に Gawronski *et al.* (2008) は、潜在的ステレオタイプを低減するには、これらのうち反ステレオタイプ事例の肯定のほうが有効であることを示している。こうした研究知見は、ステレオタイプに関連する意識的な反応が、非意識的である潜在的ステレオタイプに影響するという点で興味深い。しかし、反ステレオタイプ事例を肯定するといったことが、現実的な場面で自然に生じているとは考えづらい。むしろ、上述した例のように、印象を判断するような形で反ステレオタイプ事例が解釈されることのほうが多いだろう。

では、例で示した“女性らしくない”と“強い女性だなあ”といった 2 通りの解釈は、どのような解釈であり、そのように解釈したときに、潜在的ステレオタイプは低減すると考えられるだろうか。“女性らしくない”といった解釈は、「女性は弱い」というステレオ

タイプに関連づけて、“そうではない”と判断していると捉えられる。そして、このように解釈するためには、情報処理の過程で既存のステレオタイプを参照する必要がある。そのため、対象カテゴリー（女性）の表象に存在する反ステレオタイプの側面とともに、ステレオタイプに一致する側面も活性化してしまう。基本仮説2から考えれば、この場合には潜在的ステレオタイプは低減しないと予測できる。一方、“強い女性だなあ”といった解釈は、「女性」カテゴリーには関連づけられてはいるものの、「女性は弱い」というステレオタイプとは関連づけずに対象を判断していると捉えられる。このとき、少なくとも意識的には、ステレオタイプを参照する必要はないと考えられる。したがって、対象カテゴリーに表象されている反ステレオタイプの側面のほうが、ステレオタイプに一致する側面よりも強く活性化し、結果として潜在的ステレオタイプが低減すると予測できる。

研究3では、以上の仮説を検証するために2つの実験を実施した。研究3-1は質問紙実験、研究3-2は実験室実験であるが、両実験とも反ステレオタイプ事例を呈示し、それらをステレオタイプに関連づけて解釈する条件と、関連づけずに解釈する条件を設けた。そして、潜在的ステレオタイプの強さを測定し、2つの解釈方略が潜在的ステレオタイプに及ぼす影響について検討した。

4-3. 研究で用いる測定方法

潜在的ステレオタイプ・偏見の指標

潜在的ステレオタイプや偏見を測定するための方法として、本論文ではすべての研究においてIAT (Implicit Association Test; Greenwald *et al.*, 1998) を用いる。IATは刺激の分類課題を通じて概念間の相対的な連合強度を測定する方法で、その具体的な手続きは、第2章2-2節「潜在的ステレオタイプ・偏見の測定」の項で述べた通りである。例えば、研究2では性役割観を題材とするが、これは「男性－女性」、「仕事－家庭」を分類カテゴリーとすることで測定できると考えられる。また、研究3では「女性は弱い」といったステレオタイプを題材とするが、これは「仕事－家庭」の代わりに「強い－弱い」を分類カテゴリーに用いることで測定できるだろう。

潜在指標には様々な方法が開発されているが、IATは他の潜在指標よりも信頼性が高く (Bosson *et al.*, 2000)、行動などに対する予測力もあることが示されている (for a review, Lane *et al.*, 2007)。例えば、人種に関するIATにおいて、白人よりも黒人をネガティブに

評価する傾向、すなわち潜在的な人種偏見が強い人ほど、黒人の曖昧な行動をネガティブに判断したり、黒人の顔写真から敵意性を検出したりしやすい(Hugenberg & Bodenhausen, 2003; Rudman & Lee, 2002)。さらに、IAT で測定された潜在的な人種偏見の強さは、黒人の顔写真が呈示されたときにおける扁桃体 (amygdala) の活動量と相関することも示されている (Cunningham, Johnson, Gatenby, Gore, & Banaji, 2003; Phelps, O'Connor, Cunningham, Funayama, Gatenby, Gore, & Banaji, 2000)。扁桃体は自動的な評価反応に関与している脳部位であると考えられていることから (e.g., Whalen, Rauch, Etkoff, McInerney, Lee, & Jenike, 1998)、IAT は情報処理の自動的・潜在的な側面を測定できていると言えよう。こうしたことから、潜在的なステレオタイプ・偏見の低減を検討することを目的とする本論文の実証研究で用いる方法として、IAT は適していると思われる。

IAT は通常、コンピュータ上で実施されるが、紙面上で実施する紙筆版 IAT もある (e.g., Lowery, Hardin, & Sinclair, 2001)。コンピュータ版 IAT では、画面上部の左右に分類カテゴリが表示されており、参加者は画面中央に次々と呈示される 1 つ 1 つの刺激が左右どちらに分類されるかを、左右に対応したキーを押すことによって回答する (図 2-1 参照)。そして、キー押しまでの反応時間が試行ごとに測定され、それらの平均が IAT の指標として用いられる。一方で、紙筆版 IAT では、1 ページ上に分類する刺激が縦一列に並べられ、各刺激が上部左右に示された分類カテゴリのどちらに該当するかを、刺激の左右いずれかに○印をつけることによって回答する (図 4-1 参照)。このとき制限時間が設定されており、その時間内で回答できた 1 ページ (1 ブロック) あたりの刺激数が IAT の指標として用いられる。

『男性』 『仕事』		『女性』 『家庭』		『男性』 『家庭』		『女性』 『仕事』	
()	掃除	(○)		(○)	掃除	()	
()	えりか	(○)		()	えりか	(○)	
(○)	たろう	()		(○)	たろう	()	
(○)	会議	()		()	会議	(○)	
【一致ブロック】				【不一致ブロック】			

図 4-1. 紙筆版 IAT における一致・不一致ブロックの例

コンピュータ版 IAT では試行ごとに反応時間が計測されるため、試行ごとに外れ値を検出することができる。一方で、紙筆版 IAT ではブロックごとの回答数が指標として用いられるため、ブロック単位でしか外れ値を検出できない。こうしたことから、紙筆版 IAT による測定の精度はコンピュータ版 IAT よりも低いと考えられるが、紙筆版 IAT はコンピュータを必要とせず、教場などで一斉に実施することも可能であるという利点もある。また、紙筆版 IAT は、コンピュータ版 IAT と同様に概念間の連合強度を測定でき、その信頼性・妥当性についても確認されている (Lemm, Lane, Sattler, Khan, & Nosek, 2008)。そこで、本論文の実証研究では、実験の実施環境に応じて、コンピュータ版 IAT と紙筆版 IAT のどちらかを、潜在的ステレオタイプ・偏見を測定するための方法として用いることにする。

顕在的ステレオタイプ・偏見の測定

本論文では、反証事例の呈示や想起、解釈が潜在的ステレオタイプ・偏見に及ぼす影響について検討することを主な目的としている。その一方で、同様の要因が顕在的ステレオタイプ・偏見にも影響するかどうかにも興味深い点である。

潜在指標と顕在指標間の相関は、必ずしも高くなく、全く相関しない場合もあることが知られている。Hofmann, Gawronski, Gschwendner, Le, and Schmitt (2005) は、潜在指標として IAT を用い、IAT と顕在指標間の相関が報告されている研究を集め、メタ分析を行っている。それによると、潜在－顕在指標間の相関係数の最小値は $-.25$ 、最大値は $.60$ で、平均は $.19$ であったことが示された。また、Greenwald *et al.* (2002) によれば、ステレオタイプや偏見、自尊心など、測定時に社会的望ましさやプライバシーが関わる場合は、IAT と顕在指標間の相関が低いという (see also, Nosek, 2005)。IAT と顕在指標は測定手続きの構造が違うことから、両指標間の相関は過小に評価されやすいという指摘もあるが (Payne, Burkley, & Stokes, 2008)、潜在－顕在指標間の相関が低いということは、反証事例によってステレオタイプ・偏見が潜在的なレベルで影響を受けたとしても、顕在的なレベルでは影響を受けない可能性が示唆される。実際、Dasgupta and Greenwald (2001) や Dasgupta and Asgari (2004) は、反証事例の呈示が顕在的ステレオタイプや顕在的偏見には影響していなかったことを報告している。

潜在的ステレオタイプや潜在的偏見は、意識的に統制できないような行動と関連している (e.g., Dovidio *et al.*, 2002)。このことは、人は気づかぬうちに差別的なふるまいをし

てしまう可能性を示唆している。そのため、本論文では、潜在的ステレオタイプ・偏見をどのようにすれば低減できるかに注目し、顕在的ステレオタイプ・偏見がどのような場合に低減するのかについては議論しなかった。そのため、反証事例によって顕在的ステレオタイプ・偏見が変容するかどうかを予測することはできない。そこで、顕在的ステレオタイプについては、一部の研究で測定し、反証事例の影響を探索的に検討することにした。

第 2 部 実証的検討

第5章 研究 1-1: 新奇の反偏見事例が潜在的偏見に及ぼす影響—肥満者に対する偏見を用いた検討—

5-1. 問題と目的

検討事項

研究 1 では、一般的にネガティブに評価されていると考えられる社会的カテゴリーに対する潜在的偏見が、反偏見事例 (i.e., 対象カテゴリーのポジティブな事例) の呈示によって低減するかどうかを、2 つの実験で検討する。このうち研究 1-1 (本章) では、肥満者に対する偏見を題材に、実験参加者にとって新奇な肥満者事例の呈示が、肥満者に対する潜在的偏見に及ぼす影響を検討する。

反偏見事例の呈示によって潜在的偏見が低減することは、人種 (黒人 vs.白人) や年齢 (老人 vs.若者)、性的志向 (同性愛者 vs.異性愛者) に基づく偏見において示されている (Dasgupta & Greenwald, 2001; Dasgupta & Rivera, 2008)。これらの研究で共通することは、事例として著名人が用いられていることである。著名人は、多かれ少なかれ、当該カテゴリーに関する知識として表象されていると考えられる。このことは、著名な反偏見事例の呈示によって、当該カテゴリーに表象されている反偏見的な側面が部分的に活性化され、潜在的偏見に影響することを示唆する。しかし、Dasgupta and Rivera (2008) の実験では、ポジティブに評価される同性愛者の著名な人物が呈示されてはいるものの、各人物の略歴もあわせて呈示されていた。そのため、評価的条件づけが生じ、同性愛者とポジティブな評価が連合するようになったのかもしれない。すなわち、連合構造の変化によって潜在的偏見が影響を受けていた可能性も考えられ、反偏見的な側面の部分的活性化と連合構造の変化のうち、どちらのメカニズムによって潜在的偏見が変容したのかは定かではない。

本論文では、反証事例の呈示による潜在的偏見の低減は、当該カテゴリーの表象の反偏見的な側面が部分的に活性化することで生じる想定しているが、この想定が正しいとすれば、新奇の事例をポジティブな情報を含む略歴とともに呈示したとしても、潜在的偏見は影響を受けないことが予想される。なぜなら、事例がカテゴリーに関する知識としてもともと表象されていないため、カテゴリーに関連づけられた反偏見的な側面の活性化が生じ

づらいと考えられるからである。一方で、評価的条件づけによる連合構造の変化が原因であるとすれば、新奇の事例であっても、ポジティブな情報を含む略歴とともに呈示することによって、潜在的偏見は影響を受けることが予想される。そこで研究 1-1 では、実験参加者に知られていない、肥満者の新奇の事例を、その事例の略歴（プロフィール）とともに呈示し、肥満者に対する潜在的偏見に影響するかどうかを検討する。そして、部分的活性化と連合構造の変化のどちらが潜在的偏見低減の原因になっているのかを探ることとする。

実験の概要と仮説

研究 1-1 では、肥満者の新奇事例を、その事例のプロフィールとともに呈示することが、肥満者に対する潜在的偏見に及ぼす影響について検討することを目的とする。

厚生労働省が実施している「国民健康・栄養調査」の平成 21 年（2009 年）の調査によれば、体重管理を実践しようと考えている人は、男性で 67.8%、女性で 75.6%であり、平成 16 年（2004 年）に比べ、男性で 7.0 ポイント、女性で 5.8 ポイント増加している（厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室, 2011）。体重管理に対する意識の高まりから、現代の日本において「肥満」であることは社会的に望ましくないことになっている可能性があるだろう。また、佐名・五十嵐（2013）は、肥満者に対しては、自己コントロールの欠如、運動能力の欠如、性格的なあたたかさ、食行動の特異さ（よく食べる）、不潔・不快といったイメージが抱かれていることを明らかにしている。こうしたことから、肥満者は、特に能力に関連する点においてネガティブに評価されていると考えられる。そこで研究 1-1 では、反偏見事例として有能な肥満者を呈示し、肥満者の能力に関する潜在的偏見（肥満者を無能であると潜在的に評価する傾向）に及ぼす影響を検討する。

実験では、まず、実験参加者に知られてなく、肥満であると同定できる人物の写真とともに、有能であることを示すプロフィール（有能肥満者呈示条件）、もしくは無能であることを示すプロフィール（無能肥満者呈示条件）を呈示する。また、肥満者などの具体的な人物を呈示しない統制条件も設ける。そして、体型（太った人 vs. やせた人）と能力（有能 vs. 無能）間の潜在的な連合強度をコンピュータ版 IAT によって測定する。また、顕在的偏見も測定し、呈示した事例の影響を探索的に検討することにする。

潜在的偏見に関する予測は次の通りである。反偏見事例の呈示による潜在的偏見の低減が評価的条件づけ（連合構造の変化）に基づいているのだとすれば、有能肥満者呈示条件

では、無能肥満者呈示条件や統制条件に比べ、肥満者と無能さを結びつける潜在的連合 (i.e., 肥満者に対する潜在的偏見) が弱くなるだろう。一方で、選択的活性化に基づいているのだとすれば、肥満者と無能さを結びつける潜在的連合の強さは、有能肥満者条件でも無能肥満者条件でも、統制条件と同程度になるだろう。

5-2. 方法

実験参加者

東京都内の大学で「心理学」を受講している大学生 64 名 (男性 34 名、女性 30 名) が実験に参加した。平均年齢は 19.5 歳 ($SD = 1.10$) であった。参加者は、受講している講義の出席追加点と引き換えに、実験に参加した。

実験計画

呈示事例 (有能肥満者呈示条件 vs. 無能肥満者呈示条件 vs. 統制条件) の 1 要因 3 水準実験参加者間計画であった。各参加者は、有能肥満者呈示条件、無能肥満者呈示条件、統制条件のいずれかに、ランダムに割り当てられた。

事例呈示に用いた刺激

有能肥満者呈示条件と無能肥満者呈示条件では、10 名の人物の顔写真と、各人物に関する架空のプロフィールを組み合わせ呈示した (図 5-1 参照)。10 枚の写真のうち、7 枚は肥満と同定できる人物が映っており、有能肥満者呈示条件では有能であることを示すプロフィールと、無能肥満者呈示条件では無能であることを示すプロフィールと組み合わせた。残り 3 枚の写真には標準体型の人物が映っており、有能とも無能ともいえないような、ニュートラルなプロフィールと組み合わせた。なお、人物の写真はインターネット上から収集したが、男性で著名人ではなく、20~30 代に見える人物を用いた。

プロフィールは、年齢、身長、体重の情報と、仕事や生活スタイルに関する情報から構成された。その人物が有能であるか、無能であるかは、仕事や生活スタイルに関する情報の内容によって操作した。実験で用いるプロフィールは、予備調査を行い、有能であると評定されやすかったもの 7 つ、無能であると評定されやすかったもの 7 つ、どちらともいえないと評定されやすかったもの 3 つを選んだ。各プロフィールの具体例を、表 5-1 に示

した。

統制条件では、肥満者や体型などとは無関連な情報を呈示した。具体的には、人物の代わりに実在する国の国旗を、その国の国名や人口、地形の特徴、主な産業に関する情報と組み合わせて呈示した。呈示数は、他の2条件と同じく10とした。

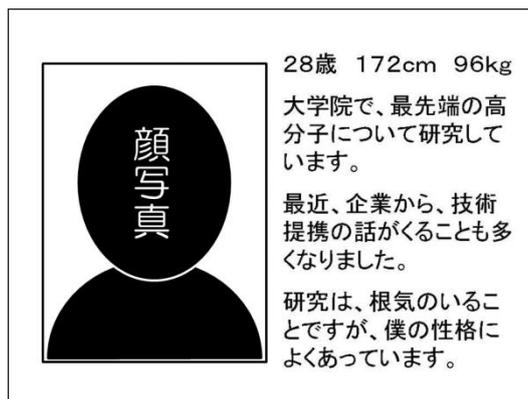


図 5-1. 研究 1-1 における事例の呈示例

注) 顔写真は、図中では模式的なものになっているが、実験時には通常の写真を用いた。また、体型がおおよそ分かるような顔写真を用いた。

表 5-1. 研究 1-1 で呈示されたプロフィールの例

有能プロフィール

- ・ 警視庁のいわゆるキャリア組です。最近は凶悪な事件が増し、日々の勤務は大変ですが、やりがいがあります。先日、手柄をたて、昇進することが出来ました。
- ・ ネット広告の代理店を経営して、7年になります。時代を読む目の鋭さには自信があるので、それが社長業に向いているのだと思います。

無能プロフィール

- ・ 親が医者なので、医学部に入れてもらったのはいいですが、4回留年して、未だに3年です。ずっと部屋にこもって、ゲームばかりやっけてしまいます。
- ・ 社会にでてからずっと定職につかず、短期でバイトをしてきました。近頃、今のバイトも面倒でサボりがちです。根気がないので、ひとところに留まるのは苦手ですね。

ニュートラルプロフィール

- ・ ガソリンスタンドの店員をしています。車好きなので、この仕事を始めました。これからの季節、寒くなるので、外での営業はつらくなります。
- ・ ここ1年ほど、携帯電話の販売員をやっています。最近、番号ポータビリティに関する問い合わせをよく受けるので、比較的、忙しく働いています。

潜在的偏見の測定

肥満者の能力に関する潜在的偏見の強さは、コンピュータ版 IAT によって測定した。IAT では、「太った人ーやせた人」、「有能なー無能な」を分類カテゴリーとして用いた。また、事例の呈示（手続きの詳細は後述する）と IAT は、Inquisit2.0（Millisecond 社製）によって制御した。

IAT は 7 ブロックから構成されていた。ブロック A は人の顔写真を「太った人ーやせた人」で、ブロック B は単語を「無能なー有能な」で分類する課題であった。ブロック C はブロック A と B の 2 対を組み合わせ、「太った人/無能なーやせた人/有能な」で顔写真や単語を分類する課題の練習試行で、ブロック D はその本試行であった（以下、偏見一致ブロック）。ブロック E はブロック B の分類カテゴリーの位置を左右逆転させ、「有能なー無能な」で単語を分類する課題であった。そして、ブロック F はブロック A と E の 2 対を組み合わせ、「太った人/有能なーやせた人/無能な」で顔写真や単語を分類する課題の練習試行、ブロック G はその本試行であった（以下、偏見不一致ブロック）。各ブロックの試行数は、ブロック A・B・E では 12 試行、ブロック C・F では 14 試行、ブロック D・G では 44 試行であった。また、半数の参加者では偏見一致ブロックを先に、残り半数の参加者では偏見不一致ブロックを先に実施し、ブロック順序のカウンターバランスを取った。偏見一致ブロックが先の場合は ABCDEFG の順で、偏見不一致ブロックが先の場合は AEFGBCD の順であった。

IAT を開始すると、まず、課題全体の進め方に関する説明が画面に表示された。その中で、画面中央に表示された刺激（写真や単語）が、画面左上に表示されているカテゴリーと画面右上に表示されているカテゴリーのどちらに分類されるかを判断し、対応するキーをできるだけ速く、かつ正確に押すように教示した。対応するキーは、左上は 'd'、右上は 'k' とした。各ブロックの開始前には、そのブロックでの分類方法を教示する画面を挿入し、左右のカテゴリーと対応するキーの位置を確認させた後、試行を開始させた。分類する刺激は画面中央に呈示され、正しいキーが押されると刺激は消え、次の刺激が呈示されるようになっていた。誤ったキーが押された場合には刺激の下に「×」印を示し、正しいキーを押すよう促した。各刺激が表示されてから正しいキーが押されるまでの時間を反応時間として ms 単位で記録した。

「太った人」、「やせた人」を表す刺激には、それぞれに該当する男性の顔写真を 6 枚ずつ用いた。顔写真はインターネット上から収集し、事例呈示に用いたものとは異なる人物

で、太っているかやせているかを区別可能な人物の写真を採用した。「有能な」、「無能な」を表す刺激には、それぞれ6つの単語を用いた（「有能」語：トップ、できる、天才、頭のいい、優秀、利口な／「無能」語：あほ、とろい、まぬけ、愚か、怠け者、頭の悪い）。各刺激はブロック内でランダムな順序で呈示された。なお、偏見一致、不一致ブロックの本試行は44試行あったが、最初の4試行では各分類カテゴリーの特定の刺激（例えば、「トップ」と「あほ」）が1回ずつ呈示されるようになっていた。各ブロックの最初の数試行は反応時間が安定しないため、分析時にはこれら4試行のデータを除外した。残り40試行では、各分類カテゴリーの5つの刺激がそれぞれ2回ずつ、ランダムな順で出現するようになっていた。

顕在的偏見の測定

肥満者に対する顕在的な評価は、質問紙を配布し、それに回答してもらうことによって測定した。「あなたは、太った人に対してどのようなイメージを持っていますか」という教示のもと、25組の形容詞対を示し、それぞれについて両極7件法で回答を求めた（以下、SD尺度）。25組中10組が、能力に関するものであった。具体的には、「怠惰な－勤勉な」「根気がない－根気がある」「知的な－知的でない」「消極的な－積極的な」「有能でない－有能な」「鈍い－鋭い」「きちんとした－だらしない」「意欲的な－無気力な」「頭が良い－頭が悪い」「まじめな－ふまじめな」であった。また、肥満者に対する全体的な評価を感情温度によって測定した。感情温度は、「0」を“冷たい・好ましくない”、「100」を“あたたかい・好ましい”とし、温度計に模した図を示し、10cmの線分上であてはまる箇所に縦線を引いてもらうことで回答してもらった（図5-2参照）。

『肥満者』に対する温度計

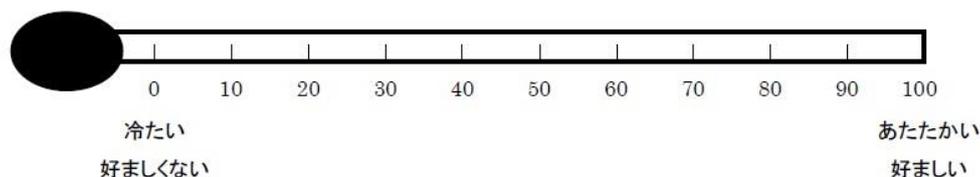


図 5-2. 感情温度の測定に用いた温度計

手続き

実験は、1セッションに1～3名の参加者に実験室に来てもらい、実施した。参加者には、「実験は、記憶力と情報処理能力を測定することが目的である」と教示し、各自に用意されたノートパソコンの前に着席してもらった。

最初に、記憶力を測定するための課題と称し、パソコンの画面上に事例を呈示した。有能肥満者呈示条件と無能肥満者呈示条件では、顔写真とその人物のプロフィールを1人分ずつ、計10名を呈示し、参加者には写真とプロフィールを対応づけて覚えるように教示した。このうち7名は肥満者の写真であり、有能肥満者呈示条件では有能であることを示すプロフィールと、無能肥満者呈示条件では無能であることを示すプロフィールと組み合わせて呈示した。統制条件では、国旗とその国に関する情報を1国ずつ、計10国を呈示し、有能・無能肥満者呈示条件と同様に記憶するように教示した。各人物の写真とプロフィール（国旗の国の情報）は2回ずつ呈示され、1回目は20秒間、2回目は10秒間呈示された。呈示終了後、カバーストーリーとの整合性を保つために、記憶テストを紙面上で実施した。紙面上には呈示した10名のうち8名分のプロフィール（統制条件では国の情報）が列挙されており、それぞれについて10枚の写真（統制条件では国旗）の中から対応すると思うものを1つずつ選んでもらった。

次に、情報処理能力を測定するための課題と称し、IATに取り組んでもらった。IAT終了後、質問紙を配布し、肥満者の能力に関する顕在的評価を測定するSD尺度、肥満者に対する感情温度への回答を求めた。また、実験の目的や手続きに関する疑念についても、自由回答形式で回答してもらった。質問紙への回答が終了した後、ディブリーフィングを行って実験は終了した。

5-3. 結果

分析対象と操作チェック

留学生1名と、実験目的を的確に指摘した1名のデータは以降の分析から除外した。IATの偏見一致・不一致ブロックの本試行全体におけるエラー試行数の平均は3.63 ($SD=2.77$)であった。平均よりも3SD以上エラー数が多かった者ものはいなかったため、IATのエラー数によって分析除外となった者はいなかった。その結果、分析対象者数は62名となった。

各条件で呈示されていた人物や国を、実験参加者がしっかりと見ていたかどうかを確認するため、記憶テスト（全 8 問）における正答数の平均を条件別に算出した。その結果、正答数の平均は、有能肥満者呈示条件で 8.00 ($SD = .00$)、無能肥満者呈示条件で 7.75 ($SD = .72$)、統制条件で 6.91 ($SD = 1.31$) であった。統制条件では他の 2 条件に比べてやや正答数が少ない傾向があるものの、各条件とも正答数の平均は高く、呈示されていた人物や国に関する情報は、注意深く処理されていたと言えるだろう。

IAT の結果

IAT の得点として、偏見一致・不一致ブロックの本試行 44 試行のうち、各ブロックの最初の 4 試行を除いた 40 試行のデータを用いて、D 得点 (Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003) を参加者ごとに算出した。算出手順は以下の通りであった。まず、一致・不一致各ブロックの正答試行のみに基づく反応時間の平均と、両ブロックのエラー試行も含めた全試行の反応時間の標準偏差を算出した。次に、エラー試行の反応時間を、そのブロックにおける反応時間の平均に 600ms を加算した値に置き換えた後、今度は一致・不一致各ブロックの全試行に基づく反応時間の平均を算出した。そして、不一致ブロックの平均から一致ブロックの平均を減算し、これを先に算出しておいた標準偏差で除した値を D 得点とした。D 得点は、値が正に大きいほど「太った人」と「無能な」、「やせた人」と「有能な」の連合が、その逆の連合よりも相対的に強いことを表す。また、値がゼロであれば、有能・無能という能力に関する属性が、太った人ややせた人のどちらかに強く連合しているということがないことを表す。簡単に言うと、D 得点は、値がゼロであれば太った人を無能と結びつける連合がないこと、すなわち肥満者の能力に関して潜在的偏見が持たれていないことを表す。そして、値が正に大きいほど太った人を無能と結びつける連合が強いこと、すなわち肥満者を無能とする潜在的偏見が強いことを表す。

本研究の仮説は次の通りであった。反偏見事例の呈示による潜在的偏見の低減が連合構造の変化に基づいているのだとすれば、有能肥満者呈示条件では、無能肥満者呈示条件や統制条件に比べ、肥満者を無能とする潜在的偏見が弱くなるだろう。一方で、本論文で想定しているように、部分的活性化に基づいているのだとすれば、肥満者を無能とする潜在的偏見の強さは、有能肥満者条件でも無能肥満者条件でも、統制条件と同程度になるだろう。

以上の仮説を検討するため、条件別に D 得点の平均値を算出したところ、有能肥満者呈

示条件では.262 ($SD = .695$)、無能肥満者呈示条件では.333 ($SD = .802$)、統制条件では.481 ($SD = .732$)となっていた (図 5-3 参照)。条件間で D 得点の平均値に差があるかどうかを検討するため、D 得点を従属変数、呈示事例 (有能肥満者呈示条件 vs. 無能肥満者呈示条件 vs. 統制条件) を独立変数とする分散分析を実施した。その結果、呈示事例の主効果は有意ではなかった ($F(2,59) = .48, ns$)。平均値パターンで言えば、有能肥満者呈示条件は統制条件よりも D 得点が低かったが、統計的に有意な差であるとは言えなかった。すなわち、有能な肥満者の新奇事例を、有能であることを示すプロフィールと同時に呈示しても、潜在的偏見は低減していなかった。

続けて、参加者の性別や IAT のブロック順序が影響を及ぼしていた可能性を探るため、D 得点に対して、呈示事例×参加者性 (男 vs. 女) ×ブロック順序 (一致先 vs. 不一致先) の分散分析を実施した (いずれも実験参加者間要因)。その結果、ブロック順序の主効果だけが有意で ($F(1,50) = 32.63, p < .001$)、その他の要因の主効果や交互作用効果はすべて有意ではなかった ($F_s < 1.42, p_s > .25$)。ブロック順序の主効果は、一致ブロックを先に実施した場合 ($M = .801, SD = .456$) のほうが、不一致ブロックを先に実施した場合 ($M = -.081, SD = .702$) より、D 得点が高いことを示すものであった。

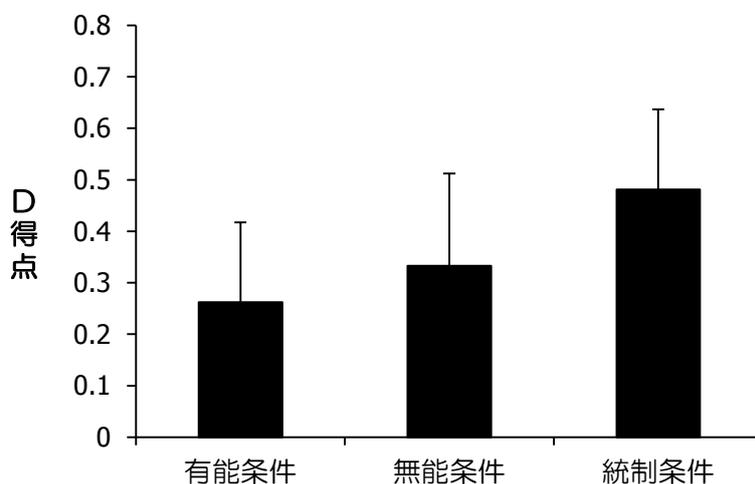


図 5-3. D 得点の条件別平均値 (研究 1-1)

注) D 得点は、値が正に大きいほど肥満者が能力に関して潜在的にネガティブに評価されていることを表す。エラーバーは標準誤差を表す。

顕在指標の結果

肥満者に対する顕在的偏見は、SD 尺度と感情温度で測定していた。呈示した事例が顕在的偏見に影響を及ぼしていた可能性を検討するため、これらの指標に関する分析を行った。

SD 尺度には 25 項目あったが、そのうち能力に関する 10 項目について、数値が大きいほど肥満者の能力がポジティブに評価されていることを表すように、逆転項目を逆転した。信頼性分析を実施したところ、「怠惰な-勤勉な」を除く 9 項目のときに最も信頼性が高かった ($\alpha = .83$)。そこで、「怠惰な-勤勉な」を除く 9 項目の評定平均を参加者ごとに算出し、これを能力得点とした。能力得点の得点範囲は 1~7 で、数値が大きいほど肥満者の能力が高く評価されていることを表す。一方、感情温度の得点範囲は 0~100 で、数値が大きいほど、肥満者がポジティブに評価されていることを表す。

能力得点と感情温度の条件別平均値は、表 5-2 に示す通りであった。呈示事例が能力得点や感情温度に影響を与えていた可能性を検討するため、能力得点または感情温度を従属変数、呈示事例（有能肥満者呈示条件 vs. 無能肥満者呈示条件 vs. 統制条件）を独立変数とする分散分析を実施した。その結果、能力得点を従属変数とした場合でも、感情温度を従属変数とした場合でも、呈示事例の主効果は有意ではなかった ($F_s < 1$)。

最後に、肥満者に対する潜在的偏見と顕在的偏見間の関連について検討するため、IAT の D 得点・能力得点・感情温度について相関分析を行った。その結果、D 得点と能力得点の間に有意な正の相関関係が見られた ($r(61) = .41, p < .01$)。一方で、D 得点と感情温度の間には有意な相関関係は見られなかった ($r(62) = .19, ns$)。また、能力得点と感情温度の間、すなわち顕在指標同士の間にも有意な正の相関関係が見られた ($r(61) = .42, p < .01$)。

表 5-2. 能力得点と感情温度の条件別平均値（研究 1-1）

	能力得点	感情温度
有能肥満者呈示条件	3.48 (.47)	43.4 (16.4)
無能肥満者呈示条件	3.32 (.66)	37.1 (19.6)
統制条件	3.48 (.51)	41.8 (17.6)
全体	3.43 (.54)	40.8 (17.8)

注) () 内の数値は標準偏差を表す。

5-4. 考察

実験結果のまとめ

本研究では、実験参加者に知られていない、肥満者の新奇の事例をプロフィールとともに呈示し、肥満者に対する潜在的偏見が影響を受けるかどうかについて検討した。実験の結果、新奇の肥満者事例を有能であることを示すプロフィールとともに呈示しても、潜在的偏見は低減していなかった。また、逆に、新奇の肥満者事例を無能であることを示すプロフィールとともに呈示することによって潜在的偏見が強くなることもなかった。実験では顕在的偏見も測定していたが、潜在的偏見と同様、顕在的偏見も呈示した事例の影響を受けていなかった。

反偏見事例の呈示による潜在的偏見低減のメカニズム

潜在的偏見は反偏見事例を呈示することによって低減することが先行研究（e.g., Dasgupta & Greenwald, 2001; Dasgupta & Rivera, 2008）によって示されているが、本研究ではこうした低減が、評価的条件づけを通じた連合構造の変化とカテゴリ表象内の反偏見的な側面の部分的活性化のうち、どちらのメカニズムによるものなのかを検討することが目的であった。もし前者によって潜在的偏見が低減するのだとすれば、新奇の事例をポジティブな刺激と組み合わせて呈示した場合には、ネガティブな刺激と組み合わせて呈示した場合に比べて、潜在的偏見は弱まるはずである。しかし、本研究での実験の結果、有能肥満者呈示条件における潜在的偏見の強さは、統制条件はもとより、無能肥満者呈示条件と比べた場合でも有意な差は見られなかった。したがって、反偏見事例の呈示による潜在的偏見の低減は、もう一方のメカニズム、すなわち反偏見的な側面の部分的活性化によって生じているところが大いと言えらるう。

反偏見事例の呈示によって潜在的偏見が低減することを示した先行研究では、いずれも事例として著名な人物が用いられていた。一方、本研究では、反偏見事例の呈示が評価的条件づけによって潜在的偏見を低減させている可能性を検討するために、敢えて著名な人物を用いず、新奇の人物を用いた。Dasgupta and Rivera（2008）の実験では、ポジティブに評価される同性愛者の著名な人物が呈示されていたが、その人物の略歴（プロフィール）も同時に呈示されていた。呈示された人物が著名であるか新奇であるかを除けば、本研究の実験は、Dasgupta and Rivera（2008）が実施した実験の概念的追試であると言え

る。このように考えると、Dasgupta and Rivera (2008) の実験で潜在的偏見が低減したのは、略歴としてポジティブな情報を呈示したことよりも、著名な人物を呈示していたことが重要であったと考えられるだろう。すなわち、反偏見事例として著名な人物を呈示すると、対象カテゴリーの表象内に含まれている反偏見的な側面が部分的に活性化することで、潜在的偏見が低減するのだろう。

以上のことから、本論文で想定していたように、反証事例の呈示による潜在的偏見の低減は、部分的活性化のメカニズムによるところが大きいと言えるだろう。しかし、本研究からこのように考えるのには限界もある。

第一に、本研究の実験手続きは、評価的条件づけの実験で通常用いられる手続きとは異なっている。評価的条件づけの実験 (e.g., Olson & Fazio, 2006) では、実験参加者には多くの刺激対が呈示され、その中に条件刺激 (本研究では肥満者の写真) と無条件刺激 (本研究では有能あるいは無能なプロフィール) が対呈示されるが、これらが呈示される刺激全体に占める割合はそれほど高くない。また、条件刺激と無条件刺激の対を覚えるように教示されることはなく、条件刺激がポジティブ・ネガティブどちらかの感情価を伴う無条件刺激とだけ組み合わせられていることが気づかれないようにして呈示される。これに対して、本研究で肥満者を呈示した2つの条件では、呈示された人物のうちほとんど (10名中7名) が肥満者であった。また、人物の写真とプロフィールの対を実験参加者に覚えるように教示していた。こうした手続きでは、写真とプロフィールの組み合わせの法則性 (i.e., 随伴性) に実験参加者が気づき、それによって評価的条件づけが阻害されていた可能性がある。評価的条件づけが生じなかったということをより強く主張するためには、実験手続きを評価的条件づけの一般的な手続きにより近づけて検討する必要があるだろう。

第二に、本研究は、反偏見事例の呈示によって、対象カテゴリーの表象内の反偏見的な側面が活性化することを直接的に示すものではない。もし反偏見的な側面の部分的活性化に基づいて潜在的偏見が低減しているのだとすれば、反偏見的な側面の活性化を促すような操作を加えたときに、潜在的偏見はより低減するはずである。例えば、あるカテゴリーのポジティブな人物が呈示されたときに、その人物の評価が顕現的であるときのほうが、カテゴリー表象内のポジティブな側面との対応づけがされやすく、その側面が強く活性化するだろう。このとき、当該カテゴリーに対する潜在的態度がポジティブになるとすれば、部分的活性化のメカニズムが働いていることを示す証左となるだろう。そこで、研究 1-2 では、この点について検討することにする。

肥満者に対する潜在的偏見と顕在的偏見

本研究では、肥満者の能力に関する偏見について、潜在指標と顕在指標の両方を用いて測定していた。ここで、潜在レベルと顕在レベルそれぞれで、肥満者を無能とする偏見が抱かれていたかどうか、また、潜在-顕在間の関連性について考察しておく。

潜在レベル、顕在レベルそれぞれにおいて、「肥満者は無能」とネガティブに評価されているかどうかを検討するために、次のような分析を行った。条件を無視して全体で D 得点や能力得点の平均値を算出したところ、D 得点の平均は.363 ($SD = .738$)、能力得点の平均は 3.43 ($SD = .55$) であった。D 得点は、値が 0 であれば肥満者の能力に関する潜在的偏見が持たれていないことを表す。そこで、D 得点の平均値に対して、母平均 = 0 を帰無仮説とする t 検定を行ったところ、0 との間に有意な差が認められた ($t(61) = 3.87, p < .001$)。一方、能力得点の理論的な中点は 4 であり、4 よりも値が小さければ肥満者は無能であると評価されていると考えることができるだろう。そこで、能力得点に対して、母平均 = 4 を帰無仮説とする t 検定を行ったところ、4 との間に有意な差が認められた ($t(60) = 8.14, p < .001$)。以上の分析結果から、肥満者は潜在的にも顕在的にも「無能である」と評価されていると言えるだろう。

また、D 得点と能力得点の間には有意な正の相関関係が見られていた。通常、偏見など、態度を表明することに社会的望ましさに関わる場合は、潜在-顕在指標間の相関が認められないことが多い (Greenwald *et al.*, 2002; Hofmann *et al.*, 2005)。しかし、以上の結果は、肥満者の能力に関する潜在的偏見と顕在的偏見が相関することを示しており、興味深い結果である。このような結果が得られた 1 つの理由として、肥満者に対する偏見が顕在的に表明しやすい性質を持ち合わせていることが考えられるだろう。肥満になるのは体重の自己コントロールをしないから、あるいはできないからであり、個人的責任があると一般に知覚されやすいと思われる¹。カテゴリー成員たる所以に関するこうした性質から、肥満者に関しては偏見を抑制しようとする動機づけがあまり働かず、潜在的に抱かれている偏見が顕在的なレベルでもそのまま表明されやすいのかもしれない。

もしそうだとすれば、肥満者に対する潜在-顕在偏見間の相関は、偏見を抑制しようと

¹ 遺伝的な要素も体重に関わっているため、この見方自体が偏見である。ここでは、自己コントロールの欠如が遺伝要因に比べて、肥満の原因として相対的に強く推測されやすいと想定して考察する。

する動機づけが低い場合においてのみ見られるだろう。本研究では、実験を実施する2週間以上前に、実験参加者に偏見抑制の動機づけ尺度 (Plant & Devine, 1998 邦訳版 高林・村田・埴田, 2007) に回答してもらっていた。偏見抑制の動機づけ尺度には10項目 (e.g., 偏見をもつことは、私の個人的信念に反する) あり、9件法で測定された。10項目の評定平均を参加者ごとに算出し、これを偏見抑制動機得点とした ($\alpha = .88$)。この得点は、値が大きいほど偏見を抑制しようとする動機づけが強いことを表す。そして、潜在一顕在偏見間の相関が、偏見抑制動機づけの強さによって調整されるかどうかを検討するため、以下の分析を行った。まず、D得点と偏見抑制動機得点を標準化した。そして、能力得点を従属変数、D得点と偏見抑制動機得点、これら2変数の交互作用項を独立変数として投入した一般線形モデルによる分析を実施した。その結果、D得点の効果が有意であったことに加え ($F(1, 53) = 11.28, p < .01$)、交互作用項の効果も有意であった ($F(1, 53) = 4.91, p < .05$)。この交互作用を解釈するため、D得点と偏見抑制動機得点それぞれの平均 $\pm 1SD$ 地点における能力得点の推定値をもとに、能力得点に対するD得点の効果をプロットしたのが図5-4である。この図から、偏見抑制の動機づけが低い場合 (動機づけ $-1SD$) のほうが、高い場合 (動機づけ $+1SD$) に比べて、D得点の傾きが右肩上がりになっていることがわかる。この結果は、D得点が高いほど能力得点が高いという傾向、すなわち両者の正の相関関係は、偏見抑制の動機づけが低い場合に顕著にみられることを示すものである。この結果から示唆されるように、肥満者に対しては、“太った自分が悪い”と考えられやすいことが1つの原因となって、潜在的に抱かれている偏見がそのまま顕在的にも表明されやすいのだろう。

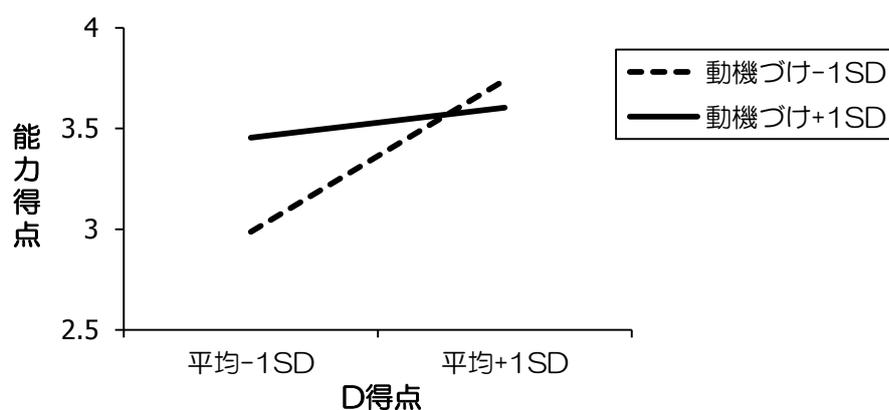


図 5-4. 偏見抑制動機高低別の D 得点と能力得点の関係

第6章 研究 1-2: 反偏見事例による潜在的偏見の低減に評価の顕現性が及ぼす影響—黒人に対する偏見を用いた検討—

6-1. 問題と目的

検討事項

研究 1-1 では、新奇の有能な肥満者事例を呈示しても、肥満者を無能とする潜在的偏見が影響を受けることは示されなかった。反偏見事例の呈示によって潜在的偏見が低減しうるのは、Dasgupta たちの一連の研究 (Dasgupta & Greenwald, 2001; Dasgupta & Rivera, 2008) で示されているが、研究 1-1 の結果から、呈示される事例は著名人であることが重要であると言える。著名であるということは、そうした事例は対象となっているカテゴリーに関する知識として表象されており、反偏見的な側面として記憶内に貯蔵されていると考えられる。そして、事例の呈示をきっかけとして、反偏見的な側面が活性化され、潜在的偏見が低減するのだろう。

このように、反偏見事例の呈示による潜在的偏見の低減は、部分的活性化のメカニズムによるところが大きいと言えるだろう。そうだとすれば、カテゴリー表象内の反偏見的な側面に焦点があてられるほど、その側面の活性化水準が高まり、潜在的偏見は低減しやすくなると考えられる。特定のカテゴリーに対してネガティブな感情価が結びついて偏見が持たれている場合、反偏見事例はカテゴリーの表象内で、逆のポジティブな感情価と結びついて、反偏見的な側面を構成していると想定できる。そのため、事例が呈示されたとき、その事例の感情価 (ポジティブな評価) に注意が向けられることが、反偏見的な側面が活性化するうえで重要となるだろう。言い換えれば、事例の評価以外の点に注意が向けられれば、反偏見的な側面が活性化しにくいことが予想され、結果として潜在的偏見の低減効果が生じないともいえるだろう。

このことに関連して、Mitchell, Nosek, and Banaji (2003) は、著名な黒人や白人のどのような側面が着目されるかによって、それらの人物から導出される潜在的評価が異なることを検討している。Mitchell たちの実験では、参加者に、好きな黒人の運動選手と嫌いな白人の政治家を挙げてもらった。そして、各参加者が挙げた人物を使って IAT を実施し

ただ、このとき、黒人の運動選手と白人の政治家は、職業 (i.e., 運動選手 vs. 政治家) か人種 (i.e., 黒人 vs. 白人) のいずれかで分類された。その結果、職業で分類されたときは、黒人運動選手は白人政治家よりもポジティブに評価されたが、人種で分類されたときは、黒人運動選手は白人政治家よりもネガティブに評価された。こうした実験結果は、同じ人物であっても別の側面に焦点が当てられれば、活性化する感情価も異なることを示しているだろう。

以上のことを考慮すると、一般にポジティブに評されている人物が反偏見事例として呈示され、それが著名な人物であったとしても、その人物が属すカテゴリーに対する潜在的偏見は必ずしも低減するとは限らないと考えられる。低減するのは、呈示された人物のポジティブな評価が顕現的な場合に限られるだろう。例えば、「ウサイン・ボルトはオリンピックで金メダルをいくつも獲得している」といったように、その人物がポジティブに評価されていることが強調されるときの方が、黒人のポジティブな側面が活性化しやすく、結果として黒人に対する潜在的偏見が低減しやすいと考えられる。そこで、研究 1-2 では、反偏見事例を呈示するときに、その人物の評価に関する情報を含めるか含めないのかによって評価次元の顕現性を操作し、反偏見事例の呈示が潜在的偏見に及ぼす影響を検討する。

実験の概要と仮説

研究 1-2 では、以上の点について、人種に関する偏見（黒人を白人よりもネガティブに評価する傾向）を用いて検討する。人種に関するステレオタイプや偏見は、主に北米で検討されており、一般に、白人に比べて黒人は潜在的にネガティブに評価されやすいことが報告されている (e.g., Nosek, Banaji, & Greenwald, 2002)。日本でも、黒人が歴史的に偏見や差別の対象となってきたことはよく知られており、そうした知識から、黒人はネガティブな感情価と連合しやすいことが予想される。その一方で、映画俳優 (e.g., デンゼル・ワシントン) や運動選手 (e.g., ウサイン・ボルト) など、ポジティブに評価される黒人事例も知られているだろう。そこで、研究 1-2 では、ポジティブに評価されている黒人の著名な人物 (i.e., 著名な反偏見事例) を呈示することが、潜在的な人種偏見に影響を及ぼすかどうかを検討する。

実験では、まず、著名かつ卓越した経歴を持つ黒人事例の写真を呈示する。このとき、評価の顕現性を操作するため、その人物の評価にまつわる情報を呈示する条件（評価顕現条件）と、評価とは直接関連しない情報 (e.g., 出身地) を呈示する条件（評価非顕現条件）

を設ける。また、黒人事例を呈示しない統制条件も設ける。そして、人種（黒人 vs. 白人）と感情価（良い vs. 悪い）間の潜在的な連合強度を、紙筆版 IAT によって測定する。また、顕在的の偏見も測定し、事例呈示の影響を探索的に検討することにする。

仮説は次の通りである。黒人事例が、ポジティブに評価されていることを顕現的にして呈示されると、黒人に対する潜在的偏見が弱まるだろう。

6-2. 方法

実験参加者

東京都内の大学で、「量的データ解析法」を受講している大学生 49 名（男性 22 名、女性 27 名）が実験に参加した。平均年齢は 20.8 歳（ $SD = 1.65$ ）であった。参加者は、受講している講義の出席追加点と引き換えに、実験に参加した。

実験計画

呈示事例（評価顕現条件 vs. 評価非顕現条件 vs. 統制条件）の 1 要因 3 水準実験参加者間計画であった。各参加者は、3 つの条件のいずれかにランダムに割り当てられた。

事例呈示に用いた刺激

評価顕現条件と評価非顕現条件で呈示する黒人の人物として、日本でもよく知られていると思われる人物を中心に 15 名選出し、インターネット上から各人物の顔写真を収集した（選出した人物は表 6-1 参照）。なお、各人物は、その人物を知っているかどうかを判断させる課題の中で呈示した（詳細な手続きは後述）。そのため、課題自体が不自然にならないように、あまり知られていないと思われる人物（e.g., シドニー・ポワチェ）も選出した。評価非顕現条件では、人物の写真・名前と、その人物の生没年・出身地・職業に関する情報を 1 枚のスライド上に載せ、呈示した。評価顕現条件では、人物の写真・名前と、その人物の評価にまつわる情報（e.g., 受賞歴）を 1 枚のスライド上に載せ、呈示した（図 6-1 参照）。

統制条件では、日本でよく知られていると思われる世界遺産を 15 選出し（e.g., パルテノン神殿；表 6-1 参照）、各遺産の写真と名称、その遺産の簡単な紹介文・所在地・遺産の種別に関する情報を呈示した。例えば、パルテノン神殿については、「古代ギリシャ時代の

遺構、ギリシャ・アテネ、1997年文化遺産登録」といった情報であった。なお、選出された世界遺産の中にも、あまり知られていないと思われるもの（e.g., 九寨溝）も含めた。

表 6-1. 研究 1-2 の各条件で呈示された人物・世界遺産

条件	(種別)	人物名・遺産名
評価顕現条件 評価非顕現条件	(運動選手)	マイケル・ジョーダン / ウサイン・ボルト / ペレ タイガー・ウッズ / シャキール・オニール トニー・グウィン
	(映画俳優)	モーガン・フリーマン / デンゼル・ワシントン シドニー・ポワチエ
	(ミュージシャン) (政治家・学者)	スティーヴィー・ワンダー / ルイ・アームストロング バラク・オバマ / マーチン・ルーサー・キング Jr. コフィー・アッタ・アナン
統制条件	(文化遺産)	パルテノン神殿 / サグラダ・ファミリア モン・サン=ミシェル / ストーンヘンジ アブ・シンベル神殿 / サンスーシ宮殿 サン・ピエトロ大聖堂 / 紫禁城 (故宮) アンコールワット / ナスカの地上絵
	(自然遺産)	イグアスの滝 / ヨセミテ国立公園 アイガー / 九寨溝
	(複合遺産)	マチュピチュ



【評価顕現条件での呈示例】



【評価非顕現条件での呈示例】

図 6-1. 研究 1-2 の評価顕現条件と評価非顕現条件における事例の呈示例

注) 顔写真は、図中では模式的なものになっているが、実験時には各人物の顔がはっきりと映っている写真を用いた。

潜在的な人種偏見の測定

人種（黒人 vs. 白人）に関する潜在的偏見を紙筆版 IAT によって測定した。IAT では、「白人－黒人」、「良い－悪い」を分類カテゴリーとして用いた。「白人」と「黒人」に分類される刺激には、呈示した事例とは別の、無名の白人と黒人の顔写真を 5 枚ずつ用いた。「良い」と「悪い」に分類される刺激には、それぞれの意味を表す単語を 5 語ずつ用いた（「良い」関連語：好き、快い、美しい、うれしい、素晴らしい／「悪い」関連語：嫌い、不快な、醜い、やかましい、汚い）。

IAT は 4 ブロックから構成されていた。ブロック A は、「黒人」と「悪い」に該当する刺激を左側に、「白人」と「良い」に該当する刺激を右側に分類する課題の練習試行で、ブロック B はその本試行であった（以下、偏見一致ブロック）。ブロック C は「黒人」と「良い」に該当する刺激を左側に、「白人」と「悪い」に該当する刺激を右側に分類する課題の練習試行で、ブロック D はその本試行であった（以下、偏見不一致ブロック）。偏見一致ブロックと偏見不一致ブロックの実施順序はカウンターバランスをとった。

各ブロックは 1 ページ上に表されていた。各ページには、分類する刺激（写真・単語）が縦方向に並べられていた。そして、それらの上部左右には分類カテゴリーが記されていた。参加者には、各刺激が上部左右に示されたカテゴリーのどちらに分類されるかを、各刺激の左もしくは右に○印をつけることで回答してもらった。黒人と白人の写真は分類の誤りを防ぐため、カラー印刷されていた。

紙筆版 IAT 用の冊子の表紙には、課題の概要・進め方の説明に加え、誤った分類を防ぐため、分類する刺激がカテゴリーごとに一覧表示されていた。また、偏見一致・不一致ブロックの練習試行の前には、そのブロックでの分類方法（左右の分類カテゴリー）を説明するページが挿入されていた。参加者には、実験者の合図とともに刺激の分類を始め、制限時間内にできるだけ多く、かつ正確に分類していくよう教示した。偏見一致・不一致ブロックの練習試行では 20 の刺激が並べられており（黒人・白人の写真、良い・悪い関連語の各刺激が 1 回ずつ）、制限時間 10 秒で分類してもらった。本試行では 40 の刺激に対し（各種類の刺激が 2 回ずつ）、制限時間 20 秒で分類してもらった。

顕在的な人種偏見の測定

顕在的な人種偏見は、質問紙で 6 対の形容詞対を示し、各形容詞対上で黒人・白人それぞれがどの位置にあてはまるかを、両極 7 件法で回答してもらうことで測定した。用いた

形容詞対は、「感じの悪いー感じのよい」、「好ましいー好ましくない」、「嫌いー好き」「不快なー快い」、「親しみやすいー親しみにくい」、「良いー悪い」であった。黒人に対して先に評定してもらい、その後同様に白人に対して評定してもらった（カウンターバランスはとらなかった）。

手続き

実験は、1セッションに4～8名の参加者に実験室に来てもらい、実施した。参加者には別の参加者の回答内容が見えないよう、ある程度距離をおいて着席してもらい、最初に実験の目的に関して、今後の実験で用いる材料を選ぶための予備調査として2つの調査を行うと説明した。

まず、「一般知識に関する調査」と称して、実験室の前方スクリーン上にスライドを呈示した。ここで条件の操作を行った。評価顕現条件では、黒人の顔写真と、その人物の名前と評価にまつわる情報を1人分ずつ、計15名を呈示した。評価非顕現条件では、評価にまつわる情報を含めず、顔写真とその人物の名前、生没年などを15名分呈示した。これら2つの条件では、同じ人物を同じ順で呈示した。統制条件では、15の世界遺産の写真とその遺産に関する情報を、1つずつ呈示した。参加者に伝えていた目的との整合性を保つため、参加者には各スライドを見て、その人物（統制条件では世界遺産）を知っているかどうか、自分と同じ大学に通っている学生の何パーセントがその人物を知っていると思うかを回答してもらった。各人物・世界遺産は10秒間呈示され、参加者にはその後の10秒間のうちに回答を記入するよう教示した。

次に、表紙に「写真と言葉の分類課題」と書いてある冊子を配布し、人種に関する潜在的偏見の強さを測定する紙筆版IATを実施した。参加者には紙筆版IATを実施する目的を、適切な制限時間を探ることであると伝えた。紙筆版IAT終了後、「アンケート」と題した冊子を新たに配布し、人種に関する顕在的偏見を測定するための質問などを含んだ質問紙に回答してもらった。質問紙への回答が終了した後、ディブリーフィングを行って実験は終了した。

6-3. 結果

分析対象と操作チェック

留学生が1名、IATでの刺激の分類において左側に分類されるものだけを回答していた者が1名いた。また、IATの偏見一致・不一致両ブロックの本試行における平均回答数は23.8 ($SD = 5.24$)であったが、回答数が平均よりも $3SD$ 以上少なかった者が1名いた。以上の3名のデータを以降の分析から除外し、46名分のデータを対象に分析を行った。

本研究では、呈示した黒人が参加者にある程度知られている必要があった。そこで、評価顕現条件と評価非顕現条件で呈示した人物のうち、各参加者が何名の人物を「知っている」と回答していたかについて分析を行った。知っている人数の最小値は、評価顕現条件で7、評価非顕現条件で5であった。また、平均は、評価顕現条件で10.3 ($SD = 2.16$)、評価非顕現条件で10.0 ($SD = 2.00$)であった。これらの結果から、呈示した黒人全員を知らなかった参加者はおらず、参加者にある程度知られていた人物を呈示できていたと思われる。なお、評価顕現条件と評価非顕現条件間で、知っている人物の平均に有意な差は認められなかった ($t(32) = .40, ns$)。

IATの結果

紙筆版 IAT は、偏見一致・不一致各ブロックの本試行を分析対象とした。本研究における紙筆版 IAT では、白人よりも黒人がネガティブに評価されているほど（つまり、潜在的な人種偏見が強いほど）、正答数は偏見不一致ブロックよりも一致ブロックのほうが多くなり、誤答数は逆に、一致ブロックよりも不一致ブロックのほうが多くなると考えられる。そこで、各ブロックの正答数から誤答数を減算した値をそのブロックのパフォーマンスを示す得点（以下、ブロック得点）として算出した。偏見一致・不一致ブロックにおける正答数、誤答数、ブロック得点の条件別平均値は、表 6-2 に示す通りであった。

一般に IAT では、2つの分類カテゴリーを組み合わせで分類する2ブロック間のパフォーマンスの差が、概念間の連合強度の指標として用いられる。そこで、参加者ごとに偏見一致ブロックの得点から偏見不一致ブロックの得点を減算し、これを IAT 量とした。IAT 量は、値が正に大きいほど、「白人－良い、黒人－悪い」の連合が「白人－悪い、黒人－良い」の連合よりも相対的に強いこと、すなわち、潜在的な人種偏見が強く持たれていることを表す。

表 6-2. 偏見一致・不一致ブロックにおける課題成績の条件別平均値（研究 1-2）

	偏見一致ブロック			偏見不一致ブロック		
	正答数	誤答数	ブロック 得点	正答数	誤答数	ブロック 得点
評価顕現 条件	25.36 (4.41)	.42 (.94)	24.93 (5.00)	22.00 (5.29)	.00 (.00)	22.00 (5.29)
評価非顕現 条件	27.40 (5.15)	.10 (.31)	27.30 (5.00)	21.50 (6.65)	.25 (.72)	21.25 (6.62)
統制条件	26.67 (5.61)	.25 (.45)	26.42 (5.71)	21.25 (5.40)	.50 (.67)	20.75 (5.40)

注) ブロック得点は、正答数から誤答数を減じた値である。()内の数値は標準偏差を表す。

本研究の仮説は、「黒人事例がポジティブに評価されていることを顕現的にして呈示されると、黒人に対する潜在的偏見が弱まるだろう」というものであった。作業仮説に置き換えると、「評価顕現条件における IAT 量は、評価非顕現条件や統制条件に比べて低だろう」となる。

IAT 量に対しては、実施ブロックの順序や参加者の性別が影響を与える可能性も考えられる。そこで仮説を検証するための分析として、IAT 量に対して、呈示事例（評価顕現条件 vs. 評価非顕現条件 vs. 統制条件）×ブロック順序（一致ブロック先 vs. 不一致ブロック先）×参加者性（男性 vs. 女性）による $3 \times 2 \times 2$ の分散分析を実施した。なお、3 要因すべて実験参加者間要因であった。分析の結果、ブロック順序の主効果が有意であったが ($F(1,34) = 13.30, p < .01$)、その他の要因の主効果やすべての交互作用効果は有意ではなかった ($F_s < 2.19, p_s > .12$)。

IAT 量は偏見一致・不一致ブロック間の得点の差であるが、同じ IAT 量の値でも、各ブロックで分類数が多かったときと少なかったときとでは、後者のほうが IAT 量から推定される連合の強さは相対的に大きくなるだろう。つまり、ブロック得点の差が持つ重みは、各ブロックの分類数の多寡によって異なると考えられる。そこで、IAT 量に対する分類数の影響を統制するため、以上の分析に偏見一致・不一致各ブロックの練習試行における分類数を共変量として投入した共分散分析を実施した。分析の結果、まず、共変量の効果は有意であった（偏見一致ブロック練習試行の分類数、偏見不一致ブロック練習試行の分類

数の順に、 $F(1,32) = 9.35, 7.03, p < .01, .05$ 。加えて、呈示事例に関わる効果として、呈示事例×ブロック順序の交互作用効果が有意であった ($F(2,32) = 3.81, p < .05$)。呈示事例×ブロック順序ごとの IAT 量の平均値は図 6-2 に示した通りであった。この交互作用効果を解釈するため、ブロック順序ごとに呈示事例要因の単純主効果検定を行った。その結果、偏見不一致ブロックを先に実施していた場合において、呈示事例の単純主効果が有意であった ($F(2,32) = 5.59, p < .01$)。Bonferroni の方法による多重比較を行ったところ、評価顕現条件における IAT 量 ($M = -1.86, SD = 6.26$) は、評価非顕現条件 ($M = 4.50, SD = 6.24$) や統制条件 ($M = 3.00, SD = 1.58$) に比べ、有意に低かった ($ps < .05$)。以上の結果は、偏見不一致ブロックを先に実施していた場合に限定されるものの、仮説を支持するものであった。

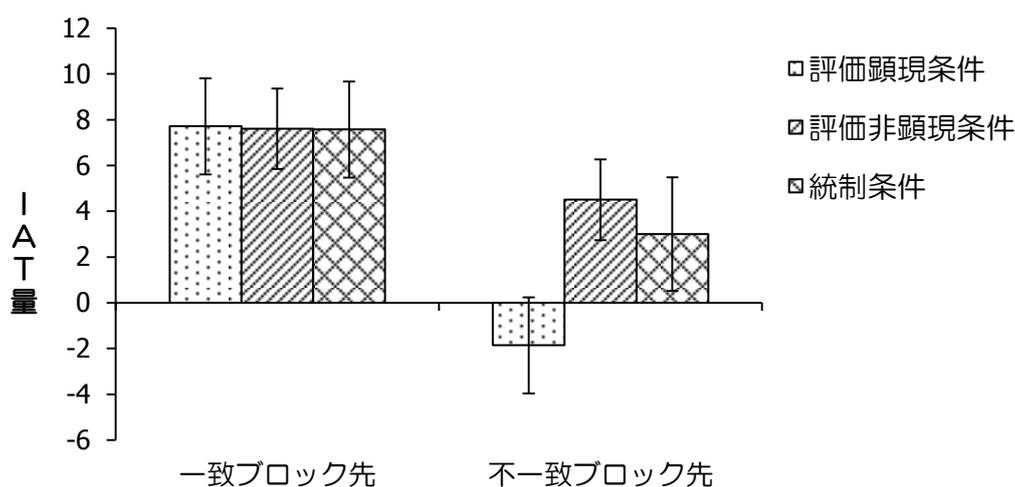


図 6-2. 呈示事例×ブロック順序による IAT 量の平均値 (研究 1-2)

注) IAT 量は、値が正に大きいほど黒人が白人よりも潜在的にネガティブに評価されていることを、値が負に大きいほど黒人が白人よりも潜在的にネガティブに評価されていることを表す。エラーバーは標準誤差を表す。

顕在指標の結果

黒人と白人それぞれに対する顕在的な評価は、6 項目の形容詞対によって測定していた。そこで、数値が大きいほどポジティブに評価されていることを表すように逆転項目を逆転したうえで、黒人・白人それぞれについて 6 項目の評定平均を算出した (順に、 $\alpha = .66, .59$)。そして、白人に対する評定平均から黒人に対する評定平均を減算し、顕在的人種偏

見を表す指標とした（以下、顕在的人種偏見得点）。顕在的人種偏見得点は、IAT 量と同様に、値が正に大きいほど黒人よりも白人がポジティブに評価されていること、すなわち、顕在的人種偏見が強いことを表す。呈示事例の各条件における黒人・白人それぞれに対する評定平均と顕在的人種偏見得点の平均値を表 6-3 に示す。

顕在的人種偏見得点に対し、呈示事例×参加者性の分散分析を実施したところ、両要因の主効果、交互作用効果ともに有意ではなかった（all F s < 1.20, p s > .28）。よって、反偏見事例の呈示が顕在的な人種偏見に影響を及ぼすことは示されなかった。また、潜在-顕在偏見間に相関関係があるかどうかを検討するため、IAT 量と顕在的人種偏見得点の相関係数を算出したところ、有意な相関は認められなかった（ $r(46) = -.10$, ns）。

表 6-3. 顕在指標の条件別平均値・標準偏差（研究 1-2）

	対黒人評定	対白人評定	顕在的人種偏見得点
評価顕現条件	4.15 (.66)	4.19 (.40)	.04 (.61)
評価非顕現条件	4.30 (.54)	4.13 (.46)	-.18 (.42)
統制条件	4.26 (.65)	4.29 (.44)	.03 (.40)

注) () 内の数値は標準偏差を表す。

6-4. 考察

実験結果のまとめ

研究 1-2 では、人種偏見を題材に、著名な反偏見事例の呈示が潜在的偏見に及ぼす影響を検討した。結果、反偏見事例である黒人の具体的な人物を、受賞歴など、その人物の評価にまつわる情報とともに呈示した評価顕現条件では、単純に黒人人物を呈示した評価非顕現条件や、黒人人物を呈示しなかった統制条件に比べ、潜在的な人種偏見が弱くなっていた。この結果は仮説を支持するものであるが、紙筆版 IAT で偏見不一致ブロックを先に実施していた場合に限定されていた。一方、顕在的な人種偏見の強さは条件間で有意な差が認められず、呈示した人物の影響を受けていなかった。

著名な反偏見事例の呈示が潜在的偏見に及ぼす影響

IAT で偏見不一致ブロックを先に実施した場合に限られてはいるものの、潜在的な人種偏見は、著名な黒人人物 (i.e., 反偏見事例) をその人物の評価に関する情報とともに呈示したときに低減することが示された。反偏見事例が呈示されると、対象カテゴリー表象内の反偏見的な側面が活性化し、潜在的偏見が低減すると本論文では想定しているが、以上の実験結果は、こうした想定を傍証するものである。参加者は、呈示された人物のうち少なくとも何名かを知っていたため、反証事例として呈示された人物は既有知識として、黒人カテゴリー表象内に含まれていたと考えられる。そして、呈示された人物の評価も顕現的に示されたことによって、黒人カテゴリーの表象内のポジティブな側面が部分的に活性化し、潜在的な人種偏見が低減したのだろう。

評価顕現条件で潜在的偏見が低減したことは、以上で述べたように、表象内の反偏見的な側面の部分的活性化によって説明可能である一方で、いくつかの代替説明も指摘できる。1 つは、評価的条件づけに基づく連合の構造変化による代替説明である。評価顕現条件で人物の写真とともに呈示した情報は、その人物の評価に関するもので、ポジティブな内容のものであった。そのため、「黒人」と「ポジティブ」が繰り返し同時に経験され、評価的条件づけが生じていた可能性がある。しかし、評価顕現条件における事例呈示の手続きは、研究 1-1 における有能肥満者呈示条件と同様であり、有能肥満者呈示条件で肥満者に対する潜在的偏見が低減することは示されなかった。研究 1-2 と研究 1-1 では、実験に用いた題材が黒人なのか肥満者なのか、著名な事例なのかそうでない事例なのかという違いがあった。しかし、評価的条件づけは、新奇の刺激を条件刺激とした場合 (Olson & Fazio, 2001) でも、既知の刺激を条件刺激とした場合 (Olson & Fazio, 2006) でも生じることが示されていることから、事例が著名であるかどうかの違いが評価的条件づけの生起を調整するとは考えづらい。したがって、評価的条件づけの観点からでは、研究 1-1 と研究 1-2 の結果を一貫して説明することができず、評価的条件づけに基づく連合構造の変化によって研究 1-2 の結果を説明することにも限界があるだろう。

考えられるもう 1 つの代替説明は、単純接触効果によって潜在的偏見が低減した可能性である。単純接触効果は、ある対象に反復して接触 (exposure) することで、その対象に対する評価がポジティブになる現象である (Zajonc, 1968)。川上・吉田 (2010) は、集団成員に繰り返し接触すると、その集団に対する潜在的態度がポジティブになることを報告している。すなわち、単純接触効果は潜在的態度においても生じる。本研究の評価顕現

条件では、黒人事例のみを 15 名呈示していたため、単純接触効果が生じていた可能性はあるだろう。しかし、もし単純接触効果によって潜在的な人種偏見が低減していたのであれば、評価非顕現条件においても評価顕現条件と同様に低減効果が見られるはずである。評価非顕現条件で潜在的な人種偏見が低減することを示す証左が得られなかったことを考慮すれば、単純接触効果による代替説明は排除できるだろう。

本研究の実験結果は、評価に関する側面を顕現的にして反偏見事例を呈示することが、カテゴリ表象に含まれる反偏見的な側面の活性化を促し、潜在的偏見の低減につながりやすいことを示唆する。しかし、「事例+評価呈示」の効果は、IAT で偏見不一致ブロックを先に実施していた場合に限られていたことから、効果の強さや持続性には疑問が残る。今後、さらに検討していく必要があるだろう。

日本における人種偏見

本研究では、人種偏見を潜在・顕在双方で測定していた。日本で潜在指標を用いて人種偏見が測定されることは、これまでにほとんどなかったと思われる。本研究の実験参加者は、ある授業を受講している大学生の中から選出し、人数も多くはなかった。そのため、結果の一般化可能性には問題があるが、潜在・顕在双方で人種偏見が持たれていたかどうかを検討することは、一定の意義があるだろう。

本研究の実験での統制条件は、人種に関連するような情報を事前に呈示せずに、紙筆版 IAT や質問紙に回答してもらったため、潜在的・顕在的人種偏見の標準的な強さを測定していたと考えられる。そこで、統制条件の参加者のデータを用いて、IAT 量と顕在指標について次のような分析を行った。IAT 量と顕在的人種偏見得点は、双方とも値が 0 であるときに白人と黒人に対する評価が偏っていない (i.e., 人種偏見が持たれていない) ことを表す。そこで、それぞれに対して、母平均 = 0 を帰無仮説とする t 検定を行った。その結果、IAT 量の平均値 ($M=5.67, SD=6.44$) は 0 よりも有意に大きかった ($t(11)=3.05, p<.05$) が、顕在的人種偏見得点の平均値 ($M=.03, SD=.40$) は 0 との間に有意な差は認められなかった ($t(11)=.24, ns$)。よって、黒人よりも白人が好まれる一定の傾向は、潜在レベルでは確認できたが、顕在レベルでは確認できなかった。

以上の結果は、日本でも潜在的なレベルでは人種偏見が持たれていることを示唆している。ただし、IAT では相対的な連合強度が測定されているため、必ずしも白人がポジティブに、黒人がネガティブに評価されていることを示すものではない。GNAT (Go/No-go

Association Task: Nosek & Banaji, 2001) など、単独の態度対象に対する潜在的態度を測定する方法を用いて、白人と黒人それぞれに対してどのような潜在的態度が持たれているのかを、今後検討していく必要があるだろう。

第7章 研究 2-1: 伝統的・非伝統的女性の事例想起が潜在的性役割観に及ぼす影響 (1) - 女子大学生を対象とした検討 -

7-1. 問題と目的

検討事項

研究 1 では、潜在的偏見に着目し、反偏見事例の呈示が潜在的偏見に及ぼす影響を検討した。これに対し研究 2 では、ステレオタイプに一致する事例もしくは反する事例の想起が、潜在的ステレオタイプに及ぼす影響について、2 つの実験で検討する。いずれの実験でも、性別に関するステレオタイプの一側面として捉えられる、「男は仕事、女は家庭」といった性役割観を題材とする。こうした性役割観に対して、キャリア女性などの仕事をする女性は性役割に一致しない存在として、主婦など家庭を生活の中心とする女性は性役割に一致する存在として位置づけることができよう。研究 2-1 (本章) と研究 2-2 (第 8 章) では、前者のような女性を非伝統的女性、後者のような女性を伝統的女性とし、それぞれに該当する具体的な人物 (事例) の想起が、「男性」と「仕事」、「女性」と「家庭」を結びつける連合、すなわち潜在的性役割観に及ぼす影響を検討する。

近年では、人々の持つ女性カテゴリーの表象は、「男は仕事、女は家庭」という従来型の性役割観に一致する伝統的女性と、一致しない非伝統的女性とに分化していることが指摘されている (e.g., Glick & Fiske, 2001; Six & Eckes, 1991)。このことから、女性カテゴリーに対しては、従来型の性役割観に一致する側面と一致しない側面の両方が表象されていることが示唆される。そうだとすれば、伝統的女性の具体的事例が想起された場合には、従来型の性役割観に一致する側面 (「女性-家庭」の連合) が、非伝統的女性の具体的事例が想起された場合には、従来型の性役割観に反する側面 (「女性-仕事」の連合) が活性化し、潜在的性役割観に影響を及ぼすことが予測される。

以上のことに関連して、高林・沼崎 (2010) は、女子大学生を対象として実験を行い、伝統的女性としての自己表象が顕現化したときには、非伝統的女性としての自己表象が顕現化したときに比べて、伝統的・非伝統的女性に対する潜在的ステレオタイプが強くなることを報告している。しかし、自己表象を扱っていることから、以上の研究知見の適用範

囲は限られると言える。例えば、伝統的・非伝統的女性のいずれかに強く同一視する人において、もう一方の女性像は自己表象として機能しにくいだろう。また、伝統的・非伝統的女性としての自己表象の顕現化が、上位の「男性 vs. 女性」という枠組みでの潜在的ステレオタイプに影響するかどうかは定かではない。そこで本研究では、伝統的・非伝統的女性に該当する事例を想起させることによって、自己表象ではなく、一般的な知識としての伝統的・非伝統的女性の表象を顕現化させる。そして、事例想起の操作が、「男性 vs. 女性」という枠組みでの潜在的性役割観 (i.e., 男は仕事、女は家庭) に影響を及ぼすことを検討する。

実験の概要と仮説

研究 2-1 では、伝統的女性・非伝統的女性にあてはまる人物の想起が、潜在的性役割観に及ぼす影響について検討することを目的とする。実験は女子大学生を対象に行い、まず、参加者に伝統的女性、もしくは非伝統的女性にあてはまる具体的な人物をできるだけ多く想起してもらう。そして、性別 (男性 vs. 女性) と役割 (仕事 vs. 家庭) 間の潜在的な連合強度 (i.e., 潜在的性役割観) を紙筆版 IAT によって測定する。また、顕在的性役割観も測定し、想起した事例の影響を探索的に検討することにした。仮説は以下のとおりである。非伝統的女性の事例を想起した場合は、伝統的女性の事例を想起した場合に比べ、男性と仕事、女性と家庭を結びつける従来型の潜在的性役割観が弱まるだろう。

Gawronski and Bodenhausen (2005) は、ポジティブな黒人事例を 10 人想起した場合よりも 3 人想起した場合において、潜在的な人種偏見が弱くなることを示している。彼らの実験では、想起する人数があらかじめ指定されていた。そのため、10 人想起するよう言われた参加者は、3 人想起するよう言われていた参加者よりも、人物を想起することに関して困難さを感じていたと考えられる。このことを本研究にあてはめれば、女性事例の想起に困難さを感じてしまった場合には、潜在的性役割観に対する想起事例の影響が生じにくくなると言える。そこで本研究では、事例の想起に対して主観的困難さを感じさせないよう、人数を指定せずに事例 (人物) を想起させる手続きを取ることとした。そして、事後的に想起の困難さを測定し、想起できた人数や想起困難度が潜在的性役割観に影響を及ぼしうるかについて、探索的に検討することにした。

7-2. 方法

実験参加者

神奈川県内にある4年制女子大学で「心理学実験演習」を受講している女子大学生66名が実験に参加した。平均年齢は20.5歳 ($SD = .96$) であった。実験は、講義内の実習課題の1つとして実施された。

実験計画

想起内容(伝統的女性想起条件 vs. 非伝統的女性想起条件)の1要因2水準実験参加者間計画であった。参加者は、伝統的女性想起条件、非伝統的女性想起条件のいずれかに、ランダムに割り当てられた。

潜在的性役割観の測定

潜在的性役割観の測定には紙筆版IATを用いたが、研究1-2とは分類カテゴリーや刺激、ブロックの構成などが異なっていた。本研究では、「男性-女性」、「仕事-家庭」を分類カテゴリーとして用いた。「男性」と「女性」に分類される刺激には、男性・女性それぞれに典型的な名前を5つずつ用いた(「男性」名: たろう、こうじ、くにお、みのる、たかし / 「女性」名: えりか、ゆきの、かずえ、まさこ、ちあき)。「仕事」と「家庭」に分類される刺激には、それぞれに関連する単語を5つずつ用いた(「仕事」関連語: 会議、職場、通勤、勤務、会社 / 「家庭」関連語: 掃除、洗濯、家事、育児、料理)。

IATは7ブロックから構成されていた。第1ブロックは名前を「男性-女性」で分類するブロック、第2ブロックは単語を「家庭-仕事」で分類するブロックであった。第3・第4ブロックは、第1・第2ブロックの分類基準が組み合わせられ、「男性・家庭-女性・仕事」で分類するブロック(以下、性役割不一致ブロック)であり、第3ブロックが練習試行、第4ブロックが本試行として実施された。第5ブロックは第2ブロックのカテゴリー位置が左右逆転されたブロック、すなわち、「仕事-家庭」で分類するブロックであった。第6・第7ブロックは、第1・第5ブロックの分類基準が組み合わせられ、「男性・仕事-女性・家庭」で分類するブロック(以下、性役割一致ブロック)であり、第6ブロックが練習試行、第7ブロックが本試行として実施された。なお、性役割一致・不一致ブロックの実施順序はカウンターバランスを取らず、すべての参加者で性役割不一致ブロックを先に

実施した。

性役割一致・不一致ブロックの練習試行では、20 の刺激に対し制限時間 10 秒で分類してもらった。性役割一致・不一致ブロックの本試行を含むその他のブロックでは、40 の刺激に対し制限時間 20 秒で分類してもらった。誤った分類を防ぐために刺激の一覧を実施前に呈示したこと、各ブロックの実施前にそのブロックでの分類方法を説明したことなどは、研究 1-2 での紙筆版 IAT の手続きと同様であった。

顕在的性役割観の測定

顕在的な性役割観は、質問紙に回答してもらうことによって測定した。顕在的性役割観の指標には、平等主義的性役割態度スケール短縮版（鈴木, 1994; 以下、SESRA）を用いた²。この尺度は 15 項目（e.g., 女性のいるべき場所は家庭であり、男性のいるべき場所は職場である）から構成されており、各項目に対して 5 件法（1. 全然そう思わない-5. 全くその通りだと思う）で回答してもらった。

手続き

実験は教場にて、講義の受講生を数セッションに分けて実施された。実験は講義中に実施するいくつかの実験の 1 つとして実施され、参加者には、「態度測定」をテーマにした実験であることを伝えた。また、得られた実験データの匿名性は保たれるが、実習用として講義の受講生に公開されること、研究のために利用されることを説明した。その際、実験データの研究利用については、実験終了後に個々に承諾を求めることも伝えた。その後、実験用の冊子を 1 部ずつ配布し、実験には「第 1 課題」から「第 3 課題」まで 3 つの課題があり、冊子もそれにあわせて 3 部構成になっていると教示した。

「第 1 課題」では、設定されたテーマにあてはまる人物をできるだけ多く思い浮かべ、その人物の名前を書きだしてもらった（以下、想起課題）。参加者には、この課題は今後実施する実験のための予備調査であると教示した。ここで想起内容の操作を行った。伝統的女性想起条件では、「“良き妻”、“良き母”というイメージがある、またはそれが似合いそうな女性有名人」として思い浮かぶ人物を書き出してもらった。一方、非伝統的女性想起

² SESRA は Scale of Egalitarian Sex Role Attitudes の略であり、この尺度の短縮版（short-form）は一般に SESRA-S と表記される。研究 2-1 と研究 2-2 ではいずれも短縮版を用いたが、表記を単純化するため、本論文では SESRA と記すことにする。

条件では、「“キャリアウーマン”、“バリバリ働いている”というイメージがある、またはそれが似合いそうな女性有名人」として思い浮かぶ人物を書き出してもらった。制限時間は5分であり、できるだけ多くの人物を挙げるようにとだけ教示し、目標数などは設定しなかった。

「第2課題」は瞬間的な判断に関する課題であると教示したうえで、潜在的性役割観を測定する紙筆版 IAT に取り組んでももらった。IAT 終了後、「第3課題」は実験に関するアンケートであると教示し、質問紙に回答してもらった。質問紙には、SESRA や、想起課題の困難度を測定する項目などが含まれていた。想起課題の困難度は、5項目（e.g., 人物を思い浮かべるのは難しかった）に対し、5件法（1. 全然そう思わない-5. 非常にそう思う）で回答してもらった。

全員が質問紙に回答し終わった後、ディブリーフィングを行った。そして、研究での実験データの使用を承諾するかどうかについて尋ね、実験は終了した。

7-3. 結果

分析対象と操作チェック

実験データを研究で使用するということについて承諾を得られなかった者が2名いた。紙筆版 IAT の正答率をブロック別に見たところ、性役割不一致ブロックの本試行における正答率が著しく低かった者が1名いた（正答率が51.7%）。また、操作チェックとして想起課題における想起人物数を見たところ、1名も挙げられていなかった者が1名いた。以上の4名を分析対象から除外し、62名を分析対象として以降の分析を行った。

想起課題における想起人物数は、1名も挙げられていなかった上記の1名を除けば、全参加者が2名以上挙げており、指定されたタイプの女性を想起できていたと思われる。

潜在的性役割観に関する結果

紙筆版 IAT は、性役割不一致ブロックの本試行（第4ブロック）と性役割一致ブロックの本試行（第7ブロック）を分析対象とした。研究 1-2 と同様に、これら2ブロックの正答数と誤答数、そして正答数から誤答数を減算したブロック得点の平均値を条件別に求めたところ、表 7-1 のようになった。一致・不一致ブロック間でブロック得点の平均値が異なるかどうかを検討するため、想起条件ごとに対応のある t 検定を実施した。その結果、

表 7-1. 性役割一致・不一致ブロックにおける課題成績の条件別平均値（研究 2-1）

	性役割一致ブロック			性役割不一致ブロック		
	正答数	誤答数	ブロック 得点	正答数	誤答数	ブロック 得点
伝統的女性 想起条件	31.84 (4.44)	.23 (.56)	31.61 (4.52)	22.16 (6.04)	.87 (1.15)	21.29 (6.49)
非伝統的女性 想起条件	30.97 (4.82)	.29 (.86)	30.68 (5.02)	23.48 (5.86)	.42 (.85)	23.06 (6.10)

注) ブロック得点は、正答数から誤答数を減じた値である。() 内の数値は標準偏差を表す。

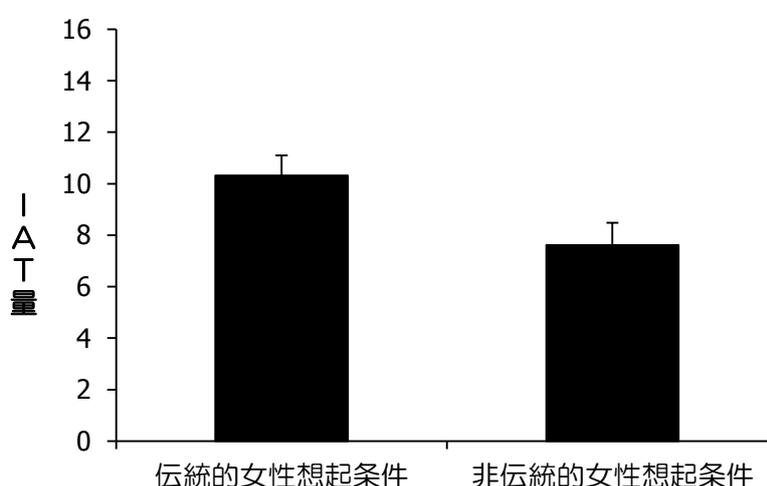


図 7-1. IAT 量の条件別平均値（研究 2-1）

注) IAT 量は、値が正に大きいほど伝統的な潜在的性役割観が強いことを表す。エラーバーは標準誤差を表す。

いずれの条件においても、不一致ブロック（伝統的女性想起条件、非伝統的女性想起条件の順に、 $M=21.29, 23.06$ ）よりも一致ブロック（ $M=31.61, 30.68$ ）のほうが、ブロック得点の平均値は有意に高かった（ $t=13.15, 8.74, ps < .001$ ）。これらの結果は、どちらの条件においても、男性と仕事、女性と家庭を結びつける連合が、その逆の連合よりも強く持たれていること、すなわち、伝統的な潜在的性役割観が持たれていることを示すものであった。

本研究の仮説は、「非伝統的女性の事例を想起した場合は、伝統的女性の事例を想起した

場合に比べ、男性と仕事、女性と家庭を結びつける伝統的な潜在的性役割観が弱まるだろう」であった。この仮説を検討するため、まず、参加者ごとに性役割一致ブロックの得点から性役割不一致ブロックの得点を減算し、これを IAT 量とした。IAT 量は、値が正に大きいほど、伝統的な潜在的性役割観が強いことを表す。IAT 量の平均値を想起内容条件別に算出したところ、伝統的女性想起条件では 10.32 ($SD = 4.37$)、非伝統的女性想起条件では 7.61 ($SD = 4.85$) であった (図 7-1 参照)。各条件の IAT 量の平均値を対応のない t 検定によって比較したところ、有意差が認められ、IAT 量は伝統的女性想起条件に比べ、非伝統的女性条件のほうが有意に低くなっていた ($t(60) = 2.31, p < .05$)。この結果は、仮説を支持するものであった。

顕在的性役割観に関する結果

次に、伝統的・非伝統的女性の事例想起が、顕在的性役割観に影響を及ぼしていたかどうかについて分析を行った。SESRA の逆転項目を逆転し、参加者ごとに全 15 項目の評定平均を算出し、これを SESRA 得点とした ($\alpha = .73$)。SESRA 得点の範囲は 1~5 で、値が大きいほど平等主義的な性役割観が、値が小さいほど伝統的な性役割観が持たれていることを表す。

SESRA 得点の条件別平均値は、伝統的女性想起条件で 3.73 ($SD = .47$)、非伝統的女性想起条件で 3.65 ($SD = .47$) であった。各条件の SESRA 得点の平均値を対応のない t 検定によって比較したところ、有意な差は認められなかった ($t(60) = .63, ns$)。よって、顕在的性役割観において、伝統的・非伝統的女性の事例想起の影響は見られなかった。また、IAT 量と SESRA 得点の間に有意な相関関係は見られなかった ($r(62) = -.14, ns$)。

想起数・想起困難度の影響

想起課題における想起人物数や想起困難度について分析を行った。想起課題で挙げられた人物数の平均は、伝統的女性想起条件で 6.94 人 ($SD = 4.15$)、非伝統的女性想起条件で 7.68 人 ($SD = 3.92$) であり、条件間で有意な差は認められなかった ($t(60) = .72, ns$)。想起困難度は 5 項目で測定していたが、そのうち 1 項目は他の項目との相関が低かった。そこで、残り 4 項目について、値が大きいほど想起が困難であったことを表すように逆転項目を逆転したうえで、参加者ごとに評定平均を算出し、これを想起困難度の指標とした ($\alpha = .75$, 得点範囲: 1~5)。想起困難度の平均は、伝統的女性想起条件で 4.34 ($SD = .60$)、

非伝統的女性想起条件で 4.33 ($SD = .65$) であり、条件間で有意な差は認められなかった ($t(60) = .05, ns$)。一方で、想起人物数と想起困難度の間には有意な負の相関がみられ ($r(62) = -.63, p < .001$)、挙げられた人物が少なかった参加者ほど、想起の困難さを感じていた。

次に、想起した事例の内容と想起人物数が性役割観に影響を及ぼしていたかどうかについて、次のような分析を行った。まず、想起人物数を標準化した。そして、IAT 量もしくは SESRA 得点を従属変数、想起内容（伝統的 vs. 非伝統的女性想起条件）と想起人物数（連続変数）、そしてこれらの変数の交互作用項を独立変数とした、一般線形モデルによる分析を行った。その結果、IAT 量を従属変数とした場合では、想起内容の主効果が有意であったが ($F(1, 58) = 4.84, p < .05$)、その他で有意となった効果はなかった ($F_s < 1$)。SESRA 得点を従属変数とした場合では、すべての効果が有意ではなかった (all $F_s < 1$)。

最後に、想起した事例の内容と想起困難度が性役割観に影響を及ぼしていたかどうかを検討した。想起困難度を標準化したうえで、想起人物数の場合と同様にして、一般線形モデルによる分析を行った。その結果、IAT 量を従属変数とした場合では、想起内容の主効果が有意であったが ($F(1, 58) = 5.32, p < .05$)、その他で有意となった効果はなかった ($F_s < 1.10, ps > .30$)。SESRA 得点を従属変数とした場合では、すべての効果が有意ではなかった ($F_s < 1$)。

以上の分析結果から、伝統的・非伝統的女性事例の想起は潜在的性役割観に影響していたが、その影響は想起人物数や想起困難度によって調整されていなかった。また、顕在的性役割観に対しては、想起人物数や想起困難度を考慮しても、想起した事例の内容は影響していなかった。

7-4. 考察

実験結果のまとめ

本研究では、伝統的女性、もしくは非伝統的女性にあてはまる具体的な事例の想起が、潜在的性役割観や顕在的性役割観に及ぼす影響を検討した。実験の結果、伝統的女性を想起した場合に比べ、非伝統的女性を想起した場合には、男性と仕事、女性と家庭を相対的に強く結びつける連合が弱まり、潜在的性役割観が平等主義的な方向に変容することが示された。その一方で、顕在的に保持されている性役割観は想起した女性タイプの影響を受

けていなかった。さらに、想起した女性タイプが性役割観に及ぼす影響を、想起人物数や想起困難度が調整する可能性について探索的に検討したが、潜在的性役割観においても、潜在的性役割観においても、これらの要因の調整効果は見られなかった。

伝統的・非伝統的女性の事例想起と性役割観

本研究では、非伝統的女性の事例が想起されると、伝統的女性の事例が想起された場合に比べ、伝統的な意味での潜在的性役割観が低減することが示された。伝統的女性は「家庭」と、非伝統的女性は「仕事」と強く結びついて、女性カテゴリーの中で異なる側面を形成していると考えられる。そのため、伝統的 females 事例が想起された場合には、従来の性役割に一致する側面が、非伝統的 females が想起された場合には、従来の性役割に一致しない側面が活性化したのである。その結果、伝統的 females 事例が想起された場合より、非伝統的 females が想起された場合に、潜在的性役割観が弱まったと考えられる。

本研究では、4年制女子大学に通う女性を対象に実験を実施したが、紙筆版 IAT では、いずれの条件においても、性役割一致ブロックの得点のほうが性役割不一致ブロックの得点よりも有意に高かった。よって、本研究の実験参加者のような教育水準の高い女性であっても、潜在的にはいまだ伝統的な性役割観が持たれていることが示唆される。鈴木(1994)は、顕在レベルでは、男性よりも女性のほうが、教育水準が低い女性よりも高い女性のほうが平等主義的な性役割観を持っていることを報告している。本研究でも、SESRA 得点は全体で 3.69 ($SD = .47$) となっており、SESRA 得点の範囲が 1~5 であることを考慮すると、数値としては高く、顕在的には平等主義的な性役割観が持たれていたと言える。それにも関わらず、潜在的には男性と仕事、女性と家庭を結びつけやすいことが示された。しかし本研究の成果から、こうした潜在的な性役割観も、非伝統的 females が想起された状況では弱まると考えられる。

伝統的・非伝統的女性の事例想起は、潜在的性役割観に影響していた一方で、顕在的性役割観には影響を及ぼしていなかった。実験では、潜在的性役割観を測定した後に顕在的性役割観を測定したため、顕在的性役割観に対する事例想起の影響を検出しづらかった可能性がある。本研究では、潜在的性役割観への影響に着目していたため、紙筆版 IAT を先に実施していたが、測定順序をカウンターバランスするなどして、伝統的・非伝統的女性の事例想起が顕在的性役割観に影響を及ぼすかどうかについて検討する必要があるだろう。

非伝統的 females にあてはまる具体的な人物は、伝統的な性役割には合致しない人物、すな

わち反ステレオタイプ的な事例として位置づけることができる。よって、本研究の実験結果は、反ステレオタイプ事例の想起は潜在的ステレオタイプを低減する効果があることを示唆しているだろう。ただし、本研究における潜在的性役割への影響は、伝統的女性を想起した場合と非伝統的女性を想起した場合の相対的な差である。潜在的性役割観が非伝統的女性の想起によって弱くなったのか、伝統的女性の想起によって強くなったのか、またはその両方なのかについては、本研究の実験結果から明確にすることはできない。この点は、今後の課題と言える。

また、本研究の実験に参加したのは女性だけであったため、男性でも本研究と同様の結果が得られるかどうかは定かではない。そこで次の研究 2-2 では本研究と同様の実験を、男女両方を対象として実施し、潜在的性役割観に対する伝統的・非伝統的女性の事例想起の影響が男性でも生じるかどうかについて検討する。

想起困難度の影響

本研究では、伝統的・非伝統的女性の事例想起が潜在的性役割観に影響を及ぼしていたが、この影響は想起困難度によって調整されていなかった。ここで、この点について考察しておく。

Gawronski and Bodenhausen (2005) は、黒人のポジティブな人物を 10 人挙げるように言われていた場合ではなく、3 人挙げるように言われていた場合において、潜在的人種偏見が低減したことを報告している。3 人挙げることは比較的容易であると考えられることから、反偏見事例の想起が容易である場合に、潜在的偏見は低減しやすいことが示唆される。このことを本研究にあてはめれば、伝統的女性が想起されたときよりも非伝統的女性が想起されたときに潜在的性役割観が低減するのは、事例の想起困難度が低い (i.e., 想起容易) 場合に限定されることになる。しかし、本研究では、潜在的性役割観に対する事例想起の影響は、想起困難度によって調整されていなかったため、Gawronski たちの実験結果とは一貫しないことになる。

なぜ、本研究では、想起困難度による調整効果が見られなかったのだろうか。考えられる理由として、人物想起に関する実験手続きの違いから、本研究では潜在的性役割観が測定される前に、想起の容易さ・困難さを実験参加者が感じていなかった可能性が指摘できる。Gawronski たちの実験では、人物を何人挙げなければならないかが、参加者にあらかじめ伝えられていた。伝えられていた人数は一種の目標として機能し、3 人挙げるのは達

成容易だが、10人挙げるのは達成困難であると想定できる。そのため、参加者は人物を想起することの容易さ・困難さを知覚しやすかったと思われる。一方で、本研究の実験では、想起する人数を指定しなかったため、人物想起に対する容易さ・困難さが知覚されにくかっただろう。本研究での想起困難度は、実験の最後に測定した回顧的な困難度であるともいえる。こうしたことから、本研究では想起困難度による調整効果が見られなかったのだろう。ただし、言い換えれば、伝統的女性あるいは非伝統的女性を想起した段階で想起の困難さが知覚され、「そのような人はあまりいない」などと推論されれば、想起した女性タイプの影響は消失するとも考えられる。今後は、Gawronski たちの実験と同様に想起困難度を実験的に操作するなどして、伝統的・非伝統的女性事例の想起が潜在的性役割観に及ぼす影響を検討する必要があるだろう。

第8章 研究 2-2: 伝統的・非伝統的女性の事例想起が潜在的性役割観に及ぼす影響 (2) - 男女大学生を対象とした検討 -

8-1. 問題と目的

目的

研究 2-1 では、非伝統的女性の事例が想起されると、伝統的女性の事例が想起された場合に比べ、伝統的な潜在的性役割観が低減することが示された。非伝統的女性は、性役割（男は仕事、女は家庭）に反する存在として位置づけられるため、研究 2-1 の結果は、反ステレオタイプ事例の想起によって、潜在的ステレオタイプが低減することを示している。しかし、女子大学生を対象として実験を実施していたため、男性でも同様の効果が生じるかを検討できていなかった。そこで、研究 2-2 では、男女共学の大学に通う男女大学生を対象として、研究 2-1 と同様の実験を実施する。

では、男性でも女性と同様に、非伝統的女性の事例想起によって潜在的性役割観が低減するだろうか。女性カテゴリーの表象において、非伝統的女性は性役割に反する側面として、伝統的女性は性役割に一致する側面として表象されていると考えられる。そのため、非伝統的女性事例の想起は性役割に反する側面を、伝統的女性事例の想起は性役割に一致する側面を活性化させ、潜在的性役割観に影響を及ぼしていたと考えられる。このように考えると、それぞれの側面として表象内に保持されている情報がどの程度組織化されているかによって、潜在的性役割観に対する事例想起の影響は調整されると予測される。すなわち、非伝統的・伝統的女性に関してより多くの知識が持たれ、それらが互いに結びついて表象されているほど、潜在的性役割観は各女性タイプの事例想起によって変容しやすいだろう。

一般に、性別間の相互作用よりも、性別内の相互作用のほうが多いと思われる。また、女子大学生は、伝統的女性と非伝統的女性の双方を可能自己の表象として持ちうる（高林・沼崎, 2010）。こうしたことから、一般に、男子大学生よりも女子大学生において、伝統的・非伝統的女性に関する情報は組織化されていると言えるだろう。よって、伝統的・非伝統的女性事例の想起が潜在的性役割観に及ぼす影響は、男子大学生よりも女子大学生におい

て顕著であるだろう。

また、女子大学生の中でも、いわゆる“キャリア女性”を志向する人もいれば、そのような志向性を強く持たず、“将来、就職しても結婚したら家庭に”と考えている人もいるだろう。前者に比べて後者のような女子大学生は、伝統的・非伝統的女性の表象を同程度に持っており、どちらのタイプの女性表象が顕現的であるかは、状況の影響を受けて変動しやすいかもしれない。そうだとすれば、キャリアへの志向性が低い女子大学生のほうが、キャリアへの志向性が高い女子大学生に比べて、伝統的・非伝統的女性事例の想起による潜在的性役割観の影響が顕著になることが予想される。そこで本研究では、実験参加者が、将来的にどの程度仕事（キャリア）を生活の中心にしようと考えているかを、キャリア志向度として測定する。そして、伝統的・非伝統的女性の事例想起が潜在的性役割観に及ぼす影響を検討すると同時に、キャリア志向度の影響についても検討する。

実験概要と仮説

以上で述べた点について検討するため、本研究では、男女大学生を対象として研究 2-1と同様の実験を実施する。また、キャリア志向度も測定し、潜在的・顕在的性役割観への影響を検討する。仮説は次の通りである。女性参加者では、非伝統的女性の事例が想起されると、伝統的女性の事例が想起された場合よりも、潜在的性役割観が低減するだろう。一方で、男性参加者ではこのような低減効果は見られないだろう。

なお、キャリア志向度の影響については、特に仮説を設けずに検討する。

8-2. 方法

実験参加者

東京都内にある男女共学の4年制大学で「社会統計学」を受講している大学生71名（男性28名、女性43名）が実験に参加した。平均年齢は19.8歳（ $SD = .89$ ）であり、ほとんどが大学2年生であった。参加者は、受講している講義の出席追加点と引き換えに実験に参加した。

実験計画

参加者は、伝統的女性想起条件、非伝統的女性想起条件のいずれかに、ランダムに割り

当てられた。実験的に操作したのは想起する事例の内容だけであったが（以下、要因名を想起内容とする）、分析時には、参加者性（男 vs. 女）とキャリア志向度（連続変量）も独立変数とした。

手続き

実験は講義後半の時間を使って、教場にて一斉に実施された。参加者には、実験は3部構成となっていると伝え、第1部は「イメージに関する調査」（実際は想起課題）、第2部は「瞬間的な判断に関する実験」（実際は紙筆版 IAT）、第3部は「調査と実験に関するアンケート」と説明した。大人数で一斉に実施するため、各部分を実験者の指示に従って進め、隣の人と話をしたりせず、自分の思ったとおりのことを回答してほしいと教示した。そして、実験参加への最終的な承諾を得るため、「5分後に実験を始めるので、実験参加を取りやめたい場合は実験が始まるまでに退室してもよい」と伝えた。その際、実験に参加しないことによるデメリットは一切ないことを強調した。5分経過した後、残った者は実験参加への承諾がとれたものとして、実験を始めた。

最初に、研究 2-1 と同様の手順で想起課題を実施した。次に、紙筆版 IAT に取り組んでもらった。紙筆版 IAT で用いた分類カテゴリー（「男性－女性」、「仕事－家庭」）と刺激は研究 2-1 と同じであったが、ブロックの構成は若干修正した。研究 2-1 では、性役割一致・不一致ブロックを練習試行と本試行の2つに分け、練習試行では20の刺激を10秒間で、本試行では40の刺激を20秒間で分類してもらっていた。これに対し、本研究では、同じ分類を2度繰り返すことは同じであったが、2回とも本試行として、40の刺激を20秒間で分類してもらった。

紙筆版 IAT 終了後、アンケートと称して質問紙に回答してもらった。質問紙には、顕在的性役割観を測定するための SESRA や、キャリア志向度を測定する質問項目などが含まれていた。キャリア志向度は、「就職したら、責任のかかる大きな仕事も任されるようになりたい」、「結婚したら、仕事よりも家庭を大切にしたい（逆転項目）」など、5項目で測定した。参加者には、各項目に対してそう思う程度を5件法（1. 全然そう思わない－5. 非常にそう思う）で回答してもらった。

全員がすべての質問に回答を終えた後、ディブリーフィングを行って実験は終了した。

8-3. 結果

分析対象と操作チェック

紙筆版 IAT の性役割一致ブロックや不一致ブロックで、分類数や正答率が他の参加者と比べて著しく低い参加者がいるかどうかをチェックした。その結果、著しく分類数が少ない（平均より $3SD$ 以上少ない）者が 1 名いた。また、正答率が偶然の確率（i.e., 50%）とほぼ変わらなかった者が 4 名いた（これら 4 名の正答率は、48.0～52.5%）。以上の 5 名を分析対象から除外し、66 名を分析対象として以降の分析を行った。

次に、想起課題で挙げられた人物数を見たところ、すべての参加者が少なくとも 1 名挙げており、1 名も挙げられなかった参加者はいなかった。想起した人物数が想起内容の条件や参加者の性別によって異なるかどうかを検討するため、想起人物数に対して、想起内容（伝統的女性想起条件 vs. 非伝統的女性想起条件）×参加者性（男性 vs. 女性）の分散分析を実施した（想起人物数の平均値は図 8-1 参照）。その結果、想起内容の主効果が有意となり（ $F(1,62) = 7.25, p < .01$ ）、伝統的女性想起条件（ $M = 2.87, SD = 1.88$ ）よりも非伝統的女性想起条件（ $M = 4.09, SD = 1.69$ ）のほうが想起人数が有意に多かった。また、参加者性の主効果が有意傾向であり（ $F(1,62) = 3.22, p = .08$ ）、男性（ $M = 3.04, SD = 1.91$ ）よりも女性（ $M = 3.80, SD = 1.81$ ）のほうが想起人数が多い傾向が見られた。想起内容×参加者性の交互作用効果は有意ではなかった（ $F < 1$ ）。

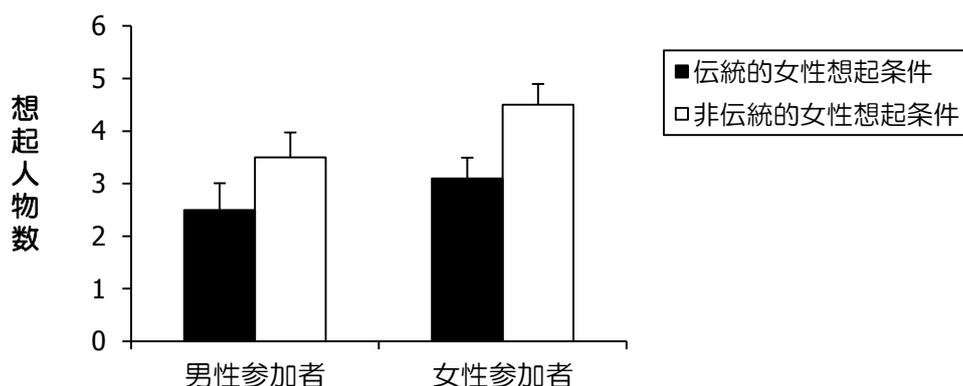


図 8-1. 想起内容×参加者性による想起人物数の平均値（研究 2-2）

注) エラーバーは標準誤差を表す。

本研究では、事例想起の内容や、参加者の性別、キャリア志向度によって潜在的性役割観が異なるかどうかを検討することが目的である。キャリア志向度も独立変数として投入することになるが、その測定は紙筆版 IAT (i.e., 従属変数) の後に行っていた。そこで、キャリア志向度が想起内容の条件や参加者の性別によって異なっていないことを確認するための分析を行った。

キャリア志向度は5項目で測定していた。値が大きいほどキャリア志向度が高いことを表すように逆転項目を逆転し、参加者ごとにキャリア志向度の評定平均を算出した ($\alpha = .63$, 得点範囲: 1-5; 以下、キャリア志向度得点)。キャリア志向度得点の平均値は 3.05 ($SD = .57$) であった。キャリア志向度得点に対し、想起内容 (伝統的女性想起条件 vs. 非伝統的女性想起条件) × 参加者性 (男 vs. 女) の分散分析を実施したところ、すべての効果が有意ではなかった (all F s < 1)。よって、キャリア志向度得点は想起した事例の内容や参加者の性別によって異なっていなかった。

潜在的性役割観に関する結果

紙筆版 IAT では、性役割一致・不一致ブロックをそれぞれ2回実施していた。これらのブロックを分析対象として、まず、参加者ごとに一致ブロック2回、不一致ブロック2回における、正答数・誤答数・ブロック得点 (正答数から誤答数を減算した値) の平均を算出した。想起内容の条件と参加者の性別ごとに、これらの平均値を算出したところ、表 8-1 のようになった。さらに、各参加者の一致ブロックの得点から不一致ブロックの得点を減算し、これを IAT 量とした。IAT 量は研究 2-1 と同様に、値が正に大きいほど、伝統的な潜在的性役割観が強いことを表す。

事例想起の内容や、参加者の性別、キャリア志向度が潜在的性役割観に影響を及ぼしていたかどうかを検討するため、次のような分析を行った。まず、キャリア志向度得点を標準化した。そして、IAT 量を従属変数、想起内容 (伝統的女性想起条件 vs. 非伝統的女性想起条件)、参加者性 (男 vs. 女)、キャリア志向度得点 (連続変数) と、これら3変数から構成可能なすべての交互作用項を独立変数とした、一般線形モデルによる分析を行った。その結果、想起内容 × 参加者性 × キャリア志向度得点の交互作用効果が有意であった ($F(1,58) = 4.90, p < .05$)。この交互作用効果を解釈するため、キャリア志向度得点の平均 ± 1SD 地点における想起内容の条件と参加者の性別ごとの推定値をプロットしたのが図 8-2 である。

表 8-1. 性役割一致・不一致ブロックにおける課題成績の条件別平均値（研究 2-2）

		性役割一致ブロック			性役割不一致ブロック		
		正答数	誤答数	ブロック 得点	正答数	誤答数	ブロック 得点
伝統的女性 想起条件	男性	31.75	.21	31.54	23.08	.29	22.79
	参加者	(5.63)	(.26)	(5.62)	(4.89)	(.40)	(4.86)
	女性	32.00	.18	31.83	22.58	.38	22.20
	参加者	(4.02)	(.41)	(4.08)	(4.75)	(.69)	(4.91)
非伝統的女性 想起条件	男性	30.36	.21	30.14	21.00	.54	20.46
	参加者	(5.62)	(.32)	(5.60)	(5.19)	(.60)	(5.38)
	女性	31.83	.25	31.58	23.15	.28	22.88
	参加者	(6.02)	(.50)	(6.20)	(4.68)	(.47)	(4.95)

注) ブロック得点は、正答数から誤答数を減じた値である。()内の数値は標準偏差を表す。

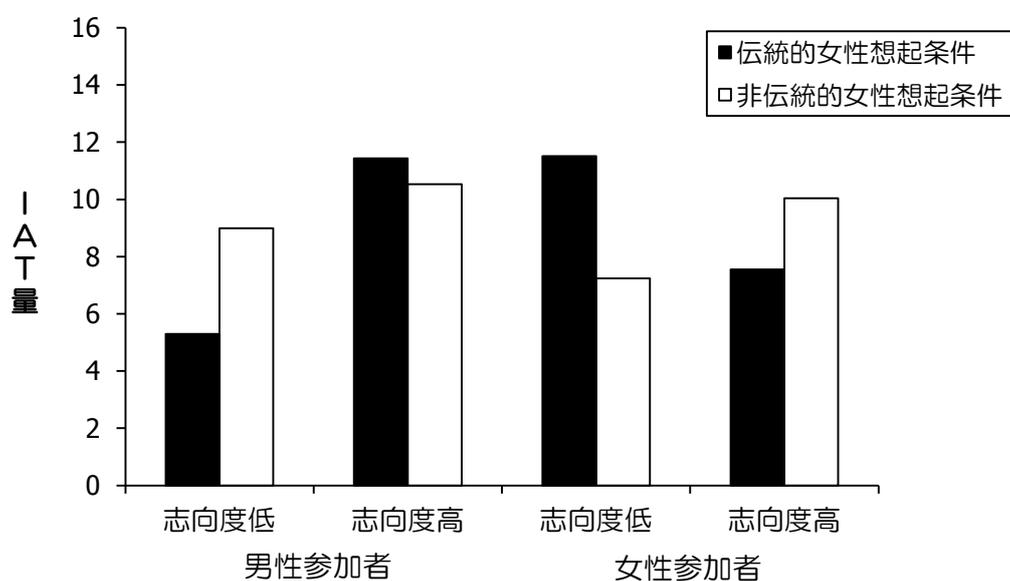


図 8-2. IAT 量に対する想起内容×参加者性×キャリア志向度の効果（研究 2-2）

注) キャリア志向度は、平均-1SD 地点を「志向度低」、平均+1SD 地点を「志向度高」とした。IAT 量は、想起内容の条件と参加者の性別ごとのキャリア志向度±1SD 地点における推定値であり、値が正に大きいほど伝統的な潜在的性役割観が強いことを表す。

想起内容×参加者性×キャリア志向度得点の交互作用効果が有意であったため、下位検定として、参加者の性別ごとに単純交互作用効果と単純主効果の検定を行った。その結果、男性参加者では、キャリア志向度得点の単純主効果が有意であった ($F(1,58) = 4.51, p < .05$)。この効果は、キャリア志向度得点が高いほど IAT 量が高いことを示すものであった (図 8-2 参照)。一方、女性参加者においては、想起内容×キャリア志向度得点の単純交互作用効果が有意傾向であった ($F(1,58) = 3.45, p = .07$)。そこで、キャリア志向度得点の平均±1SD 地点における、想起内容の単純・単純主効果の検定を行ったところ、キャリア志向度得点-1SD 地点における想起内容の単純・単純主効果が有意傾向であった ($F(1,58) = 3.19, p = .08$)。この効果は、IAT 量が、伝統的女性想起条件 (推定値 = 11.52) よりも非伝統的女性想起条件 (推定値 = 7.24) において低くなっていることを示すものであった (図 8-2 参照)。一方で、キャリア志向度得点+1SD 地点における想起内容の単純・単純主効果は有意でなく ($F(1,58) = 1.08, ns$)、伝統的女性想起条件 (推定値 = 7.55) と非伝統的女性想起条件 (推定値 = 10.03) の間に有意な差は見られなかった。

想起課題で挙げられた人物の数は、想起内容の条件や参加者の性別によって異なっていた。そこで、想起人物数の影響を統制しても同様の効果が見られるかを確認した。分析手順としては、以上の一般線形モデルによる分析に、想起人物数も独立変数として加えた分析を行った (ただし、他変数との交互作用項は投入しなかった)。その結果、想起内容×参加者性×キャリア志向度得点の交互作用効果は有意傾向となり ($F(1,57) = 3.32, p = .07$)、効果は若干弱くなったものの、想起人物数の影響を統制した場合でも、統制しなかった場合と同様の効果が見られていた。

本研究の仮説は、「伝統的女性事例が想起された場合よりも非伝統的女性事例が想起された場合に潜在的性役割観が低減するのは、女性参加者だけであろう」というものであった。分析結果をまとめれば、次のようになる。IAT 量が伝統的女性想起条件よりも非伝統的女性想起条件のほうで低くなるという効果は、キャリア志向度得点の低い女性参加者においてのみ見られ、キャリア志向度得点の高い女性参加者や、男性参加者においては見られなかった。よって、仮説は部分的に支持されたとと言える。

顕在的性役割観に関する結果

次に、顕在的性役割観に関して分析を行った。SESRA 得点は、研究 2-1 と同様にして求めた ($\alpha = .73$, 得点範囲は 1~5 で、値が大きいほど平等主義的な性役割観であること

を表す)。IAT 量と SESRA 得点間の相関を分析したところ、有意な相関関係は見られなかった ($r(66) = -.06, ns$)。

事例想起の内容や、参加者の性別、キャリア志向度によって顕在的性役割観が異なるかどうかを検討するため、SESRA 得点を従属変数として、IAT 量に対して実施した分析と同様に、想起内容・参加者性・キャリア志向度と、これらの変数の交互作用項を独立変数として投入した、一般線形モデルによる分析を行った。有意となった効果が多かったため、以下では、まず想起内容に関わらない効果の結果を述べ、その後で、本研究の中心的な要因である想起内容に関わる効果の結果を述べる。

想起内容に関わらない効果としては、キャリア志向度の主効果が有意であった ($F(1,58) = 17.02, p < .001$)。この効果は、キャリア志向度が高い参加者ほど、SESRA 得点が高いこと、すなわち平等主義的な顕在的性役割観が持たれていることを示すものであった。さらに、参加者性×キャリア志向度の交互作用効果も有意であった ($F(1,58) = 7.25, p < .01$)。この交互作用効果は、女性参加者ではキャリア志向度得点が高いほど SESRA 得点が高いが ($r = .63, p < .001$)、男性参加者ではこのような関係が見られない ($r = .08, ns$) ことによるものであった。つまり、女性はキャリア志向度が高いほど、顕在的性役割観が平等主義的であることを示すものであった。

想起内容にかかわる効果としては、想起内容の主効果が有意であったことに加え ($F(1,58) = 8.35, p < .01$)、想起内容×キャリア志向度の交互作用効果が有意傾向であった ($F(1,58) = 3.61, p = .06$)。そこで、最初の分析から参加者性を独立変数から除去し、一般線形モデルによる分析を再度実施したところ、想起内容の主効果 ($F(1,62) = 8.05, p < .01$) とキャリア志向度の主効果 ($F(1,62) = 16.18, p < .001$) が有意であったことに加え、想起内容×キャリア志向度の交互作用効果も有意であった ($F(1,62) = 5.87, p < .05$)。この交互作用効果を解釈するため、想起内容の各条件で、キャリア志向度得点の平均±1SD 地点における SESRA 得点の推定値をプロットしたのが図 8-3 である。

下位検定を実施したところ、キャリア志向度得点−1SD 地点における想起内容の単純主効果が有意となり ($F(1,62) = 13.73, p < .001$)、SESRA 得点は、伝統的女性想起条件 (推定値 = 2.93) よりも非伝統的女性想起条件 (推定値 = 3.62) のほうが有意に高かった。一方で、キャリア志向度得点+1SD 地点における想起内容の単純主効果は有意でなく ($F(1,62) = .06, ns$)、伝統的女性想起条件 (推定値 = 3.79) と非伝統的女性想起条件 (推定値 = 3.83) の間に有意な差は見られなかった。

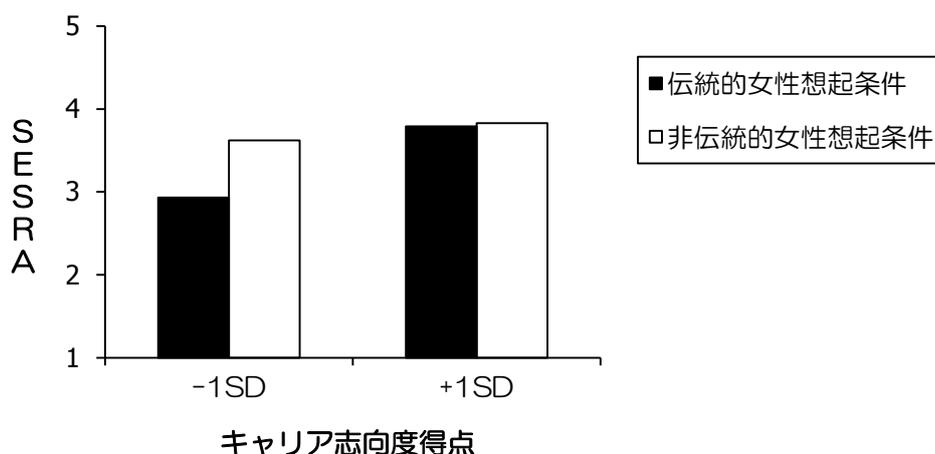


図 8-3. SESRA 得点に対する想起内容×キャリア志向度の効果（研究 2-2）

注) 伝統的・非伝統的女性想起条件における SESRA 得点は、キャリア志向度得点の平均±1SD 地点における推定値である。値は大きいほど平等主義的な顕在的性役割観であることを表す。

8-4. 考察

実験結果のまとめ

非伝統的女性の事例が想起された後では、伝統的女性の事例が想起された場合に比べ、潜在的性役割観が低減することが研究 2-1 で示されていた。しかし、研究 2-1 では女性を対象として実験を実施していた。そこで、本研究では、男女双方を対象に実験を実施し、同様の影響が男性でも生じるかを検討した。また、性役割観に関連する概念としてキャリア志向度も測定し、潜在的・顕在的性役割観に及ぼす影響について検討した。

実験の結果、キャリア志向度の低い女性が非伝統的女性を想起した場合、伝統的女性を想起した場合に比べ、潜在的性役割観が弱くなり、平等主義的になることが示された。潜在的性役割観に対するこのような影響は、男性や、キャリア志向度の高い女性では見られなかった。こうした結果は、仮説を部分的に支持するものであった。一方で、顕在的性役割観は、参加者の性別にかかわらずキャリア志向の低い参加者において、伝統的女性が想起された場合よりも非伝統的女性が想起された場合に平等主義的になっていた。

潜在的性役割観に対する事例想起の影響

潜在的性役割観に対する伝統的・非伝統的女性の想起の影響が男性では見られなかったため、こうした影響は女性において生じやすいことが示唆される。伝統的女性や非伝統的女性の具体的な人物などに関する知識は、社会生活の中で各タイプの女性に直接的、あるいは間接的に接触することで獲得されるだろう。しかし、その頻度は、同性である女性のほうが異性である男性よりも高いと思われる。また、本研究の実験に参加したのは男女大学生であったが、女子大学生は伝統的・非伝統的女性の双方を可能自己の表象として持ちうる（高林・沼崎, 2010）。こうしたことから、伝統的・非伝統的女性に関する知識は、男性よりも女性においてより組織化されて記憶内に保持されていると考えられる。そのため、非伝統的女性が想起されたときに、性役割に反する側面（i.e., 「女性一仕事」連合）が活性化する程度は、男性よりも女性のほうが高いだろう。そして、性役割に反する側面の活性化水準が高まると、男性と仕事、女性と家庭を結びつける潜在的性役割観が低減するのだろう。

ただし、伝統的・非伝統的女性の事例想起が潜在的性役割観に及ぼしていた影響は、女性の中でもキャリア志向の低い女性に限られていた。なぜ、このような結果が得られたのであろうか。考えられる理由の1つとして、非伝統的女性の表象に対する慢性的アクセシビリティ（chronic accessibility: Higgins, King, & Marvin, 1982）の影響が挙げられる。慢性的アクセシビリティとは、ある知識や概念が頻繁に用いられることによって、その知識・概念のアクセシビリティが常に高い状態にあることを指す。キャリア志向の高い女性は、キャリア志向の低い女性に比べ、非伝統的女性（e.g., キャリア女性）に対するアクセシビリティが慢性的に高いことが示唆される。言い換えれば、非伝統的女性に対するアクセシビリティは、キャリア志向の低い女性では通常時では高くはないともいえるだろう。しかし、キャリア志向の低い女性でも、非伝統的女性事例を想起した場合には、一時的に非伝統的女性に関する知識のアクセシビリティ（活性化水準）が高まると考えられる。その結果、非伝統的女性が想起されたときに、伝統的女性が想起された場合に比べて、潜在的性役割観が低減したのだろう。一方で、キャリア志向の高い女性は非伝統的女性に対するアクセシビリティが慢性的に高いため、このアクセシビリティが事例想起によってさらに高まるといったことが生じにくく（i.e., 天井効果）、潜在的性役割観が事例想起の影響を受けにくかったのだろう。

顕在的性役割観に対する事例想起の影響

本研究では、参加者の性別によらず、キャリア志向の低い参加者において、伝統的女性想起条件よりも非伝統的女性想起条件で SESRA 得点が高いことが示された。この結果は、キャリア志向が低い場合には、女性事例の想起が顕在的性役割観に影響を及ぼすことを示している。そして、その変容パターンは潜在的性役割観と同様で、非伝統的女性事例を想起すると、伝統的女性事例を想起した場合に比べ、性役割観が平等主義的になることを示すものであった。本研究の実験手続きは研究 2-1 とほぼ同じであったが、研究 2-1 では女性事例の想起が顕在的性役割観に影響を及ぼすことは示されていなかった。これらは一見すると矛盾する結果であるが、研究 2-1 ではキャリア志向度を測定していなかったことから、本研究で示された効果を検出することができなかったのだろう。

では、顕在的性役割観が以上のような影響を受けていたのはなぜだろうか。変容パターンは潜在的性役割観と同じであったが、IAT 量と SESRA 得点との間に相関関係が見られなかったことを考慮すると、潜在的性役割観と顕在的性役割観とでは、影響のプロセスは異なることが推察される。考えられる理由として、男女平等に関する規範が媒介していた可能性を指摘できるだろう。非伝統的女性の想起は、特にキャリア志向の低い参加者において、「男女平等であるべき」、「女性も仕事をすべき」といった規範を顕現化させ、平等主義的な性役割観が表明されるようになったのかもしれない。また、本研究では、顕在的性役割観を SESRA によって測定した。ステレオタイプは、記述的ステレオタイプと規範的ステレオタイプに区別されることがある (Burgess & Borgida, 1999)。SESRA には「家事は男女の共同作業となるべきである」、「結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである」といった項目が含まれているため、SESRA で測定される性役割観は、規範的ステレオタイプにより該当すると思われる。こうしたことも、以上で述べた男女平等規範の顕現化による説明を補足するだろう。

本研究では、参加者の性別やキャリア志向度の高低によって制限されるものの、伝統的・非伝統的女性の事例想起によって、潜在的性役割観と顕在的性役割観の双方が影響を受けることが示された。しかし、その影響プロセスは異なると言えるだろう。

第9章 研究3-1: 反ステレオタイプ事例の解釈が潜在的ステレオタイプに及ぼす影響 (1)

9-1. 問題と目的

目的

私たちは様々な社会的カテゴリーに関してステレオタイプを持っているが、それに反する人物 (i.e., ステレオタイプの反証事例) もいることを知っているし、日常の中でそうした人物に出会うこともある。研究2では、ステレオタイプの反証事例を知っているという視点から、そうした事例を記憶内から意識的に想起することが、潜在的ステレオタイプに及ぼす影響を検討した。また、研究1では、偏見に対する反証事例の呈示が潜在的偏見に及ぼす影響を検討したが、これは、反証事例に出会う場面を実験的に設定しているともいえるだろう。しかし、日常で他者に出会う場面を考えたとき、私たちはただ目の前の他者に曝されているだけではなく、どのような人物であるかを積極的に解釈しようとすることもある。例えば、一般に「女性は (男性に比べて) 弱い」といったステレオタイプが抱かれていると思われるが、こうしたステレオタイプに対して、他者に頼らず、自分の意見をはっきりと主張するような女性は反証事例となる。このような女性に出会ったとき、私たちはその人物を“女性らしくない”と解釈したり、“強い女性だなあ”と解釈したりするだろう。ここで、前者は、対象人物を既存のステレオタイプに照らし合わせ、“女性らしくない”、“[女性は弱い] にあてはまらない女性”と解釈している方略と言えるだろう。一方、後者は、対象人物に、反ステレオタイプの属性である“強い”をあてはめて解釈している方略と言えるだろう。

人物を解釈するために用いられる認知的枠組みや方略はこれだけに限られるものではないが、以上の2つの解釈方略は、反証事例を既存のステレオタイプと関連づけて解釈するのか、関連づけずに解釈するのかという点で異なっていると考えられる。研究1や、反証事例の呈示が潜在的ステレオタイプや偏見に及ぼす影響を検討した先行研究 (Dasgupta & Asgari, 2004; Dasgupta & Greenwald, 2001; Dasgupta & Rivera, 2008) では、反証事例を実験参加者に向けて呈示するかどうかを問題としており、呈示された事例 (人物) がどのように解釈されるかは問題とされてこなかった。そこで、研究3では、反ステレオタ

イプ事例を既存のステレオタイプに関連づけて“そうではない”と解釈する方略を「関連づけあり方略」、既存のステレオタイプとは関連づけず、反ステレオタイプの属性を当人に直接的にあてはめて解釈する方略を「関連づけなし方略」と呼ぶことにする。そして、反ステレオタイプ事例に対するこれら2つの解釈方略が、潜在的ステレオタイプに及ぼす影響を検討する。

では、それぞれの方略によって反ステレオタイプ事例が解釈されたとき、潜在的ステレオタイプにはどのような影響を及ぼすだろうか。関連づけあり方略は、反ステレオタイプ事例を既存のステレオタイプと関連づけるため、ステレオタイプへの意識的なアクセスが必然的に伴う。例えば、“女性らしくない”、“女性は弱い”というイメージにあてはまらない女性”と解釈するためには、「女性は弱い」というステレオタイプを参照する必要がある。このとき、事例は反ステレオタイプの属性と結びつけて知覚されるため、事例からはステレオタイプに反する側面（e.g., 「女性－強い」）が活性化するだろう。しかし、その一方で、ステレオタイプへの意識的なアクセスによって、ステレオタイプに一致する側面（e.g., 「女性－弱い」）も活性化することになる。したがって、関連づけあり方略では、ステレオタイプに反する側面と一致する側面の両方が活性化することになる。すなわち、潜在的ステレオタイプを強める作用と弱める作用の両方が混在することになるため、潜在的ステレオタイプの強さは（通常時と比べて）変わらないと予測される。

一方、関連づけなし方略は、既存のステレオタイプとは関連づけず、反ステレオタイプの属性と事例を結びつけて解釈する方略であるため、意識的にステレオタイプにアクセスする必要はない。例えば、「女性は弱い」に対する反ステレオタイプ事例を“強い女性”と解釈したとき、「女性」カテゴリーには関連づけられているものの、「女性は弱い」というステレオタイプが意識される可能性は、関連づけあり方略に比べれば相対的に低いだろう。このとき、ステレオタイプに反する側面のほうが、一致する側面よりも強く活性化すると考えられる。よって、関連づけなし方略では、潜在的ステレオタイプが（通常時と比べて）弱くなるだろう。

仮説と実験概要

以上の議論から、反ステレオタイプ事例が、既存のステレオタイプに関連づけられて解釈された場合には潜在的ステレオタイプは弱まらないが、関連づけられずに解釈された場合には潜在的ステレオタイプは弱まると考えられる。このことを検討するため、研究 3-1

では、「男性は強く、女性は弱い」というステレオタイプを用いて、次のような実験を実施することにした。

まず、男性・女性の顔写真と、強いもしくは弱いことを表す特性語の組み合わせを多数呈示し、参加者には、その中から特定の組み合わせを見つけ出す課題に取り組んでもらう。このうち「男性－弱い」と「女性－強い」の組み合わせが反ステレオタイプ事例となる。参加者には反ステレオタイプ事例を見つけ出してもらいが、このときに関連づけあり方略を用いるのか、関連づけなし方略を用いるのかを教示によって操作した（以下、前者を関連づけあり条件、後者を関連づけなし条件とする）。また、以上のような組み合わせを呈示しない統制条件も設けた。こうした課題の後、紙筆版 IAT によって潜在的ステレオタイプの強さを測定することにした。

研究 3-1 では、以上のような実験を実施し、反ステレオタイプ事例の解釈方略が潜在的ステレオタイプに及ぼす影響を検討する。仮説は次の通りである。関連づけなし条件では、関連づけあり条件や統制条件と比べて、潜在的ステレオタイプが弱くなるだろう。

9-2. 方法

実験参加者

埼玉県内にある4年制大学で「社会心理学」を受講している大学生69名（男性34名、女性35名）が実験に参加した。平均年齢は19.8歳（ $SD = 1.02$ ）であった。参加者は、受講している講義の出席追加点と引き換えに実験に参加した。

実験計画

関連づけ（あり条件 vs. なし条件 vs. 統制条件）の1要因3水準実験参加者間計画であった。参加者は、3つの条件のいずれかに、ランダムに割り当てられた。

潜在的ステレオタイプの測定

本研究では、「男は強く、女は弱い」という性別に関するステレオタイプを題材としている。そこで、「男性」と「強い」、「女性」と「弱い」の連合強度を潜在的ステレオタイプの指標とし、これを紙筆版 IAT によって測定した。分類カテゴリーには、「男性－女性」、「強い－弱い」を用いた。「男性」と「女性」に分類される刺激には、男性・女性それぞれに典

型的な名前を5つずつ用いた（「男性」名：たろう、こうじ、よしお、なおき、りょうた／「女性」名：あやこ、ゆきえ、えり、かすみ、はるな）。「強い」と「弱い」に分類される刺激には、それぞれに関連する単語を5つずつ用いた（「強い」関連語：力強い、頑丈な、がっしりした、たくましい、パワフル／「弱い」関連語：ひ弱、もろい、弱々しい、臆病な、気の小さい）。

IATは6ブロックから構成されていた。第1ブロックは名前を「男性－女性」で分類するブロック、第2ブロックは単語を「強い－弱い」で分類するブロックであった。第3・第4ブロックは、第1・第2ブロックの分類基準が組み合わされ、「男性・強い－女性・弱い」で分類するブロック（以下、ステレオタイプ一致ブロック）であり、第3ブロックが練習試行、第4ブロックが本試行として実施された。第5・第6ブロックでは、「強い」と「弱い」の位置を左右逆転させて、「男性・弱い－女性・強い」で分類するブロック（以下、ステレオタイプ不一致ブロック）であり、第5ブロックが練習試行、第6ブロックが本試行として実施された。ステレオタイプ一致・不一致ブロックの実施順序のカウンターバランスを取るため、半数の参加者では以上の通り、ステレオタイプ一致ブロックを先に、残り半数の参加者では逆に、ステレオタイプ不一致ブロックを先に実施した。なお、不一致ブロックを先に実施した場合の第2ブロックは、「弱い」を左側に、「強い」を右側とした。

ステレオタイプ一致・不一致ブロックの練習試行では、20の刺激に対し制限時間15秒で分類してもらった。一致・不一致ブロックの本試行を含むその他のブロックでは、40の刺激に対し制限時間25秒で分類してもらった。

手続き

実験は講義後半の時間を使って、教場にて一斉に実施した。最初に実験の目的などについて、「実験は瞬間的な判断に関する研究の一環として実施しているもので、瞬間的な判断について調べるために3つの課題に取り組んでほしい」と説明した。また、各課題には制限時間が設定されており、実験者の開始と終了の合図にしたがって課題に取り組むこと、途中で実験参加を取りやめるのも可能であることを伝えた。なお、実際に途中棄権した参加者はいなかった。

まず、「名前と言葉の分類課題」として、紙筆版 IAT の第1ブロック（名前を「男性－女性」で分類するブロック）と第2ブロック（単語を「強い－弱い」または「弱い－強い」で分類するブロック）に取り組んでもらった。これら2つのブロックだけ先に実施したの

は、実験の中で「強い」と「弱い」がどのような意味で用いられているのかを参加者に理解してもらうことを企図したためであった。

次に、「ターゲット検索課題」に取り組んでもらった。この課題は、写真と言葉が組み合わせられたペアの一覧の中から、指定されたターゲットを探すというものであった。ここで、条件を操作した。関連づけあり条件となし条件では、男性または女性の顔写真と、強いまたは弱いことを表す特性語が組み合わせられ、1 ページに 40 の「写真－単語」ペアが一覧表示されていた（図 9-1 参照）。ペアは 4 種類（写真の性別（男女）×単語の意味（強弱）で 2×2）あった。関連づけあり条件では、「“男性は力強い” というイメージにあてはまらないペア」と「“女性は弱々しい” というイメージにあてはまらないペア」がターゲットとして指定された。関連づけなし条件では、「弱々しい男性」と「力強い女性」がターゲットとして指定された。そして、ペアの一覧の中からターゲットに該当するものを探してもらった。つまり、関連づけあり条件となし条件では、両条件とも反ステレオタイプの組み合わせである「男性－弱い」ペアと「女性－強い」ペアを探すという点では同じであったが、関連づけあり・なし方略のどちらを用いて探すのかが異なっていた。一方、統制条件では、性別とは無関連な課題とするために、男性と女性の顔写真の代わりに犬と猫の写真を用い、強いまたは弱いことを表す特性語と組み合わせ、「写真－単語」ペアを構成した。そして、特性語には、元気があり、力強いことを表すものと、元気がなく、弱々しいことを表すものがあると教示したうえで、「元気がない犬」と「元気のある猫」をターゲットとした。



図 9-1. ターゲット探索課題における「写真－単語」ペアの例（研究 3-1）

注) 顔写真は、図中では模式的なものになっているが、実験時には各人物の顔がはっきりと映っており、性別の判断が可能な写真を用いた。

各条件とも、40の「写真-単語」ペアのうち、ターゲットに該当するものが20ペアになるようにペアの内容が構成されていた。そして、制限時間40秒内にできるだけ多く探し、ターゲットに該当するペアを丸で囲むよう教示した。参加者には、この作業に3回繰り返し取り組んでもらった。

男性や女性、犬、猫の写真は、それぞれ10枚ずつ用いた。また、強いことを表す単語には、紙筆版 IAT で用いたのと同じ5つの単語と、別の単語5つを用いた（活気のある、タフ、強い、生き生きした、はきはきした）。弱いことを表す単語も、紙筆版 IAT で用いたのと同じ単語5つと、別の単語5つを用いた（きゃしゃ、傷つきやすい、弱い、デリケート、ほっそりした）。

「ターゲット探索課題」終了後、もう一度「名前と言葉の分類課題」を実施すると説明し、紙筆版 IAT の残りの部分（ステレオタイプ一致ブロックと不一致ブロック）に取り組んでもらった。その後、実験に関するアンケートとして、質問紙に回答してもらった。関連づけあり条件となし条件の質問紙には、操作チェックのためにターゲット探索課題での取り組み方に関する質問項目を含めた。質問は、「“男は強い”、“女は弱い”というイメージにあてはまるかどうかに注意した」の1項目で、7件法（1. そうはしていなかった-7. そうしていた）で回答してもらった。また、実験の目的に対する疑念を自由記述で回答してもらった。全員が質問紙に回答し終わった後、ディブリーフィングを行い、実験は終了した。

9-3. 結果

分析対象と操作チェック

紙筆版 IAT での刺激の分類において、左側に分類されるものだけを回答していた者が2名いた。また、ターゲット探索課題は3回繰り返し実施したが、3回合計でターゲットではない写真-単語ペアを誤って探し出していた個数（以下、合計誤数）を参加者ごとに算出したところ、1名の参加者は合計誤数が20個あり、他の参加者に比べて多かった（合計誤数の平均は.96 ($SD = 2.76$) であった）。そこで、以上の3名を分析対象から除外し、66名を分析対象として以降の分析を行った。なお、紙筆版 IAT における正答率の平均は、ステレオタイプ一致ブロックの本試行で99.4% ($SD = 1.63$)、不一致ブロックの本試行で98.6% ($SD = 3.55$) であり、正答率が著しく低かった参加者はいなかった。また、実験の

目的や仮説を的確に指摘した参加者もいなかった。

次に、操作チェックとして、ターゲット探索課題で教示通りにターゲットを探していたかどうかを検討した。操作チェックのための質問項目は「“男は強い”、“女は弱い”というイメージにあてはまるかどうかに注意した」であったが、教示通りにターゲットを探していたとすれば、この項目の評定値は、関連づけなし条件よりも関連づけあり条件のほうが高くなると考えられる。そこで、関連づけなし条件とあり条件における操作チェック項目の評定平均を、対応のない t 検定によって比較した。その結果、関連づけなし条件 ($M = 3.86$, $SD = 2.19$) よりも関連づけあり条件 ($M = 5.09$, $SD = 1.34$) の平均値のほうが有意に高かった ($t(42) = 2.24$, $p < .05$)。よって、操作は成功していたと思われる。

続けて、ターゲット探索課題で何個のターゲットを探し出せていたかをチェックした。3 回合計の探索数 (以下、合計探索数) の平均を条件別に算出したところ、関連づけあり条件では 46.5 個 ($SD = 12.89$)、関連づけなし条件では 51.4 個 ($SD = 8.34$)、統制条件では 51.3 個 ($SD = 7.07$) であった。条件間で合計探索数の平均値に差があるかどうかを検討するため、合計探索数を従属変数、関連づけ (あり条件 vs. なし条件 vs. 統制条件) を独立変数とした分散分析を実施した。その結果、関連づけの主効果は有意ではなかった ($F(2,63) = 1.76$, ns)。関連づけあり条件では、反ステレオタイプ事例をステレオタイプに関連づけて探すという条件であったため、他の条件に比べて合計探索数は少なくなるとも考えられるが、そうした結果は得られなかった。

紙筆版 IAT の結果

紙筆版 IAT は、ステレオタイプ一致・不一致ブロックの本試行を分析対象とした。紙筆版 IAT を用いたこれまでの実験と同様に、これら 2 ブロックの正答数と誤答数、そして正答数から誤答数を減算したブロック得点の平均値を条件別に求めたところ、表 9-1 のようになった。

本研究では、「男は強い、女は弱い」というステレオタイプを題材としているが、こうしたステレオタイプが潜在的に持たれているとすれば、ステレオタイプ不一致ブロックの得点よりも一致ブロックの得点のほうが高くなると考えられる。そこで、統制条件のデータを用いて、ステレオタイプ一致・不一致ブロック間の得点を比較した。その結果、不一致ブロックの得点 ($M = 33.09$, $SD = 3.32$) よりも一致ブロックの得点 ($M = 37.55$, $SD = 3.32$) のほうが有意に高かった ($t(21) = 3.85$, $p < .05$)。この結果は、想定していたように、「男

表 9-1. ステレオタイプ一致・不一致ブロックにおける課題成績の条件別平均値（研究 3-1）

	ステレオタイプ一致ブロック			ステレオタイプ不一致ブロック		
	正答数	誤答数	ブロック 得点	正答数	誤答数	ブロック 得点
関連づけあり 条件	36.22 (5.71)	.14 (.47)	36.09 (5.77)	30.23 (9.02)	.27 (.77)	29.95 (9.40)
関連づけなし 条件	36.14 (5.11)	.19 (.39)	35.95 (5.28)	32.59 (5.07)	.36 (.95)	32.23 (5.18)
統制条件	37.91 (3.08)	.36 (.85)	37.55 (3.32)	33.73 (3.83)	.64 (1.29)	33.09 (4.03)

注) ブロック得点は、正答数から誤答数を減じた値である。() 内の数値は標準偏差を表す。

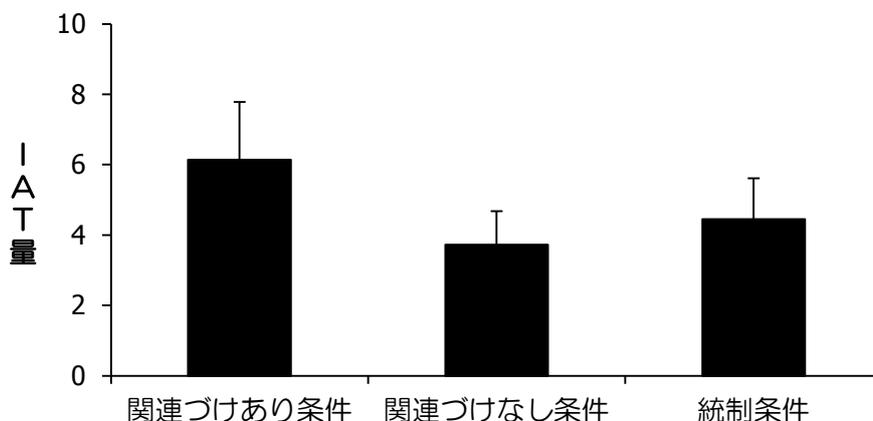


図 9-2. IAT 量の条件別平均値（研究 3-1）

注) エラーバーは標準誤差を表す。

性」と「強い」、「女性」と「弱い」を結びつける潜在的ステレオタイプが持たれていたことを示すものであった。

本研究の仮説は、「関連づけなし条件では、関連づけあり条件や統制条件と比べて、潜在的ステレオタイプが弱くなるだろう」であった。この仮説を検討するため、まず、参加者ごとにステレオタイプ一致ブロックの得点から不一致ブロックの得点を減算し、これを

IAT量とした。IAT量は、値が正に大きいほど、「男性」と「強い」、「女性」と「弱い」を結びつける潜在的ステレオタイプが強いことを表す。条件別にIAT量の平均値を求めたところ、関連づけあり条件では6.14 ($SD=7.73$)、関連づけなし条件では3.73 ($SD=4.45$)、統制条件では4.45 ($SD=5.43$)となり、最もIAT量の平均値が低かったのは関連づけなし条件であった(図9-2参照)。次に、仮説を検証するための分析として、IAT量に対して、関連づけ(あり条件 vs. なし条件 vs. 統制条件)×参加者性(男 vs. 女)×ブロック順序(一致ブロック先 vs. 不一致ブロック先)の $3\times 2\times 2$ の分散分析を行った(すべて実験参加者間要因)。その結果、ブロック順序の主効果が有意であったが($F(1,54)=5.74, p<.05$)、その他の効果はすべて有意ではなかった($Fs<2.04, ps>.13$)。ブロック順序の主効果は、不一致ブロックを先に実施した場合($M=2.48, SD=4.43$)よりも、一致ブロックを先に実施した場合($M=7.06, SD=6.58$)のほうが、IAT量は有意に大きいことを示すものであった。よって、仮説は支持されなかった。

9-4. 考察

実験結果のまとめ

本研究(研究3-1)では、反ステレオタイプ事例がステレオタイプと関連づけて解釈された場合と、関連づけずに解釈された場合とで、潜在的ステレオタイプの強さが異なるかを検討した。解釈方略はターゲット探索課題において操作し、関連づけあり条件では“「男は強い、女は弱い」というステレオタイプにはあてはまらない人物”を、関連づけなし条件では“「弱い男性、強い女性」にあてはまる人物”を探してもらった。しかし、どちらの解釈方略が用いられた場合でも、潜在的ステレオタイプの強さが影響を受けることはなく、仮説は支持されなかった。

研究3-1の問題点

本研究では、仮説は支持されなかったものの、IAT量は関連づけなし条件で最も低くなっており、条件間の平均値の大小関係は仮説と合致していた。実験は教場で一斉に実施したが、そのために実施可能な実験手続きが制約され、反ステレオタイプ事例を解釈する方略を操作するためのターゲット探索課題の手続きや、潜在的ステレオタイプを測定するための紙筆版IATの手続きにおいて、いくつか問題があったように思われる。

反ステレオタイプ事例をステレオタイプと関連づけて解釈するのか、関連づけずに解釈するのかを操作するため、本研究では写真と単語のペアを一覧表示し、その中から関連づけあり方略、あるいは関連づけなし方略を用いてターゲット（反ステレオタイプ事例）を探してもらった。このような手続きでは、目を通すペアの数や検出するターゲットの数は参加者によって異なってしまう。そのため、関連づけあり条件となし条件の間で、解釈方略だけでなく、写真-単語ペアの処理数やターゲットの検出数も変わってしまう可能性がある。ターゲット探索課題における合計探索数の平均値においては、条件間で有意な差は見られなかったものの、合計探索数の標準偏差は条件間で異なっていた（標準偏差は、関連づけあり条件 = 12.89、関連づけなし条件 = 8.34、統制条件 = 7.07 であり、等分散性の検定の結果、条件間の標準偏差（分散）には有意傾向の差が見られた（ $F(2, 63) = 2.78, p = .07$ ）。反ステレオタイプ事例に対する解釈方略の影響を検討するためには、写真-単語ペアの処理数やターゲット検出数を統制できるような手続きにする必要があるだろう。

また、潜在的ステレオタイプの強さを測定するための紙筆版 IAT の手続きにも問題があった。本研究では、紙筆版 IAT の 2 つのカテゴリーを組み合わせで分類するブロック（ステレオタイプ一致・不一致ブロック）で、40 の刺激を制限時間 25 秒で分類してもらっていた。この制限時間は、研究 1-2 や研究 2-1、研究 2-2 での実験よりも 5 秒長かった。そのため、一致・不一致両ブロックにおいて、すべての刺激を分類できていた参加者が 9 名いた。両ブロックですべて分類できてしまった場合、ブロック間のパフォーマンスの差が潜在的ステレオタイプの強さを表す指標として妥当なものでなくなってしまう。刺激数を増やしたり、制限時間を短くしたりする必要があっただろう。

紙筆版 IAT には以上のような問題があったものの、両ブロックですべての刺激を分類できていた参加者以外では、潜在的ステレオタイプの強さを測定できていたと思われる。そこで、すべての刺激を分類できていた 9 名のデータを除いて、IAT 量を従属変数として仮説を検討するために実施した分析を再度行ってみた。その結果、関連づけの主効果が有意となった（ $F(2, 45) = 3.20, p = .05$ ）。事後検定として、Bonferroni 法による多重比較を実施したところ、関連づけなし条件（ $M = 3.70, SD = 4.50$ ）における IAT 量は、関連づけあり条件（ $M = 7.94, SD = 7.95$ ）より低い傾向にあったが（ $p = .06$ ）、統制条件（ $M = 4.50, SD = 5.56$ ）よりも低くはなっていなかった（ $p = .17$ ）。この結果は、反ステレオタイプ事例をステレオタイプと関連づけて解釈した場合に比べて、関連づけずに解釈した場合には潜在的ステレオタイプが弱くなることを示しており、仮説を一部支持する結果であった。

以上のように、仮説を一部支持するような結果は得られたものの、分析除外となったデータも多く、結果の信頼性には問題がある。さらに、実験手続きにも問題点がいくつかあった。そこで、次の研究 3-2 では、こうした問題点を改善するよう、実験手続きなどを修正し、反ステレオタイプ事例に対する解釈方略が潜在的ステレオタイプに及ぼす影響を再度検討することにする。

第 10 章 研究 3-2: 反ステレオタイプ事例の解釈が潜在的ステレオタイプに及ぼす影響 (2)

10-1. 問題と目的

目的と実験概要

研究 3-2 (本章) では、研究 3-1 の実験手続きを修正し、反ステレオタイプ事例の解釈時におけるステレオタイプへの関連づけの有無が、潜在的ステレオタイプに及ぼす影響について検討することを目的とする。研究 3-1 の実験は教場にて一斉に実施したが、本研究では、参加者に実験室まで来てもらい、少人数の状況で実験を実施することにした。実験では、研究 3-1 と同様に、まずターゲット探索課題によって反ステレオタイプ事例を解釈する方略を操作し、その後に IAT で潜在的ステレオタイプの強さを測定する。ただし、それぞれの手続きには変更を加えた。題材とするステレオタイプは、研究 3-1 と同じく、「男は強い、女は弱い」という性別に関するステレオタイプを用いることにする。

手続きの変更点

研究 3-1 では、反ステレオタイプ事例に対する解釈方略を操作するために実施したターゲット探索課題において、写真-単語ペアの処理数が統制できていないという問題があった。この問題を解消するため、本研究では、コンピュータ画面上に写真-単語ペアを 1 つずつ呈示し、呈示されたペアがターゲットに該当するかどうかを判断させる。これを 1 試行として、所定数分試行を繰り返す手続きに変更した。こうした手続きにすることによって、すべての参加者に同じ数の写真-単語ペアを処理させ、条件間や個人間で処理数に違いが出ないようにした。また、課題に対する動機づけを維持するために、各試行で正誤フィードバックを呈示することにした。

研究 3-1 では、教場で一斉に実験を実施したため、潜在的ステレオタイプを測定する方法として紙筆版 IAT を用いた。紙筆版 IAT では、設定された制限時間内にすべての刺激を分類できてしまった場合には、潜在的ステレオタイプの強さを測定できなくなってしまうという問題があった。これに対し、コンピュータ版 IAT では、試行ごとに反応時間が測定されるため、以上のような問題は生じない。そこで本研究では、コンピュータ版 IAT によ

って、「男は強い、女は弱い」といったステレオタイプの潜在的な側面を測定することにした。

仮説

仮説は研究 3-1 と同じで、次の通りである。反ステレオタイプ事例が、既存のステレオタイプに関連づけられて解釈された場合には潜在的ステレオタイプは弱まらないだろう。一方で、関連づけられずに解釈された場合には潜在的ステレオタイプは弱まるだろう。

10-2. 方法

実験参加者

東京都内にある大学で「対人行動論」を受講している男子大学生 62 名が実験に参加した。平均年齢は 19.0 歳 ($SD = .96$) であった。参加者は、受講している講義の出席追加点と引き換えに実験に参加した。

実験計画

関連づけ（あり条件 vs. なし条件 vs. 統制条件）の 1 要因 3 水準実験参加者間計画であった。参加者は、3 つの条件のいずれかに、ランダムに割り当てられた。

手続き

実験は、1 セッションに 1~4 名の参加者に実験室まで来てもらい、実施した。参加者は 1 人 1 人に用意されたノートパソコンの前に座り、実験者から「実験は瞬間的な判断に関するものであり、パソコン上で実施するいくつかの課題に取り組んでもらいたい」と伝えられた。そして、実験参加への最終的な承諾を得た後、パソコン画面上に表示される説明にしたがって、参加者個人のペースで実験を進めてもらった。なお、実験室にはパーティションを設置し、他の参加者が課題に従事する様子が見えないようにした。実験で取り組んでもらう課題はいずれも、画面上に呈示される刺激に対して判断し、キー押しによって回答する類のものであった。すべての課題は、Inquisit 2.0 (Millisecond 社製) によって制御された。また、課題の一部で音声流れるため、参加者にはヘッドフォンを装着してもらった。

(1) 練習課題

最初に、パソコンの操作に慣れることと、実験の中で「強い」と「弱い」がどのような意味で用いられているのかを参加者に理解してもらうために、練習課題に取り組んでもらった。練習課題は2ブロックから構成され、第1ブロックは犬と猫の写真を「犬-猫」で、第2ブロックは、強いあるいは弱いことを表す単語を「強い-弱い」で分類する課題であった。参加者には、画面中央に呈示された写真あるいは単語が、画面左上と右上に示された2つのカテゴリーのうちどちらに属すかを判断し、「d (左側)」あるいは「k (右側)」のキーを押下することによって回答してもらった。犬・猫の写真はそれぞれ5枚、強いあるいは弱いことを意味する単語はそれぞれ10語を用いた。用いた単語の一覧を表10-1に示した。試行数は、第1ブロックが10試行、第2ブロックが20試行であり、各刺激が1回ずつ出現するようになっていた。また、誤反応に対しては「×」印を示し、正しいキーを押すように誘導した。

表 10-1. 「強い」「弱い」を表す刺激として用いられた単語 (研究 3-2)

「強い」語	自己中心的、強情な、強気な、たくましい、頼もしい、 タフ、強い、どっしりした、力強い、威圧的
「弱い」語	弱々しい、弱気な、物静かな、デリケート、おとなしい、 小さい、頼りない、繊細な、弱い、自信のない

注) 斜体で示した単語は、IATでも用いられた単語であることを表す。

(2) ターゲット探索課題

次に、ターゲット探索課題に取り組んでもらった。この課題は、画面中央に男女いずれかの顔写真、その下に単語が呈示され、この写真-単語ペアが事前に指定されたターゲットであるかどうかを判断するものであった。課題は4ブロックから構成され、各ブロック50試行、全部で200試行あった。参加者は、画面上に呈示された写真-単語ペアがターゲットに該当するものであったら素早くスペースキーを押し、ターゲットでなかったら何もキーを押さず、次の写真-単語ペアが呈示されるまで待つように求められた。

この課題で呈示される写真-単語ペアと、指定されるターゲットによって条件を操作した。関連づけあり条件となし条件では、男性または女性の写真が、強いまたは弱いことを

表す単語と組み合わせられて呈示された（組み合わせの種類は 4 種類）。そして、関連づけあり条件の第 1、第 3 ブロックでは「“男性は強い”というイメージにあてはまらない男性」が、第 2、第 4 ブロックでは「“女性は弱い”というイメージにあてはまらない女性」がターゲットとして指定された。一方、関連づけなし条件の第 1、第 3 ブロックでは、「男性の写真と「弱い」ことを表す単語の組み合わせ、すなわち“弱い男性”」が、第 2、第 4 ブロックにおいて「女性の写真と「強い」ことを表す単語の組み合わせ、すなわち“強い女性”」がターゲットとして指定された。こうした操作は研究 3-1 と同様であったが、研究 3-1 では男女両方の反ステレオタイプ事例が同時に探索ターゲットになっていたのに対し、本研究ではブロックごとに男女いずれかの反ステレオタイプ事例が探索ターゲットとなっていたという点で異なっていた。

統制条件では、男性または女性の顔写真が、男性名（e.g., よしお、なおき）または女性名（e.g., ともこ、かすみ）と組み合わせられて呈示された。そして、第 1、第 3 ブロックでは「男性の写真と男性の名前の組み合わせ、すなわち両方とも男性」が、第 2、第 4 ブロックでは「女性の写真と女性の名前の組み合わせ、すなわち両方とも女性」がターゲットとして指定された。すなわち統制条件は、指定されたターゲットに反応すること、性別に関して判断をするという点で他の 2 条件と共通していたが、「男は強い、女は弱い」というステレオタイプに関連する判断をしないという点で異なっていた。

各条件で呈示される写真には、男女各 10 枚を用いた。関連づけあり・なし条件で呈示される強いあるいは弱いことを表す単語には、練習課題と同一の各 10 語を用い、統制条件で呈示される男女の名前には、各 10 個を用いた。また、ターゲットが出現する割合は、各ブロックで 40%であった（1 ブロックあたり 50 試行中 20 試行）。ターゲットは各ブロック開始前の教示画面において指定し、課題実行中の画面上部にも表示した。また、課題に取り組む動機づけを維持させるために、各試行の反応に対して、表示（○、×）と音（“ピンポン”、“ブー”）による正誤フィードバックを呈示した。ただし、ターゲットではないペアに対して正しく反応（スペースキーを押さない）した場合には、正答フィードバックを呈示しなかった。

（3）潜在的ステレオタイプの測定

ターゲット探索課題終了後、「男性」と「強い」、「女性」と「弱い」の連合強度をコンピュータ版 IAT によって測定した。各カテゴリーに分類される刺激には、練習課題やターゲ

ット探索課題で用いられた刺激の中から5つずつ選んだ。

IATは4ブロックから構成されていた。このうち2つのブロックは、「男性」と「強い」に該当する刺激を左側に、「女性」と「弱い」に該当する刺激を右側に分類する課題であった（以下、ステレオタイプ一致ブロック）。残り2つのブロックは、「男性」と「弱い」に該当する刺激を左側に、「女性」と「強い」に該当する刺激を右側に分類する課題であった（以下、ステレオタイプ不一致ブロック）。ステレオタイプ一致・不一致ブロックは、実施順序のカウンターバランスをとるため、半数の参加者では一致ブロックを先に、残り半数の参加者では不一致ブロックを先に実施した。

一致・不一致ブロックとも2回実施され、それぞれ1回目は20試行、2回目は40試行あった。参加者には、画面中央に呈示された刺激が、画面上部左右に示されている分類カテゴリーのどちらにあてはまるかを、「d（左側）」と「k（右側）」のいずれかのキーを押下することで回答してもらい、刺激が呈示されてからキーが押されるまでの反応時間をミリ秒単位で記録した。各ブロックの開始前には、そのブロックでの分類の仕方と、なるべく速く、かつ正確に判断してキーを押すことを教示した。誤ったキーが押された場合には、刺激の下に「×」印が表示され、正しいキーを押すよう促した。

IAT終了後、実験目的に対する疑念を自由記述で回答してもらった。回答が終わると、実験で実施する課題が終了したことを知らせる画面が表示された。そして、参加者全員がすべての課題を終了したことを確認した後、ディブリーフィングを行い、実験終了とした。

10-3. 結果

分析対象

留学生が1名、および実験目的を的確に指摘した者が3名いた。これら4名のデータは、分析対象から除外した。IATの4ブロック全体におけるエラー率の平均は5.47% ($SD = 3.52$)であった。エラー率の最大値は14.2%であり、他の参加者と比較してエラー率が著しく高かった参加者はいなかった。以上より、58名分のデータを用いて以降の分析を行った。

IATの結果（仮説検証）

IATの得点として、全4ブロックのデータを用い、参加者ごとにD得点を算出した。D

得点の算出手順は研究 1-1 と同様であった。本研究での D 得点は、値が正に大きいほど「男」と「強い」、「女」と「弱い」の連合が、その逆の連合よりも相対的に強いことを表す。また、値がゼロであれば、強い・弱いという属性が、いずれかの性別に強く連合していないことを表す。すなわち、D 得点は、値がゼロであれば「男は強い、女は弱い」という潜在的ステレオタイプがないことを、値が正に大きいほどそうしたステレオタイプが強いことを意味する。

本研究の仮説は、「反ステレオタイプ事例が、既存のステレオタイプに関連づけられて解釈された場合には潜在的ステレオタイプは弱まらないが、関連づけられずに解釈された場合には潜在的ステレオタイプは弱まるだろう」であった。この仮説を検証するため、D 得点を従属変数、関連づけ（あり条件 vs. なし条件 vs. 統制条件）とブロック順序（一致ブロック先 vs. 不一致ブロック先）を独立変数とする、 3×2 の分散分析を実施した。なお、ブロック順序は仮説とは直接関係ない要因であるが、これまでの研究でブロック順序の効果が見られていたため、独立変数として投入した。分析の結果、ブロック順序の主効果が有意となり ($F(1,52) = 4.91, p < .05$)、ステレオタイプ不一致ブロックを先に実施した場合 ($M = .411, SD = .353$) よりも、一致ブロックを先に実施した場合 ($M = .583, SD = .209$) のほうが D 得点は大きかった。また、仮説に関わる効果として、関連づけの主効果が有意であった ($F(2,52) = 6.48, p < .01$)。Bonferroni 法による多重比較を実施したところ、関連づけなし条件 ($M = .310, SD = .304$) では、関連づけあり条件 ($M = .590, SD = .227$) や統制条件 ($M = .583, SD = .293$) に比べて、D 得点が有意に低くなっていた ($ps < .01$; 図 10-1 参照)。一方で、関連づけあり条件と統制条件の間に有意な差は認められな

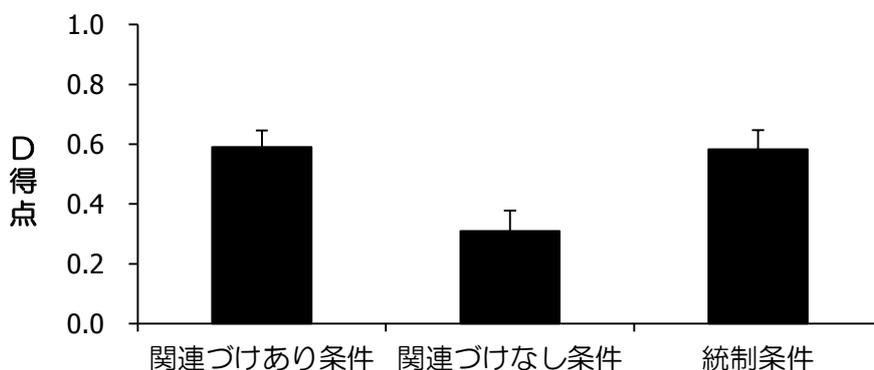


図 10-1. D 得点の条件別平均値 (研究 3-2)

注) D 得点は、値が正に大きいほど、「男性」と「強い」、「女性」と「弱い」が潜在的強く結びついていることを表す。エラーバーは標準誤差を表す。

かった。また、関連づけ×ブロック順序の交互作用効果は有意ではなかった ($F(2,52) = .81$, ns)。

以上の結果は、関連づけなし条件で潜在的ステレオタイプが弱まっていたことを示すものであり、仮説を支持するものであった。

10-4. 考察

実験結果のまとめ

本研究（研究 3-2）では、研究 3-1 に引き続き、反ステレオタイプ事例の解釈におけるステレオタイプ関連づけの有無が、潜在的ステレオタイプに及ぼす影響を検討した。実験では、男女の顔写真と強いあるいは弱いことを表す特性語と組み合わせた「写真－単語」ペアをコンピュータ画面上に表示し、それがターゲットに該当するかどうかを判断させた。研究 3-1 では、「写真－単語」ペアを紙面上で一覧表示していたため、ペアの処理数を統制できないという問題があった。そこで本研究では、ペアを1つずつ表示してターゲットに該当するかどうかを判断するのを所定数繰り返してもらうことで、「写真－単語」ペアの処理数を統制した。反ステレオタイプ事例をステレオタイプと関連づけて解釈するのか、関連づけずに解釈するのかは、研究 3-1 と同様にして操作した。そして、「男は強く、女は弱い」に対応する潜在的ステレオタイプの強さを測定した。その結果、反ステレオタイプ事例を既存のステレオタイプに関連づけて解釈した場合には潜在的ステレオタイプは弱まらないが、関連づけずに解釈した場合には潜在的ステレオタイプが弱まることが示された。これは仮説を支持する結果であった。

結果の解釈と本研究の問題点

ステレオタイプに一致するような人物や、それに反するような人物に出会った際、私たちはその人物がどのような人物であるのかを解釈しようとする場合がある。どのように解釈するのか、その方略は様々だと思われるが、本研究では、反ステレオタイプ事例を“女性は弱々しいけど、この女性はそうではない”などとステレオタイプと関連づけて解釈する方略と、“この女性は強い”などとステレオタイプと関連づけずに解釈する方略に着目した。結果、前者の方略が用いられた場合には潜在的ステレオタイプは低減しなかったが、後者の方略が用いられた場合には潜在的ステレオタイプが低減していた。どちらの方略で

も、反ステレオタイプ事例が処理されていることから、カテゴリー表象の中の反ステレオタイプの側面は活性化していただろう。しかし、ステレオタイプと関連づけて解釈する方略ではステレオタイプを意識的に参照する必要があるため、カテゴリー表象の中のステレオタイプに一致する側面も活性化してしまう。一方で、ステレオタイプと関連づけずに解釈する方略ではステレオタイプを参照する必要はなく、ステレオタイプに一致する側面は活性化しにくい。こうしたことが、潜在的ステレオタイプが低減するかどうかを分けていたのだろう。

本研究の成果から、潜在的ステレオタイプを低減させるためには、反ステレオタイプ事例を既存のステレオタイプと関連づけずに解釈することが有効であると言える。すなわち、その人物が属すカテゴリー（e.g., 女性）と反ステレオタイプの属性（e.g., 強い）を直接的に結びつける形で反ステレオタイプ事例を解釈することが、潜在的ステレオタイプの低減につながりやすいのだろう。

ただし、本研究のような実験手続きでは、反ステレオタイプ事例に対する解釈方略を適切に制御できていなかった可能性がある。特に、関連づけあり条件で、参加者が実際にステレオタイプに関連づけて解釈し続けていたかどうかは疑問が残る。関連づけあり条件では、ターゲットを「男性は強い」というイメージにあてはまらない男性、「女性は弱い」というイメージにあてはまらない女性」とした。最初はこれらを念頭においてターゲットであるかどうかを判断していたかもしれないが、途中で「女性は強い」であるかどうかを判断すればよい」と、関連づけなし方略に切り替えられていた可能性もあるだろう。関連づけあり条件となし条件間で潜在的ステレオタイプの強さに違いが見られたという結果から見れば、各条件で想定していた方略が用いられていたと考えることもできる。しかし、その保証はない。この問題点をどのように解消するかが、今後の課題であろう。

第3部 総合考察

第 11 章 研究知見のまとめと解釈

本論文では、6 つの研究を通じて、反証事例が潜在的ステレオタイプや潜在的偏見に及ぼす影響について検討した。本章では、本論文の目的を振り返ったうえで、各研究で得られた知見を簡潔にまとめておく。そして、得られた研究知見を総合的に解釈していくことにする。

11-1. 本論文の目的と研究視点の振り返り

目的の振り返り

本論文では、ステレオタイプに反する事例や、カテゴリーの全体的な評価とは反する事例、すなわちステレオタイプや偏見に対する反証事例が、潜在的ステレオタイプ・偏見に及ぼす影響に焦点をあてた。潜在的ステレオタイプ・偏見は、意識を介さない自動的な情報処理過程を通じて判断や行動に影響すると考えられている (e.g., Devine, 1989; Dovidio *et al.*, 2002)。平等主義的な社会的規範が流布した現代においてもしばしばステレオタイプや偏見に依拠した言動が見られるが、その一因として、ステレオタイプや偏見が潜在的なレベルで保持されていることを指摘できるだろう。そのため、どのようにすれば潜在的ステレオタイプ・偏見を弱められるのかを明らかにすることには社会的な意義があると考えられ、これまでに多くの研究によって実証的に検討されてきた。

潜在的ステレオタイプ・偏見を低減させる要因の 1 つとして、ステレオタイプや偏見に合致しない事例、すなわち反証事例の影響が注目されてきた。これまでに、反証事例の提示や想起によって、潜在的ステレオタイプや偏見が低減することを報告する研究が提出されている (e.g., Dasgupta & Greenwald, 2001; Gawronski & Bodenhausen, 2005)。また、ステレオタイプに一致しない情報を肯定するといった意識的な反応によって、潜在的ステレオタイプが低減することも示されている (e.g., Gawronski *et al.*, 2008)。これらの研究知見から、反証事例によって潜在的ステレオタイプ・偏見は変容しうることが示唆される。しかし、なぜこのような変容が生じているのかが包括的に説明されることは、これまでにほとんどなかった。潜在的ステレオタイプ・偏見が変容する原因を特定することは、反証事例による低減効果がどのような場合に生じやすく、どのような場合には生じにくいのか

を明らかにするうえでも重要であると考えられる。そこで本論文では、潜在的ステレオタイプ・偏見がなぜ変容し、どのような場合に低減しやすいのを議論し、反証事例の呈示や想起、反証事例をどのように解釈するかといったことが、潜在的ステレオタイプや潜在的偏見に及ぼす影響について実証的に検討することを目的とした。

本論文の視点と仮説

潜在的ステレオタイプと潜在的偏見は、社会的カテゴリーと特定の属性あるいは感情価の間の非意識的な結びつき（連合）であり、社会的カテゴリーに対する潜在的態度ともいえるだろう。Gawronski and Bodenhausen (2006, 2011) は、潜在的態度が変容する原理には 2 つあることを指摘している。1 つは、連合の構造的変化で、態度対象と連合している情報（属性、感情価）が古いものから新しいものへ置き換わることによって、潜在的態度が変容するというものである。もう 1 つは、活性化パターンの変化であり、文脈との関連性などによって、態度対象と連合している情報のうち一部が活性化することで、潜在的態度が影響を受けるというものである。このとき、活性化する連合の感情価（意味的内容）が異なれば、潜在的態度が変容することになる。本論文では、反証事例によって潜在的ステレオタイプ・偏見が低減するのは、以上の 2 つのうち後者のメカニズムによるところが大きいだろうという立場をとる。すなわち、反証事例によって、ステレオタイプや偏見に一致する連合ではなく、それらに反する連合が活性化することで、潜在的ステレオタイプ・偏見は低減すると考える。

しかし、反ステレオタイプの・反偏見的な連合が活性化して潜在的ステレオタイプ・偏見が低減するためには、そうした連合がカテゴリーに関する知識として表象され、ステレオタイプに一致する側面、一致しない側面といったように、ある程度まとまって記憶内に保持されている必要があると考えられる。カテゴリーに関する知識がこうした構造になっているかどうかを議論したうえで、反証事例による潜在的ステレオタイプ・偏見の低減が検討されることはこれまでにほとんどなかった。

そこで本論文では、カテゴリーに関する知識としてどのような情報が保持されているか、そして、それらがどのようにして構造化されているかを議論した。カテゴリーに関しては、属性レベルの抽象的な情報（概念）や事例レベルの具体的な情報が記憶内に取り込まれ、属性の下位に事例が結びついた階層的な知識構造が想定できる。また、特に人種や性別などに基づくカテゴリーでは、ある属性がステレオタイプとして保持されているとしても、

それに反する属性を備えた人物に接触することも多いだろう。こうしたことから、ステレオタイプの属性や、偏見的に結びついている感情価とは意味的に反する属性・感情価、そして、それらの属性・感情価を備えた人物などの具体的な事例もまた、カテゴリーに関する知識として記憶内に取り込まれていると考えられる。したがって、カテゴリー表象は階層的なだけでなく、多面的な構造を有すると想定できるだろう。本論文では、このことを、カテゴリー表象の多面的・階層的モデルとして提唱した。そして、こうした構造を有する表象では、状況に応じて関連する側面のみが部分的に活性化すると考えられる。こうしたカテゴリー表象の中で、反証事例は反ステレオタイプの・反偏見的な側面と関連する。したがって、反証事例による潜在的ステレオタイプ・偏見の低減は、反ステレオタイプのあるいは反偏見的な側面の部分的活性化が原因となって生じると言えるだろう。

このように考えると、反証事例による潜在的ステレオタイプや偏見の低減は、そうした事例や、それらから抽出される属性 (i.e., 反ステレオタイプの属性、反偏見的な感情価) がカテゴリーに関する知識として表象されており、利用可能であるほど生じやすいだろう。言い換えれば、手元のないものを手に取って使うことができないのと同様に、そうした知識が表象されていなければ、ステレオタイプや偏見に反する側面が活性化するということが自体が起こりえない。この場合、反証事例が呈示されるなどしても、潜在的ステレオタイプ・偏見は低減しないと考えられる。また、特定の状況においてステレオタイプや偏見に反する側面が活性化したとしても、一致する側面も同時に活性化してしまうような場合には、潜在的ステレオタイプ・偏見は低減しないと予測される。すなわち、反ステレオタイプ・反偏見的な側面だけが活性化する場合に、潜在的ステレオタイプ・偏見は低減するだろう。

以上のような議論を基に、本論文では、反証事例が潜在的ステレオタイプ・偏見に及ぼす影響に関する 2 つの基本仮説を導いた。1 つは、「ステレオタイプや偏見に一致しない情報がカテゴリーに関する知識として表象されているほど、反証事例によって潜在的ステレオタイプ・偏見は低減しやすいだろう」という仮説 (基本仮説 1) である。もう 1 つは、「カテゴリーに関する知識として表象されている反ステレオタイプ・反偏見的な側面が反証事例によって活性化するほど、潜在的ステレオタイプ・偏見は低減するだろう」という仮説 (基本仮説 2) である。また、この仮説は、反ステレオタイプ・反偏見的な側面が活性化したとしても、逆の一致する側面も活性化してしまう場合には潜在的ステレオタイプ・偏見は低減しないだろうということも含意している。

本論文では、(1) 反証事例の呈示、(2) 反証事例の意識的な想起、(3) 反証事例に対する意識的な解釈の 3 つの事象が潜在的ステレオタイプや潜在的偏見に及ぼす影響について、以上の 2 つの基本仮説から導かれる具体的な仮説を呈示し、実証的に検討した。表 11-1 は、各研究の成果を一覧にしたものである。以下では、各研究で得られた知見を簡単に述べる。そして、反証事例が潜在的ステレオタイプ・偏見に及ぼす影響について本論文で議論してきたことをまとめ、各研究知見の解釈を行う。

表 11-1. 各研究で得られた実験結果の概観

研究	題材	操作	潜在レベルの低減
研究 1-1	肥満者は無能	新奇の肥満者事例 + 有能経歴呈示	低減せず
研究 1-2	黒人(vs. 白人) はネガティブ	・ 著名黒人事例の単純呈示 . . . ・ 著名黒人事例 + ポジティブ経歴呈示 . . .	低減せず 低減
研究 2-1	男は仕事、 女は家庭	非伝統的女性 (vs. 伝統的女性)事例想起 . . .	低減(女性参加者)
研究 2-2	男は仕事、 女は家庭	非伝統的女性 (vs. 伝統的女性)事例想起 ・ 女性参加者 ・ 男性参加者	低減(キャリア志向低参加者のみ) 低減せず(男性参加者)
研究 3-1	男は強く、 女は強い	反証事例のステレオタイプ ・ 関連づけ解釈 ・ 関連づけなし解釈	低減せず 低減せず
研究 3-2	男は強く、 女は強い	反証事例のステレオタイプ ・ 関連づけ解釈 ・ 関連づけなし解釈	低減せず 低減

11-2. 研究知見のまとめ

研究 1：反偏見事例の呈示が潜在的偏見に及ぼす影響

研究 1 では、ネガティブに評価されていると考えられる社会的カテゴリーに対する潜在的偏見が、反偏見事例の呈示によって低減するかどうかを、2 つの実験で検討した。

研究 1-1 では、参加者に知られていない新奇の反偏見事例の呈示によって、潜在的偏見が低減するかどうかを検討した。実験では、新奇の肥満者事例を、有能であることを示すプロフィールとともに呈示する有能肥満者呈示条件、無能であることを示すプロフィールとともに呈示する無能肥満者呈示条件、肥満者とは無関連の情報を呈示する統制条件の 3 つの条件があった。事例の呈示後、肥満者の能力に関する潜在的偏見の強さを測定した。その結果、潜在的偏見の強さは条件間で差が見られなかった。すなわち、有能な肥満者事例の呈示によって潜在的偏見が低減したり、無能な肥満者事例の呈示によって潜在的偏見が逆に強化したりすることは示されなかった。

研究 1-2 では、黒人が白人よりもネガティブに評価されていること (i.e., 人種偏見) を題材に、反偏見事例 (ポジティブに評価される著名な黒人事例) を呈示する際の評価次元の顕現性が潜在的偏見に及ぼす影響を検討した。実験では、卓越した経歴を持つ黒人の著名な人物を反偏見事例として呈示した。その際、経歴などの人物の評価に関する情報を含めずに事例を呈示する評価非顕現条件と、経歴を示すことによってポジティブに評価されることを顕現的にして事例を呈示する評価顕現条件があった。そして、潜在的な人種偏見の強さを紙筆版 IAT で測定した。その結果、評価を顕現的にして反偏見事例を呈示した場合には、単に反偏見事例を呈示した場合や、反偏見事例を呈示しなかった場合 (統制条件) に比べ、潜在的な人種偏見が弱くなっていた。ただし、この結果が得られたのは紙筆版 IAT で偏見不一致ブロックを先に実施していた場合に限られていた。

研究 2：伝統的・非伝統的女性の事例想起が潜在的性役割観に及ぼす影響

研究 2 では、ステレオタイプに一致する事例と一致しない事例のいずれかを想起することが潜在的ステレオタイプに及ぼす影響を、2 つの実験で検討した。具体的には、「男は仕事、女は家庭」といった性役割観を題材として、キャリア女性に代表される従来性役割観に一致しない女性を非伝統的女性、主婦などに代表される従来性役割観に一致する女性を伝統的女性とし、それぞれのタイプにあてはまる女性事例の想起が、「男性」と「仕事」、

「女性」と「家庭」を結びつける潜在的性役割観に及ぼす影響を検討した。

研究 2-1 では、女子大学生を参加者として、伝統的・非伝統的女性の事例想起が潜在的性役割観に及ぼす影響を検討した。伝統的女性想起条件では「“良き妻”、“良き母”というイメージがある女性有名人」を、非伝統的女性想起条件では「“キャリアウーマン”、“バリバリ働いている”というイメージがある女性有名人」を想起させた後、潜在的性役割観を紙筆版 IAT によって測定した。その結果、伝統的女性を想起した場合に比べ、非伝統的女性を想起した場合には、潜在的性役割観が弱くなっていた。

研究 2-2 では、男女大学生を対象として、研究 2-1 と同様の実験を実施した。実験の結果、キャリア志向度の低い女性が非伝統的女性を想起した場合、伝統的女性を想起した場合に比べ、潜在的性役割観が弱くなることが示された。潜在的性役割観に対するこのような影響は、男性や、キャリア志向度の高い女性では見られなかった。また、研究 2-2 では、伝統的・非伝統的女性事例の想起が顕在的性役割観にも影響を及ぼしていた。具体的には、参加者の性別にかかわらずキャリア志向の低い参加者において、伝統的女性が想起された場合よりも非伝統的女性が想起された場合に、顕在的性役割観が平等主義的になっていた。

研究 3：反ステレオタイプ事例の解釈方略が潜在的ステレオタイプに及ぼす影響

研究 3 では、反ステレオタイプ事例の解釈におけるステレオタイプへの関連づけの有無が、潜在的ステレオタイプに及ぼす影響を検討した。

研究 3-1 では、男女の顔写真を、強いことを表す特性語あるいは弱いことを表す特性語をペア（写真－単語ペア）にして呈示した。参加者には、それらのペアの中から反ステレオタイプ事例を表す「男性－弱い」ペアと「女性－強い」ペアを探してもらった。このとき、どのようにして反ステレオタイプのペアを探すのかを教示によって操作した。関連づけあり条件では、ステレオタイプと関連づけて反ステレオタイプ事例を解釈することを方向づけるために、「“男は強い、女は弱い”というステレオタイプにはあてはまらない人物」を探すように教示した。一方、関連づけなし条件では、ステレオタイプと関連づけずに反ステレオタイプ事例を解釈することを方向づけるために、「“弱い男性、強い女性”にあてはまる人物」を探してもらった。また、男女に関連する以上のような認知的処理を行わない統制条件もあった。その後、「男」と「強い」、「女」と「弱い」間の連合強度（i.e., 潜在的ステレオタイプ）を紙筆版 IAT で測定したところ、3つの条件間で潜在的ステレオタイプの強さに差は見られなかった。

研究 3-2 では、研究 3-1 の手続き上の問題を改善し、反ステレオタイプ事例の解釈におけるステレオタイプ関連づけの有無が、潜在的ステレオタイプに及ぼす影響を再度検討した。研究 3-1 では、写真-単語ペアの処理数を統制できていなかったという問題があったため、研究 3-2 ではペアの処理数が一定となるようにした。また、紙筆版 IAT ではなくコンピュータ版 IAT によって潜在的ステレオタイプ（男は強く、女は弱い）を測定した。その結果、反ステレオタイプ事例を既存のステレオタイプに関連づけて解釈した場合には潜在的ステレオタイプは弱まらないが、関連づけずに解釈した場合には潜在的ステレオタイプが弱まっていた。

11-3. 研究知見の全体考察

潜在的ステレオタイプ・偏見における反証事例の影響プロセス

潜在的ステレオタイプや偏見は、反証事例を呈示したり想起したりすることによって低減することが示されてきた（e.g., Dasgupta & Greenwald, 2001; Gawronski & Bodenhausen, 2005）。また、ステレオタイプに一致しない情報（事例）を肯定するといった意識的な反応によっても、潜在的ステレオタイプが低減することも示されている（e.g., Gawronski *et al.*, 2008）。本論文では、なぜ、そしてどのような場合にこのような低減が生じるのかを検討することが目的であった。以下、潜在的ステレオタイプ・偏見に対して反証事例がどのようにして影響するのかを、本論文の議論を整理しながら述べる。なお、「ステレオタイプ・偏見」を「ステレオタイプ」とだけ表記する。

本論文では Gawronski and Bodenhausen（2006, 2011）の議論を参考に、以上のように反証事例によって潜在的ステレオタイプが低減するのは、反ステレオタイプの知識（連合）が活性化することによって生じると考えた。つまり、潜在的ステレオタイプの低減につながる直接的な要因は、当該カテゴリーに関して活性化する知識の内容であると言える。

潜在的ステレオタイプを低減させるには、反ステレオタイプの知識が活性化することが重要となるが、知識が活性化するためにはその知識が記憶内に保持されている必要がある。つまり、反ステレオタイプの知識が活性化するためには、そうした知識がカテゴリーに関連づけられて記憶内に保持されていることが必要条件となる。ただし、反ステレオタイプの知識だけが活性化する場合には潜在的ステレオタイプは低減するが、ステレオタイプに一致する知識も活性化してしまう場合には低減しないと予測される。本論文では、

カテゴリーに関する知識（カテゴリー表象）が多面的・階層的な構造を有しうることを議論し（カテゴリー表象の多面的・階層的モデル）、カテゴリー表象内に反ステレオタイプの知識や情報がまとまった側面が形成されていることを述べた。

以上のことから、潜在的ステレオタイプに対する反証事例の影響に関する本論文の枠組みは、図 11-1 のようにまとめられる。反証事例の呈示や想起などによって潜在的ステレオタイプが低減するためには、まず、対象となっているカテゴリーの表象内に反ステレオタイプの側面が形成されている必要があり、形成されていないのであれば、（知識構造の変化が伴わない限り）潜在的ステレオタイプは低減しないことが予測される。反ステレオタイプの側面が形成されている場合には、そうした側面の活性化が促され、ステレオタイプに一致する側面の活性化が促されないようなとき（i.e., 反ステレオタイプの側面のほうがステレオタイプに一致する側面よりも強く活性化するようなとき）、潜在的ステレオタイプは低減すると予測される。

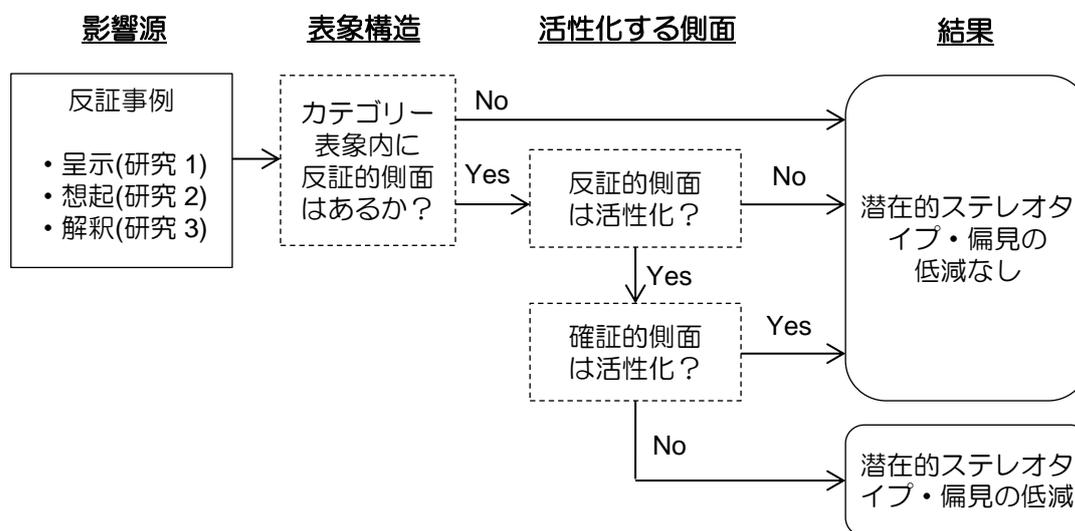


図 11-1. 潜在的ステレオタイプ・偏見に対する反証事例の影響に関する本論文の枠組み

注) 図中の「反証的側面」と「確証的側面」は順に、カテゴリー表象内のステレオタイプ・偏見に反する側面、一致する側面のことを表す。

本論文で得られた研究知見の解釈

本論文で議論したことから、反証事例が潜在的ステレオタイプ・偏見に及ぼす影響に関する本論文の枠組みは以上のようにまとめられる。以下では、本論文の実証研究で得られた知見をこの枠組み（以下、本論文の枠組みと呼ぶ）にあてはめることができるかについて議論する。

研究 1 は、反偏見事例の呈示が潜在的偏見に及ぼす影響について検討するものであった。このうち、研究 1-1 では、新奇の有能肥満者事例を呈示しても、肥満者の能力に関する潜在的偏見は低減していなかった。この結果は、有能さと無能さの両方が肥満者カテゴリー表象に含まれているとしても、呈示された事例が記憶内に保持されていない新奇の事例であったために、肥満者の有能さに関する側面を活性化させる手がかりとして機能しなかったことが原因であると解釈できるだろう。ただし、有能さが肥満者カテゴリーに関する知識として保持されていないことが原因であったとも考えられ、どちらの解釈が適切かは特定できない。この点は、どのようにすれば肥満者に対する潜在的偏見を低減できるかについて考えるうえで重要であるため、今後明らかにしていく必要があるだろう。

研究 1-2 では、著名な黒人事例を卓越した（ポジティブな）経歴とともに呈示したとき、潜在的な人種偏見が低減していた。黒人に対しては、ネガティブな属性（e.g., 運動神経の悪い）とポジティブな属性（e.g., 攻撃的な）の両方がステレオタイプとして保持されていると思われるため、黒人カテゴリーの表象は感情価において多面的な構造を持っているだろう。そして、ポジティブな経歴も呈示されたことで、黒人のポジティブな側面（i.e., 反偏見的な側面）の活性化が促され、潜在的な人種偏見が低減していたのだろう。

研究 2 の 2 つの実験（研究 2-1 と研究 2-2）では、女性参加者（その中でもキャリア志向の低い者）において、伝統的女性が想起された場合よりも非伝統的女性が想起された場合に潜在的性役割観が弱くなっていた。女性カテゴリーの表象が、従来の性役割に一致する伝統的女性と一致しない非伝統的女性に分化しているという知見から（e.g., Glick & Fiske, 2001; Six & Eckes）、女性カテゴリーは性役割に関して多面的な構造を有していると言える。そして、女性は男性に比べて、伝統的女性、非伝統的女性それぞれに関するより多くの知識を保持していると思われる。そのため、非伝統的女性が想起されたときに女性カテゴリー表象中の性役割に一致しない側面が活性化する度合いは、女性参加者のほうが高くなりやすく、結果として潜在的性役割観が低減したのだろう。

しかし、女性参加者で女性事例の想起が潜在的性役割観に影響を及ぼしやすいことは本

論文の枠組み（図 11-1）から説明できるが、男性参加者で事例想起の影響が見られなかったことは説明できない。性役割一致・不一致それぞれの側面は、男性が持つ女性カテゴリー表象内にも含まれているだろう。したがって、本論文の枠組みから考えると、伝統的・非伝統的女性事例の想起が潜在的性役割観に及ぼす影響は、男性参加者でも生じることになる。このことは、どのように説明できるだろうか。1 つの説明として、女性参加者では伝統的女性事例の想起が伝統的女性としての自己表象を、非伝統的女性事例の想起が非伝統的女性としての自己表象を活性化させた結果、潜在的性役割観に影響された可能性を指摘できるだろう（e.g., 高林・沼崎, 2010）。この説明が正しければ、男性参加者は伝統的あるいは非伝統的“女性”としての自己表象を持ち得ないため、男性参加者では女性事例の影響が生じなかったことも理解できる。伝統的・非伝統的女性事例の想起が自己表象を媒介して潜在的性役割観に影響しているのか、それとも本論文で想定しているように、“他者”表象としての女性カテゴリーの異なる側面が活性化することで潜在的性役割観に影響しているのかは、本論文の研究知見から明らかにすることはできない。伝統的・非伝統的女性事例の想起が、それぞれに対応する自己表象を活性化させるのかどうかを検討する必要があるだろう。

研究 3 では、反ステレオタイプ事例の解釈におけるステレオタイプへの関連づけの有無が、潜在的ステレオタイプに及ぼす影響を 2 つの実験（研究 3-1 と研究 3-2）で検討した。研究 3-1 では実験手続きに問題があったため、ここでは研究 3-2 の結果に基づいて考察する。研究 3-2 では、反ステレオタイプ事例を“女性は弱々しいけど、この女性はそうではない”などとステレオタイプと関連づけて解釈してしまうと潜在的ステレオタイプは低減しないが、“この女性は強い”などとステレオタイプに関連づけずに解釈した場合には潜在的ステレオタイプが低減していた。どちらの解釈方略であっても、反ステレオタイプ事例に対して解釈を行っているため、カテゴリー表象中の反ステレオタイプ的な側面が活性化するだろう。しかし、ステレオタイプに関連づけて解釈するにはステレオタイプを参照する必要があるため、ステレオタイプに一致する側面も活性化させることになる。よって、ステレオタイプ一致・不一致の両側面が活性化することになり、潜在的ステレオタイプが低減しなかったのだろう。一方、ステレオタイプに関連づけずに反ステレオタイプ事例を解釈する場合はステレオタイプを参照する必要がないため、ステレオタイプに反する側面の活性化水準を高く保てる。こうしたことから、潜在的ステレオタイプが低減したのだろう。

ここでは、本論文で提案したカテゴリー表象の多面的・階層的モデルと、そうしたカテゴリー表象で生じる特定の側面の部分的活性化の視点から、反証情報が潜在的ステレオタイプ・偏見に及ぼす影響について議論した。反証情報による潜在的ステレオタイプ・偏見の低減は、反ステレオタイプの・反偏見的な側面がカテゴリー表象内に形成されており、そうした側面が反証情報の呈示などによって活性化し、ステレオタイプや偏見に一致する側面が活性化しないような場合に生じると考えられた。本論文での実証研究で得られた研究知見には代替説明の可能性は多少残るものの、潜在的ステレオタイプ・偏見に対する反証事例の影響に関して本論文で想定した枠組みからおおむね説明できるといえるだろう。

第12章 本論文の意義と今後の展望

本論文では、潜在的ステレオタイプ・偏見がなぜ変容し、どのような場合に低減しやすいのかを議論したうえで、反証事例の呈示や想起、反証事例をどのように解釈するかといった3つの事象において、反証事例が潜在的ステレオタイプや潜在的偏見に及ぼす影響について実証的に検討した。本章では、本論文の意義や示唆、限界、今後の展望について述べていく。

12-1. 本論文の意義と示唆

潜在的ステレオタイプ・偏見の低減

本論文では、潜在的ステレオタイプや潜在的偏見が反証事例によって低減するかどうかを、反証事例の呈示・想起・解釈の3つの事象において実証的に検討した。

反証事例の呈示に関しては、研究1の成果から、潜在的偏見を低減させるためには人々によってよく知られている反偏見事例を、その事例の評価も含めて呈示することが有効であるといえよう。反証事例をどのように呈示すれば効果的に潜在的ステレオタイプ・偏見を低減させられるのかは、これまでに検討されてこなかった。この点を明らかにしたということに、研究1の意義を見出すことができるだろう。

反証事例の想起に関しては、研究2において、伝統的・非伝統的女性事例の想起が潜在的性役割に及ぼす影響について検討した。非伝統的女性事例が想起されると、伝統的女性が想起された場合に比べ、潜在的性役割観は弱まっていたが、この傾向は男性よりも女性で見られやすかった。男性の持つ潜在的性役割観をどのようにすれば低減させられるのかは今後の検討課題となるが、想起するという意識的な認知的処理が、非意識的である潜在的性役割観に影響を及ぼしていたという点で、興味深い知見であるといえよう。

研究3では、反ステレオタイプ事例をステレオタイプに関連づけて解釈した場合には潜在的ステレオタイプは低減しないが、ステレオタイプに関連づけずに解釈した場合には低減することが示された。このことから、「この女性は数学嫌いではない」や「この〇〇人は嫌いではない」といった方略ではなく、「この女性は数学好きだ」や「この〇〇人は好きだ」といった方略で反証事例を理解することが、潜在的ステレオタイプ・偏見を低減させるう

えで重要だと言えるだろう。また、以上のような解釈は意識的になされるものであると言えるため、どちらの方略を用いるかは意識的に制御可能である。すなわち、反証事例の想起と同様に、意識的な認知処理によって潜在的ステレオタイプ・偏見を低減させる可能性を見出したという点でも意義のある知見だと言えるだろう。

潜在的ステレオタイプ・偏見の低減を説明する枠組み

本論文では、反証事例によって潜在的ステレオタイプ・偏見が低減するのはなぜか、どのような場合に低減しやすいのかという問題に対し、多面的で階層的な構造を持つカテゴリー表象に含まれる特定の側面の部分的活性化による説明を試みた。具体的には、反証情報による潜在的ステレオタイプ・偏見の低減は、反ステレオタイプの・反偏見的な側面がカテゴリー表象内に形成されており、そうした側面が反証情報の呈示などによって活性化するが、ステレオタイプや偏見に一致する側面は活性化しないような場合に生じるだろうと考えられた（図 11-1 参照）。本論文の研究知見はこうした仮説（反証事例の影響に関する本論文の枠組み）をおおむね支持するものであり、反証事例による潜在的ステレオタイプ・偏見の低減を説明する有効な枠組みとして機能すると言えるだろう。ただし、潜在的性役割観における伝統的・非伝統的女性事例の想起の影響が男性においてみられなかったなど、予測に反する実験結果も散見されることから、本論文で想定した反証事例の影響に関する枠組みの妥当性について、今後さらに検討していく必要がある。

本論文では、反証事例を独立変数、潜在的ステレオタイプ・偏見を従属変数としているが、別の研究領域の知見を本論文の枠組みから説明できることもあるだろう。例えば、Fishbach *et al.* (2010) は、学業目標が活性化している状態では、学業に関連する事物 (e.g., 図書館) に対する潜在的態度はポジティブに、遊びに関連する事物 (e.g., 映画) に対する潜在的態度はネガティブになることを示している。本論文の枠組みから考えると、まず、遊びはポジティブにもネガティブにも捉えられる概念である。そして、学業目標に対して遊びのポジティブな側面は、目標達成を阻害する。このように考えると、学業目標は遊びのネガティブな側面を活性化させ、ポジティブな側面を活性化させずに、遊びに対する潜在的態度に影響を及ぼしたと解釈できるだろう。

顕在的ステレオタイプ・偏見に関する示唆

本論文では、主に潜在的なレベルのステレオタイプや偏見に着目したが、研究 1 や研究

2 では、顕在的なレベルのステレオタイプや偏見も測定していた。その中で、いくつか興味深い知見が得られた。

一般に、偏見など、態度を表明することに社会的望ましさに関わる場合は、潜在－顕在指標間の相関が認められないことが多い(Greenwald *et al.*, 2002; Hofmann *et al.*, 2005)。しかし研究 1-1 では、肥満者の能力に関する潜在的偏見と顕在的偏見が正の相関関係にあることが示されていた。また、この相関関係は、偏見を抑制しようとする動機づけが低い場合に特に強かった。一方で、人種偏見(研究 1-2) や性役割観(研究 2-1、2-2) では、潜在－顕在間に相関関係は見られなかった。肥満であることは、自らの努力によってそのカテゴリーを脱することができることと知覚されやすいだろう。一方で、人種や性別は生得的なものであると知覚されやすいだろう。カテゴリー移動に関するこうした信念が、ステレオタイプや偏見における潜在－顕在間の相関関係の有無を規定しているのかもしれない(cf. Crandall & Eshleman, 2003)。

また、研究 2-2 では、参加者の性別によらずキャリア志向の低い参加者において、伝統的女性の事例を想起した場合よりも非伝統的女性の事例を想起した場合に、顕在的性役割観が平等主義的になっていた。理由としては、非伝統的女性の想起が「男女平等であるべき」、「女性も仕事をすべき」といった規範を顕現化させ、平等主義的な性役割観が表明されるようになった可能性が考えられる。しかし、潜在的性役割観と顕在的性役割観の間に相関関係が見られていなかったことから、その影響プロセスは潜在的性役割観とは異なるだろう。本論文ではステレオタイプ・偏見の潜在的な部分にだけ着目して検討してきたが、Gawronski and Bodenhausen (2006, 2011) は、潜在と顕在双方の変容を説明するモデル(Associative-Propositional Evaluation model) を提唱している。本論文で議論・検討してきたことに加え、こうしたモデルを組み込むなどして、潜在的・顕在的双方のステレオタイプ・偏見がどのような場合に変容するのかについて同時に考えていくことが重要だろう。

12-2. 本論文の限界と今後の展望

ここまで、本論文で行った実証研究の知見と意義について述べてきた。その一方で、本論文には問題点や限界もある。個々の研究の問題点や今後検討すべき課題は、各研究を報告した実証的検討(第2部)の部分ですでに述べてきた。そこで以下では、本論文で重

要となっている、カテゴリー表象の多面的・階層的モデルと、特定の側面の部分的活性化に関する問題点や限界を指摘し、今後の展望について述べる。

カテゴリー表象は多面的な構造を持つか？

本論文では、反証事例が反ステレオタイプの・反偏見的な側面を部分的に活性化させることで潜在的ステレオタイプや潜在的偏見が低減することを説明するために、カテゴリーに関する知識が多面的かつ階層的な構造をもつとする、カテゴリー表象の多面的・階層的モデルを提案した。本論文では特に、人種や性別など、日常的に頻繁に利用されるようなカテゴリーでは多面的・階層的構造になりやすいとした。

このモデルが想定していることの中で最も重要な要素は「多面性」である。多面的であるがゆえに、特定の側面 (e.g., ステレオタイプの側面) やそれに反するような側面 (e.g., 反ステレオタイプの側面) があり、状況に応じて関連する側面が活性化すると想定できる。しかし社会心理学では、人には一貫性を求める傾向が備わっていることが古くから指摘されてきた (Festinger, 1957)。本論文でいう「多面性」は、特定のカテゴリーの表象中に内容的に相反する情報や知識が含まれていることに言及しているため、以上のような人間観に反している。しかし、カテゴリーは多くの成員から構成されるため、“ああいう人もいれば、逆にこういう人もいる”といったように、一貫性の圧力は働きづらいと考えられる。こうしたことを考慮すれば、カテゴリー表象内に含まれる諸要素 (情報や知識) は必ずしも一貫する必要はなく、内容的に相反する情報や知識が含まれることはあるだろう。

内容的に相反する情報が同一の対象に対して持たれる可能性を、Rydell and Gawronski (2009) は次のような実験で検討している。まず、ある色 (e.g., 黄色) を背景として、ある人物に関するポジティブもしくはネガティブな内容の記述文を呈示した (第1学習ブロック)。次に、最初とは異なる色 (e.g., 青) を背景として、同一人物に関して第1学習ブロックとは感情価が逆の内容の記述文を呈示した (第2学習ブロック)。その後、1つ目の背景色、2つ目の背景色それぞれの中にある刺激人物に対する潜在的態度を測定した。その結果、刺激人物が1つ目の背景色上にいるときは、第1ブロックで呈示された情報の内容 (感情価) を反映した潜在的態度が、2つ目の背景上にいるときは、第2ブロックで呈示された情報の内容 (感情価) を反映した潜在的態度が報告された。この実験結果は、同一人物に対して、感情価の異なる情報 (i.e., 内容的に一貫しない情報) が保持されることを示している。

先にも述べたように、カテゴリーは何人もの成員から構成されるため、個人に対してよりも、相反する内容の情報が取り込まれる可能性は高いと考えられる（唐沢, 2001b）。こうしたことから、カテゴリー表象は多面性をもちうると言えるだろう。ただし、多面的な表象がどのようにして形成され、維持されるのかに関しては、今のところ実証的な証拠がない。この点は今後の課題と言えるだろう。

部分的活性化による変容は、変容なのか？

本論文では、潜在的ステレオタイプ・偏見の低減は、反証情報の呈示などによってカテゴリー表象内に含まれる反ステレオタイプの、反偏見的な側面が活性化することによって生じると考えられた。この部分的活性化に関しては、検討すべき課題がいくつか残っている。

第1に、反証事例によって反ステレオタイプの・反偏見的な側面を構成する知識（連合している情報）が活性化することは検討できていない。第2部で報告した各研究では、潜在的ステレオタイプや潜在的偏見の強さを測定するために IAT を用いた。IAT は概念と属性の連合強度を測定する方法であるため、反証事例などによってどのような知識や概念が活性化しているのかを測定することができない。今後は、連続プライミング課題 (Fazio *et al.*, 1995; Wittenbrink *et al.*, 2001a) など、活性化水準を測定できるような潜在指標を用い、反証事例によってステレタイプに一致する側面と反する側面がどの程度活性化するかを検討する必要があるだろう。

第2に、反証事例によってステレオタイプ・偏見に一致する側面が活性化しないことが、潜在的ステレオタイプ・偏見を低減させるうえで重要となるが、この点に疑問が残る。ステレオタイプや偏見は、カテゴリーに関連する手がかりによって自動的に活性化してしまうことが示されている (e.g., Devine, 1989; Fazio *et al.*, 1995)。反証事例はステレオタイプや偏見に反する事例であり、ステレオタイプや偏見が抱かれているカテゴリーの事例である。これらを考慮すると、ステレオタイプ・偏見に一致する側面が活性化しないことは、ほとんどないと考えられるかもしれない。

しかし、カテゴリーの手がかりがあってもステレオタイプは必ずしも自動的に活性化しないことが示されている (e.g., Gilbert & Hixon, 1991; Lepore & Brown, 1997)。また、Macrae, Bodenhausen, and Milne (1995) は、「中国人女性」を“箸を使って食事する場面”か“化粧をする場面”のどちらかの文脈で呈示し、中国人ステレオタイプ、女

性ステレオタイプそれぞれが活性化している程度を測定した。その結果、「箸」の場面では中国人ステレオタイプの活性化が促進される一方で、女性ステレオタイプの活性化が抑制されていた。逆に、「化粧」の場面では女性ステレオタイプの活性化が促進される一方で、中国人ステレオタイプの活性化が抑制されていた。この実験結果は、利用可能な 2 つのステレオタイプのうちどちらかが活性化すると、もう一方のステレオタイプの活性化は抑制されることを示していると言えよう。

以上の研究から考えると、ステレオタイプ・偏見に一致する側面は反証事例を手がかりとして必ずしも活性化するわけではなく、反証事例によってステレオタイプ・偏見に反する側面が活性化したときには、むしろ活性化が抑制される可能性もあるだろう。

最後に、部分的活性化によって潜在的ステレオタイプ・偏見が低減したとき、それは変容と言えるのかという問題が指摘できる。特定の状況で反ステレオタイプの・反偏見的な側面が部分的に活性化したとしても、状況が変われば活性化する側面も変わってくると言える。この意味で、反ステレオタイプ・反偏見的な側面の部分的活性化に基づく低減は、状況依存的で表面的な低減であると考えられる。こうした批判に対して、本論文の研究知見から防御する術を提供することはできないが、Dasgupta and Greenwald (2001) は、反偏見事例の呈示によって潜在的偏見が低減する効果は、事例を呈示してから 24 時間後でも見られたことを報告している。また、Dasgupta and Rivera (2008) は、反偏見事例の呈示によって潜在的偏見が低減した結果、偏見の対象となっているカテゴリーに対する行動が好意的になることを報告している。これらの研究知見から、部分的活性化に基づく潜在的ステレオタイプ・偏見の低減はある程度持続し、行動にも影響を及ぼすことが示唆され、“その場” だけの低減とも言い切れないだろう。また、状況依存的な低減であったとしても、それが繰り返されることによって常態化し、継続的な低減につながることも考えられよう。こうしたことも含め、反証事例による潜在的ステレオタイプ・偏見の低減に関してさらに検討していく必要があるだろう。

12-3. 結論

本論文では、反証事例の呈示・想起・解釈によって、潜在的ステレオタイプや潜在的偏見がどのような場合に低減し、どのような場合には低減しないのかに関して、実証研究を通じて検討した。潜在的ステレオタイプや潜在的偏見は、反ステレオタイプの・反偏見的な側面がカテゴリー表象内に形成されており、そうした側面が反証情報の呈示などによって活性化する場合に低減しやすいと言える。このとき、ステレオタイプや偏見に一致する側面が活性化しないようにすることも重要であると言えるだろう。

カテゴリー表象に含まれる特定の側面の部分的活性化に起因する潜在的ステレオタイプや偏見の変容は、その場限りの状況依存的な変容であり、結局のところ、より深層の部分は変わらないともいえる。しかし、潜在的ステレオタイプや偏見が状況依存性を持つことは、私たちが刻々と変化する状況に非意識的・自動的に対応できることを示唆しているだろう。複雑な世界を理解するためには、その時々、社会的状況の特性に応じて柔軟に対応できる装置を備えておく必要があり、非意識的な情報処理過程がそれを担っているのかもしれない。ステレオタイプについて言えば、そこにたとえ「真実の核 (kernel of truth)」があるとしても、あくまでもそれはカテゴリー成員の平均的な傾向性の記述であり、カテゴリー表象のレベルでは、その傾向性に一致する情報も一致しない情報も記憶内に貯蔵された多面的・階層的な構造を持つことが、状況の変動に非意識的かつ柔軟に対応できることにつながるだろう。今後は、潜在的ステレオタイプや潜在的偏見に限らず、非意識的な情報処理過程の自動調節機能について総合的に検討していく必要があるだろう。

引用文献

- Allport, G. W. (1954). *The nature of prejudice*. Boston, MA: Addison-Wesley.
(G. W. オルポート 原谷達夫・野村昭(訳) (1968). 偏見の心理学 培風館)
- Andersen, S. M., Chen, S., & Miranda, R. (2002). Significant others and the self. *Self and Identity*, **1**, 159-168.
- Baldwin, M. W., Carrell, S. E., & Lopez, D. F. (1990). Priming relationship schemas: My advisor and the Pope are watching me from the back of my mind. *Journal of Experimental Social Psychology*, **26**, 435-454.
- Banaji, M. R., Hardin, C., & Rothman, A. J. (1993). Implicit stereotyping in person judgment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 272-281.
- Bargh, J. A. (1999). The cognitive monster: The case against controllability of automatic stereotype efforts. In S. Chaiken & Y. Trope (Eds.), *Dual process theories in social psychology*. NY: Guilford Press. Pp. 361-382.
- Bargh, J. A., & Pietromonaco, P. (1982). Automatic information processing and social perception: The influence of trait information presented outside of conscious awareness on impression formation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 437-449.
- Barsalou, L. W. (1982). Context-independent and context-dependent information in concepts. *Memory & Cognition*, **10**, 82-93.
- Blair, I. V. (2002). The malleability of automatic stereotypes and prejudice. *Personality and Social Psychology Review*, **6**, 242-261.
- Blair, I. V., & Banaji, M. R. (1996). Automatic and controlled processes in stereotype priming. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 1142-1163.
- Bosson, J. K., Swann, W. B. J., & Pennebaker, J. W. (2000). Stalking the perfect measure of implicit self-esteem: The blind men and the elephant revisited? *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 631-643.
- Burgess, D., & Borgida, E. (1999). Who women are, who women should be: Descriptive and prescriptive gender stereotyping in sex discrimination. *Psychology, Public,*

- Policy and Law*, **5**, 665-692.
- Chaiken S. & Trope, Y. (1999). *Dual-process theories in social psychology*. NY: Guilford Press.
- Collins, A. M., & Loftus, E. F. (1975). A spreading-activation theory of semantic processing. *Psychological Review*, **82**, 407-428.
- Crandall, C. S., & Eshleman, A. (2003). A justification-suppression model of the expression and experience of prejudice. *Psychological Bulletin*, **129**, 414-446.
- Cunningham, W. A., Johnson, M. K., Gatenby, J. C., Gore, J. C., & Banaji, M. R. (2003). Neural components of social evaluation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 639-649.
- Dasgupta, N., & Asgari, S. (2004). Seeing is believing: Exposure to counterstereotypic women leaders and its effect on the malleability of automatic gender stereotyping. *Journal of Experimental Social Psychology*, **40**, 642-658.
- Dasgupta, N., & Greenwald, A. G. (2001). On the malleability of automatic attitudes: Combating automatic prejudice with images of admired and disliked individuals. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 800-814.
- Dasgupta, N., & Rivera, L. M. (2008). When social context matters: The influence of long-term contact and short-term exposure to admired outgroup members on implicit attitudes and behavioral intentions. *Social Cognition*, **26**, 112-123.
- De Hower, J., Thomas, S., & Baeyens, F. (2001). Associative learning of likes and dislikes: A review of 25 years of research on human evaluative conditioning. *Psychological Bulletin*, **127**, 853-869.
- Devine, P. G. (1989). Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 5-18.
- Dovidio, J. F., Kawakami, K., & Gaertner, S. L. (2002). Implicit and explicit prejudice and interracial interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 62-68.
- Dovidio, J. F., Kawakami, K., Johnson, C., Johnson, B., & Howard, A. (1997). The nature of prejudice: Automatic and controlled processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **33**, 510-540.

- Fazio, R. H., Jackson, J. R., Dunton, B. C., & Williams, C. J. (1995). Variability in automatic activation as an unobtrusive measure of racial attitudes: A bona fide pipeline? *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 1013-1027.
- Fazio, R. H., & Olson, M. A. (2003). Implicit measures in social cognition research: Their meaning and use. *Annual Review of Psychology*, **54**, 297-327.
- Ferguson, M. J., & Bargh, J. A. (2004). Liking if for doing: The effects of goal pursuit on automatic evaluation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 557-572.
- Festinger, L. (1957). *A theory of cognitive dissonance*. Stanford University Press.
- Fishbach, A., Zhang, Y., & Trope, Y. (2010). Counteractive evaluation: Asymmetric shifts in the implicit value of conflicting motivations. *Journal of Experimental Social Psychology*, **46**, 29-38.
- Fiske, S T., & Cuddy, A. J. C. (2006). Stereotype content across cultures as a function of group status. In S. Guimond (Ed.), *Social comparison and social psychology*. New York: Cambridge University Press. Pp. 249-263.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 509-517.
- Gawronski, B., & Bodenhausen, G. V. (2005). Accessibility effects on implicit social cognition: The role of knowledge activation versus retrieval experiences. *Journal of Personality and Social Psychology*, **89**, 672-685.
- Gawronski, B., & Bodenhausen, G. V. (2006). Associative and propositional processes in evaluation: An integrative review of implicit and explicit attitude change. *Psychological Bulletin*, **132**, 692-731.
- Gawronski, B., & Bodenhausen, G. V. (2011). The associative- propositional evaluation model: Theory, evidence, and open questions. In J. M. Olson, & M. P. Zanna (Eds.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 44. San Diego, CA: Academic Press. Pp. 59-127.
- Gawronski, B., Deutsch, R., Mbirkou, S., Seibt, B., & Strack, F. (2008). When “Just Say

- No” is not enough: Affirmation versus negation training and the reduction of automatic stereotype activation. *Journal of Experimental Social Psychology*, **44**, 370-377.
- Gilbert, D. T., & Hixon, J. G. (1991). The trouble of thinking: Activation and application of stereotypic beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 509-517.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001). Ambivalent sexism. In M. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 33. San Diego, CA: Academic Press. Pp. 115-188.
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, **102**, 4-27.
- Greenwald, A. G., Banaji, M. R., Rudman, L. A., Farnham, S. D., Nosek, B. A., & Mellott, D. S. (2002). A unified theory of implicit attitudes, stereotypes, self-esteem, and self-concept. *Psychological Review*, **109**, 2-25.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 197-216.
- Hamilton, D. L., & Sherman, J. W. (1994). Stereotypes. In R. S. Wyer, Jr., & T. K. Srull (Eds.), *Handbook of social cognition (2nd edition)*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.1-68.
- Higgins, E. T., King, G. A., & Marvin, G. H. (1982). Individual construct accessibility and subjective impressions and recall. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 35-47.
- Hinkley, K., & Andersen, S. M. (1996). The working self-concept in transference: Significant-other activation and self change. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 1279-1295.
- Hofmann, W., Gawronski, B., Gschwendner, T., Le, H., & Schmitt, M. (2005). A

- meta-analysis on the correlation between the Implicit Association Test and explicit self-report measures. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 1369-1385.
- Hugenberg, K., & Bodenhausen, G. V. (2003). Facing prejudice: Implicit prejudice and the perception of facial threat. *Psychological Science*, **14**, 640-643.
- 池田謙一・村田光二 (1991). こころと社会—認知社会心理学への招待 東京大学出版会
- 池上知子 (2001). 自動的処理・統制的処理—意識と無意識の社会心理学— 唐沢穰・池上知子・唐沢かおり・大平英樹 (編著) 社会的認知の心理学—社会を描く心のはたらき— ナカニシヤ出版 Pp. 130-151.
- 池上知子・川口潤 (1989). 敵意語・友好語の意識的・無意識的処理が他者のパーソナリティ評価に及ぼす影響 心理学研究, **60**, 38-44.
- Jones, C. R., Olson, M. A., & Fazio, R. H. (2010). Evaluative conditioning: The “how” question. In J. M. Olson, & M. P. Zanna (Eds.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 43. San Diego, CA: Academic Press. Pp. 205-255.
- Jost, J. T., Kivetz, Y., Rubini, M., Guermandi, G., & Mosso, C. (2005). System-justification functions of complementary regional and ethnic stereotypes: Cross-national evidence. *Social Justice Research*, **18**, 305-333.
- 上瀬由美子 (2002). ステレオタイプの社会心理学—偏見の解消に向けて— サイエンス社
- 唐沢穰 (2001a). 集団の認知とステレオタイプ 唐沢穰・池上知子・唐沢かおり・大平英樹 (編著) 社会的認知の心理学—社会を描く心のはたらき— ナカニシヤ出版 Pp. 105-127.
- 唐沢穰 (2001b). 認知的表象—知識構造の成立とその影響— 唐沢穰・池上知子・唐沢かおり・大平英樹 (編著) 社会的認知の心理学—社会を描く心のはたらき— ナカニシヤ出版 Pp. 152-171.
- Kawakami, K., Dovidio, J. F., Moll, J., Hermsen, S., & Russin, A. (2000). Just say no to stereotyping: Efforts of training in the negation of stereotypic association on stereotype activation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 871-888.
- 川上直秋・吉田富二雄 (2010). 集団成員への閥下単純接触が集団間評価に及ぼす影響: IAT

- を用いて 心理学研究, **81**, 364-372.
- 厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室 (2011). 平成 21 年国民健康・栄養調査報告
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/eiyoudl/h21-houkoku-01.pdf> (2014 年 9 月 5 日)
- Lane, K. A., Banaji, M. R., Nosek, B. A., & Greenwald, A. G. (2007). Understanding and using the Implicit Association Test: IV. What we know (so far) about the method. In B. Wittenbrink, & N. Schwarz (Eds.), *Implicit measures of attitudes*. NY: Guilford Press. Pp. 59-102.
- Lemm, K. M., Lane, K. A., Sattler, D. N., Khan, S. R., & Nosek, B. A. (2008). Assessing implicit cognitions with a paper-format implicit association test. In T. G. Morrison, & M. A. Morrison (Eds.), *The psychology of modern prejudice*. NY: Nova Science Publishers. Pp. 123-146.
- Lepore, L. & Brown, R. (1997). Category and stereotype activation: Is prejudice inevitable? *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 275-287.
- Lowery, B. S., Hardin, C. D., & Sinclair, S. (2001). Social influence effects on automatic racial prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 842-855.
- Macrae, C.N., Bodenhausen, G.V., & Milne, A.B. (1995). The dissection of selection in person perception: Inhibitory processes in social stereotyping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 397-407.
- Macrae, C. N., Bodenhausen, G. V., Milne, A. B., & Jetten, J. (1994). Out of mind but back in sight: Stereotypes on the rebound. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 808-817.
- Markus, H., & Wurf, E. (1987). The dynamic self-concept: A social psychological perspective. *Annual Review of Psychology*, **38**, 299-337.
- McGarty, C., Yzerbyt, V. Y., & Spears, R. (2002). Social, cultural and cognitive factors in stereotype formation. In C. McGarty, V. Y. Yzerbyt, & R. Spears (Eds.), *Stereotype as explanations: The formation of meaningful beliefs about social groups*. Cambridge University Press. Pp. 1-15.
- Mitchell, J. P., Nosek, B. A., & Banaji, M R. (2003). Contextual variations in implicit evaluation. *Journal of Experimental Psychology: General*, **132**, 455-469.

- 森津太子 (1999). ステレオタイプの判断の自動的過程と統制された過程 岡隆・佐藤達哉・池上知子(編) 偏見とステレオタイプの心理学 (現代のエスプリ, 384 号) 至文堂 Pp. 64-72.
- 森津太子・坂元章 (1997). 特性関連語の閾下・閾上呈示が対人知覚に及ぼす影響. 心理学研究, **68**, 371-378.
- Mryseth, K. O., Fishbach, A., & Trope, Y. (2009). Counteractive self-control: When making temptation available makes temptation less tempting. *Psychological Science*, **20**, 159-163.
- Muraven, M., & Baumeister, R. F. (2000). Self-regulation and depletion of limited resources: Does self-control resemble a muscle? *Psychological Bulletin*, **126**, 247-259.
- Nosek, B. A. (2005). Moderators of the relationship between implicit and explicit evaluation. *Journal of Experimental Psychology: General*, **134**, 565-584.
- Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2001). The Go/No-go Association Task. *Social Cognition*, **19**, 625-666.
- Nosek, B. A., Banaji, M. R., & Greenwald, A. G. (2002). Harvesting implicit group attitudes and beliefs from a demonstration web site. *Group Dynamics: Theory, Research, and Practice*, **6**, 101-115.
- Olson, M. A., & Fazio, R. H. (2001). Implicit attitude formation through classical conditioning. *Psychological Science*, **12**, 413-417.
- Olson, M. A., & Fazio, R. H. (2006). Reducing automatically activated racial prejudice through implicit evaluative conditioning. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **32**, 421-433.
- Payne, B. K., Burkley, M. A., & Stokes, M. B. (2008). Why do implicit and explicit attitude tests diverge? The role of structural fit. *Journal of Personality and Social Psychology*, **94**, 16-31.
- Payne, B. K., Cheng, C. M., Govorun, O., & Stewart, B. D. (2005). An inkblot for attitudes: Affect misattribution as implicit measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **90**, 277-293.
- Perdue, C. W., & Gurtman, M. B. (1990). Evidence for the automaticity of ageism.

- Journal of Experimental Social Psychology*, **26**, 199-216.
- Phelps, E. A., O'Connor, K. J., Cunningham, W. A., Funayama, E. S., Gatenby, J. C., Gore, J. C., & Banaji, M. R. (2000). Performance on indirect measures of race evaluation predicts amygdala activation. *Journal of Cognitive Neuroscience*, **12**, 729-738.
- Plant, E. A., & Devine, P. G. (1998). Internal and external motivation to respond without prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 811-832.
- Rosch, E. (1975). Cognitive representations of semantic categories. *Journal of Experimental Psychology: General*, **104**, 192-233.
- Rosch, E., & Mervis, C. B. (1975). Family resemblances: Studies in the internal structure of categories. *Cognitive Psychology*, **7**, 573-605.
- Rosenberg, M. J., & Hovland, C. I. (1960). Cognitive, affective, and behavioral components of attitudes. In M. J. Rosenberg, C. I. Hovland, W. J. McGuire, R. P. Abelson, & J. W. Brehm (Eds.), *Attitude organization and change*. Yale University Press. Pp. 1-14.
- Rudman, L. A., & Lee, M. R. (2002). Implicit and explicit consequences of exposure to violent and misogynous rap music. *Group Processes and Intergroup Relations*, **5**, 133-150.
- Rydell, R. J., & Gawronski, B. (2009). I like you, I like you not: Understanding the formation of context dependent automatic attitudes. *Cognition and Emotion*, **23**, 1118-1152.
- 佐名龍太・五十嵐祐 (2013). 肥満者に対するステレオタイプと体型情報による印象の変化. 日本社会心理学会第54回大会発表論文集, **12**.
- Schwarz, N., Bless, H., Strack, F., Klumpp, G., Rittenauer-Schatka, H., & Simons, A. (1991). Ease of retrieval as information: Another look at the availability heuristic. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 195-202.
- 潮村公弘 (2004). ステレオタイプと偏見 岡隆(編) 社会的認知研究のパースペクティブー心と社会のインターフェイスー 培風館 Pp. 85-100.
- Six, B., & Eckes, T. (1991). A closer look at the complex structure of gender stereotypes. *Sex Roles*, **24**, 57-71.

- Sloman, S. A. (1996). The empirical case for two systems of reasoning. *Psychological Bulletin*, **119**, 3-22.
- Smith, E. R. (1996). What do connectionism and social psychology offer each other? *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 893-912.
- Smith, E. R. (1998). Mental representation and memory. In D. T. Gilbert, S T. Fiske, & G Lindzey (Eds.), *Handbook of social psychology* (4th edition). Vol. 1. NY: McGraw-Hill. Pp. 391-445.
- Smith, E. R., & DeCoster, J. (2000). Dual-process models in social and cognitive psychology: Conceptual integration and links to underlying memory system. *Personality and Social Psychology Review*, **4**, 108-131.
- Smith, E. R., & Zárate, M. A. (1992). Exemplar-based model of social judgment. *Psychological Review*, **99**, 3-21.
- Srull, T. K., & Wyer, R. S., Jr. (1989). Person memory and judgment. *Psychological Review*, **96**, 58-83.
- Stephan, W. G. (1989). A cognitive approach to stereotyping. In D. Bar-Tal, C. F. Graumann, A. W. Kruglanski, & W. Stroebe (Eds.), *Stereotypes and prejudice: Changing conceptions*. Springer-Verlag. Pp. 37-57.
- Strack, F., & Deutsch, R. (2004). Reflective and impulsive determinants of social behavior. *Personality and Social Psychology Review*, **8**, 220-247.
- 鈴木淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, **65**, 34-41.
- 高林久美子・村田光二・埴田健司 (2007). 日本語版偏見抑制の動機づけ尺度の作成の試み (2) . 日本心理学会第 71 回大会発表論文集, 242.
- 高林久美子・沼崎誠 (2010). 女性による伝統的女性と非伝統的女性への偏見とステレオタイプの適用: 潜在レベルからの検討 社会心理学研究, **26**, 141-150.
- Wegner, D. M. (1994). Ironic processes of mental control. *Psychological Review*, **101**, 34-52.
- Whalen, P. J., Rauch, S. L., Etcoff, N. L., McInerney, S. C., Lee, M. B., & Jenike, M. A. (1998). Masked presentations of emotional facial expressions modulate amygdala activity without explicit knowledge. *Journal of Neuroscience*, **18**,

411–418.

- Wilson, T. D., Lindsey, S., & Schooler, T. Y. (2000). A model of dual attitudes. *Psychological Review*, **107**, 101-126.
- Wittenbrink, B., Judd, C. M., & Park, B. (2001a). Evaluative versus conceptual judgments in automatic stereotyping and prejudice. *Journal Experimental Social Psychology*, **37**, 244-252.
- Wittenbrink, B., Judd, C. M., & Park, B. (2001b). Spontaneous prejudice in context: Variability in automatically activated attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 815-827.
- Wittenbrink, B., & Schwarz, N. (Eds.). (2007). *Implicit measures of attitudes*. NY: Guilford Press.
- Zajonc, R. B. (1968). Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **9**, 1-27.